

43047

教科書文庫

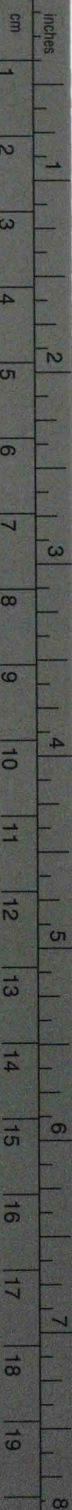
4
220
51-1908
20000 87009

Kodak Gray Scale



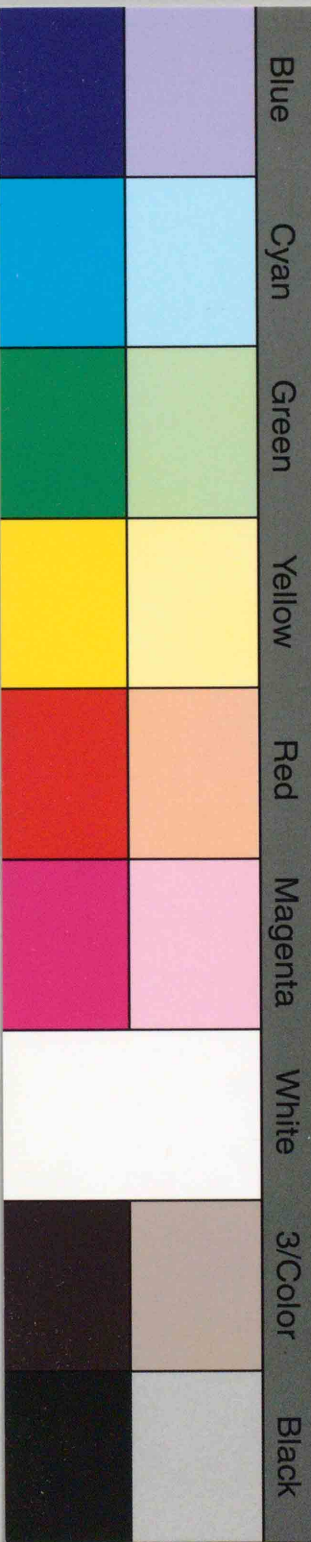
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書
4
220
51-1908
20000



長 突 資 料 室 言  
方 扇 庫 水 陽 后 符

教科書文庫  
4  
220  
51-1908  
2000087009

4a.  
220  
明41

日六月三年一十四治明

濟定檢省部文

書用科教科史歷校學中及校學範師

文學士中村久四郎著

修訂東洋歷史

東京

合資  
會社  
吉川  
和文館  
發行

広島大学図書

2000087009





# 修訂東洋歴史

## 例言五則

- 一、明治三十七年十月、拙者『東洋歴史』を公にせしに、幸に中等諸學校の教科書として採用せられ、數版を重ねるに至れり。本書は前書を修訂せるものにして、著述の目的及び篇章の大體等は、前書と異なれるをなし。  
但し、前書よりも有益なる圖畫を増加し、朝鮮の記事を比較的増加して、他の部分に略せる所あるを、并に日露戰役及び戰後の近事をも記せるは、本書と前書と異なる所の要點なり。
- 二、本書篇章の目次は、文部省より公布せられたる東洋史の教授要目に據り、稍、斟酌加減する所あり。
- 三、本書の鼈頭には、多數の小題目を掲げ、且つ本文中に見ゆる人名

地名等を記したり、是れ亦讀者の注意をよび、其了解を助けんと欲したるに外ならず。また各篇の末に各時代の大要を記したるは、之によりて以て各篇の事實を總括して、各時代の大勢を明にせしめんと欲してなり。

四、本書中の紀年は、皇紀を本とし、以て國史との關係を保たしめんを圖れり。但し明治以後に起りたる事實には、便宜上明治の年數を記したり。

五、本書に關する材料の選擇排列及び程度等につきては、なほ缺點あるを免れざるべし。大方諸氏の示教を賜はらんとを切に希望するものなり。

明治四十年十月三十日

中村久四郎識

# 修訂東洋歴史

## 目次

### 總說

第一篇 上古史	五—三四
第一章 太古の支那	五
第二章 唐虞三代	八
第三章 周の盛衰	二二
第四章 春秋及び戰國の世	一五
第五章 周代の學術	二一
第六章 上古の朝鮮	二八
第七章 上古の印度、佛教の興起	三九
上古史の大要	三四
第二篇 中古史	三五—一四

第一章	秦の一統、漢楚の争	三五
第二章	前漢の初世 <small>(高祖、呂后、文帝、景帝)</small>	四一
第三章	前漢の中世及び末年 <small>(武帝の大業、四夷の服屬、王氏の篡立)</small>	四三
第四章	後漢の初世 <small>(佛教の傳來、匈奴西域の叛服)</small>	五〇
第五章	後漢の末路、三國時代	五六
第六章	晉、五胡十六國	六一
第七章	南北朝時代、佛教文藝、三韓	六五
第八章	隋の興亡	七一
第九章	唐の初世 <small>(太宗の功業、武章の禍)</small>	七五
第十章	唐の制度	七八
第十一章	唐の外征、通商、三韓	八一
第十二章	隋唐時代の諸宗教、日唐の交通	八六
第十三章	唐の中世 <small>(開元の治、安史の亂)</small>	八九
第十四章	唐の末世 <small>(藩鎮官の滅亡)</small> 、五代の興亡	九二
第十五章	東方韓滿地方諸國の盛衰	九六
第十六章	宋の初世 <small>(宋初の内外、遼夏の迫侵)</small>	九九
第十七章	宋の中世 <small>(王安石の新政、遼金の興亡、宋の南渡)</small>	一〇三

第三篇 近古史

第十八章	宋の末世 <small>(宋金蒙古の關係)</small>	一〇八
第十九章	宋の儒學文藝と佛教	一一一
	中古史の概要	一一四

第一章	蒙古の勃興成吉思汗の武略	一一六
第二章	蒙古の南征及び西伐	一一九
第三章	世祖の大統一及び東侵の失敗	一二三
第四章	元の治亂	一二七
第五章	明の初世 <small>(太祖の創業、靖難の役、成祖の武功、文勳)</small>	一三四
第六章	明の中世及び末年	一三九
第七章	近古元明時代の朝鮮	一四三
第八章	蒙古人再盛 <small>(帖木兒の雄圖、莫臥兒帝國の建國)</small>	一四八
第九章	歐人東漸の初期及び天主教の東傳	一五一
	近古史の概要	一五五

第四篇 近世史

近世史の概要	一五七—二〇七
--------	---------

第一章	清朝開國	一五七
第二章	清朝の盛時	一六〇
第三章	清朝の制度學術	一六三
第四章	東洋に於ける蘭英佛諸國の競争	一六六
第五章	露國の東略清英露三國の關係	一六八
第六章	清と英佛二國との關係、長髮賊の亂	一七二
第七章	日清韓三國の關係及び日清の戰	一七九
第八章	日清戰後最近の東亞諸國	一八八
	近世史の概要	二〇七



# 修訂東洋歴史 目次終

## 修訂東洋歴史

文學士 中村久四郎著

### 總說

定義

定義 東洋史は、西洋史と相對して、世界史の一半を構成する普通歴史にして、東洋に於ける主要なる民族の盛衰、國家の治亂及び文化の發展に關する重要なる事項を叙述するものなり。

地勢人種 地と人とは、歴史といふ大活劇の舞臺と役者と、もいふべきものなり。今左に東洋史に關する地勢と人種とを簡單に説明して、以て本篇各章の記事を讀む者の便に供せん。

史上の地と人との關係

總說

(東方アジア)  
(東亞)

(1) Asia.  
(2) Altai.  
(3) Pamir.  
(4) Himalaya.  
(5) India.

(6) Hindukush.  
(7) Afganistan.  
(8) Belgistan.  
(9) Aral.  
(10) Turkestan.

(南方アジア)  
(南亞)

(11) Sirdaria.

(中央アジア)  
(中亞)

一、東方アジア。此地方は、一名太平洋方面東亞地方とも稱すべし。東は太平洋に面し、北はアルタイ、西はパミル、南はヒマラヤの三大山脈によりて包圍せられたる一帯の地方なり。支那及び朝鮮之に屬す。此地方は地理上及び文化上に於ける狹義の東洋地方にして、東洋史上最も主要なる地方なり。

二、南方アジア。此地方は、一名印度洋方面印度地方とも稱すべし。ヒマラヤヒンヅークシ二大山脈の南に横はれる前後兩印度アフガニスタンベルジスタン之に屬す。其中、前印度の歴史は、最も注意すべきものなり。

三、中央アジア。此地方は、一名アラル海方面露領トルキスタン地方とも稱すべし。パミルの西、ヒンヅークシの北、シル河の南に横はれる地方なり。其地位アジア大陸の中央に

(西方アジア)  
(西亞)

(北方アジア)  
(北亞)

(1) Persia.  
(2) Asia Minor.  
(3) Arabia.  
(4) Siberia.  
(5) Caspian Sea.

漢種

在るが故に、東西諸民族が互に逐ひつ逐はれつしたる轉々競争の場處として注意すべき處なり。

四、西方アジア。此地方は、波斯灣、地中海及び紅海方面にあり。波斯、小アジア、亞刺比亞等之に屬す。但し此地方は概して寧ろ西洋史と多大の關係を有する處なり。

五、北方アジア。此地方は、一名北氷洋方面西伯利亞地方と稱すべし。アルタイ山脈アラル海カスピ海以北の地方なり。此地方は、天寒く人少く、從來世界の大事に關する事少き處なりしも、近來漸くアジアの注意すべき地方となりつゝあり。

次に東洋史上に活動せるアジア人種の主なる諸民族の類別と、諸種族が史上に現はれたる特別の名稱とを記さん。

一、漢種



チベット種  
(西藏種)  
印度支那種  
韓種  
ツングース種(通古斯種)  
蒙古種  
土耳其種  
アリア種

二、チベット種……氏羌 月氏 吐蕃 西夏等。  
三、印度支那種……苗 越 南詔等。  
四、韓種……馬韓 弁韓 辰韓等の韓人。  
五、ツングース種……東胡 鮮卑 靺鞨 契丹 女真 滿洲等。  
六、蒙古種……蒙古等。  
七、土耳其種……匈奴 突厥 回紇等。

以上所謂黄色人種の外、白色人種の一派たる印度のアリア種族の如き、東洋史上に重大なる關係を有するものなれども、概していへば、白色人種は東洋史上の客位にあり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

世界最舊國の一

黄河水域

漢人種

苗人

第一編 上古史  
第一章 太古の支那

第一編

上古史

(今代より大約五千年前より皇紀四百)

第一章

太古の支那

建國開化の起源 支那はアジアの一大國にして、又實に世界最舊國の一なり。開國以來大約五千年を経たり。其建國開化の源は、東亞の二大河の一たる黄河の水域地方に起れり。而して其開化の早く發育したるは、實に漢人種の力なり。然れども、漢人種は支那固有の種族にあらず。蓋し今より五千年許り前に、中亞地方より支那の西北方に來り、遂に黄河に沿ふて東下し、次第に其地を占領し、當時既に江揚子河(黄河)の間に居住せる苗人等を東征南伐して、まづ北支那に建國するに至りしものなり。

支那の國名

支那は其國體本邦と異なり、古來屢主權者

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

中國中華

秦

漢唐

大清

1) Tsin.  
2) China.

三皇五帝

開化の次第

の革命興亡あり。政治上歴代の國號を有するも、自ら固有なる地理的國名なし。國人が自稱する所の中國。または中華は、對外自尊的の美號にして、國名にあらず。支那といふは、衆説に従へば、今より二千一百餘年前に全國を統一せる秦朝の威名遠近に震ひ、諸外國は秦を轉訛して支那と呼びたるなりといふ。また漢といひ、唐といふは、漢唐二代は歴代中の盛時にして、その國運頗る長久、その威名四方に傳はりしを以てなり。今大清といふは、現代の國號なり。

**三皇五帝** 支那太古の事は、世界諸國の太古と同じく、之を詳にし難し。太古は未だ統一の君なく、各其酋長を戴ける幾多の小部落諸方に割據せり。而して古傳説によれば、太古の漢人の族長に**三皇五帝**あり。

三皇の間、既に**火食、漁獵、牧畜、農耕**の業次第に起り、且つ**醫藥**

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

黃帝時代の領地と文化

新紀元

の術も始まり、**交易**の道も開け、漢人の國狀漸く進歩せり。次に五帝の第一に**黃帝**といふ英雄あり。今より大約四千五百年前に出で、屢兵を用ひて、諸部落を征服し、東は海より西は甘肅地方に及び、南は揚子江邊より北は直隸山西の地方に至る大地方を併せ、大に漢人の勢を輝せり。黃帝の時には諸種の文化も一進し、**官制**を定め、**衣冠**を制し、**舟車、貨幣**の造作あり、**音樂**の制定あり、東亞の一大名産たる**養蠶**の發明もあり、**史官**の設さへありたりといふ。かくて黃帝は**支那帝國**開國の祖とも稱せらる。

黃帝の次の二帝の時には、注意すべき事少し。五帝の最後の堯舜二帝の時代に至り、世運大に進歩し、支那の古史上に**新紀元**をなすに至れるを以て、特に之を次章に述べべし。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

第二章 唐虞三代

曆法  
九年の洪水

唐帝堯と虞帝舜 唐帝堯は陶唐(山西)に起り、天子となりて、平陽(山西)に都し、力を民政に盡し、曆法を定めて人民に授けたり。其晩年黄河の大洪水あり、治水の事を鯀に命ぜしも、九歳功なし。時に虞(山西)の人舜、孝悌を以て名あり。堯は之を擧



げて政を攝せしむ。かくて舜は鯀の子禹を以て父に代らしめ、卒に成功あり。舜(舜帝)は遂に天子となり、蒲坂(山西)に都し、禹、契、棄等の賢臣を用ひて、益政治を改良し、又四方に巡狩して、諸侯入

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

五教  
舜の文徳武功

朝の制を定め、漸く天子の主權を固くせり。又内は父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝の五教を明にして、人民を教導し、外は苗人を南征して、益漢人の勢力を張り、其文徳武功皆稱すべし。時の賢臣中、禹の功最も大なり。遂に帝舜につぎて天子となる。

唐虞の治

唐虞三代 かくて堯舜二帝に至り、漢人の國本益堅固なり。後の人特に之を稱して、唐虞の治といふ。此二帝の後に、夏殷周の三代あり。漢人建國の勢いよ、確定し、政治の發達、文化の進歩、大に觀るべきを以て、唐虞三代の稱あり。

夏殷周三代

禹の功勞

夏殷二代 禹既に天子となり、國號をたて、夏といひ、安邑(山西)に都す。禹は洪水を治めたる後、全國を九州に分ち、道路を修め、産業を興し、人民其功勞に悦服す。特に其勤儉は人の稱する所にして、孔子の如きは、之を賛して、禹は吾れ間然す。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

王位世襲の始

ることなしといはれたり。禹の子啓も亦賢なり。父につぎて天子となり、始めて王位世襲の制を開く。然るに其後桀王に至り、暴虐にして政を失ひ、遂に湯王に滅さる。(皇紀前一)夏は禹王より十七世四百餘年なり。

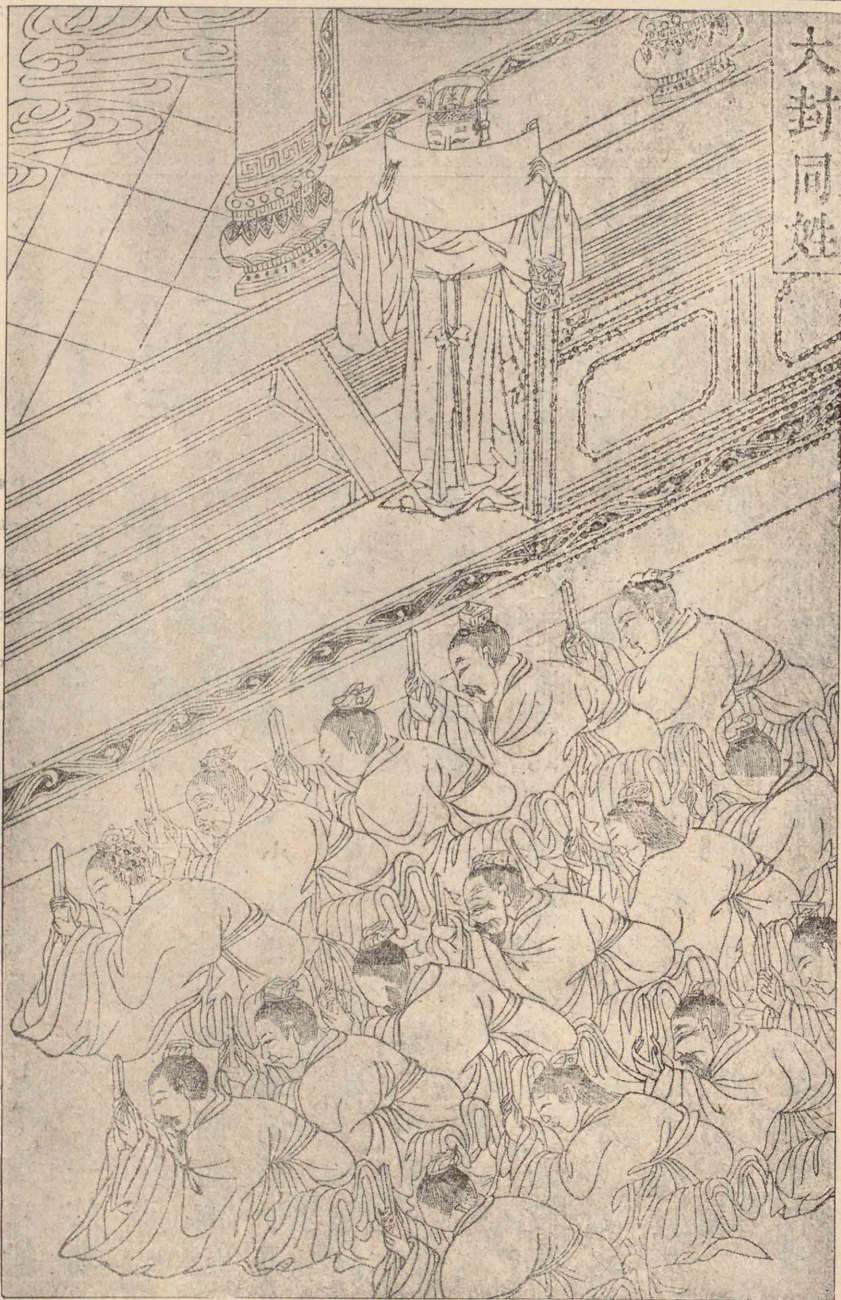
革命の始

一代二號

堯舜對桀紂

湯王は舜の名臣契の後なり。桀を伐ち、之に代りて天子となり、毫(河南)に都し、國を商と號す。其後殷(河南)に都したるによりて、又殷と號す。其後紂王は暴惡にして、庶兄微子、王族比干、大臣箕子の忠諫も其效なく、遂に武王に滅され、(皇紀前四)其末路前代に似たり。殷は湯王より三十世六百餘年なり。  
**周の興起** 武王も亦舜の名臣棄の後なり。相傳へて亶父に至り、岐山(陝西)の下に居り、始めて國を周と號す。其孫文王は殷の紂王の世に出で、西方諸侯の長となり、仁政を施して、民

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二



大封同姓

(周の武王諸侯を封ず)

周の盛衰  
王畿  
五等爵  
東西二都

文王武王  
周公の賢才  
東西二都

心を收む。其子武王は太公望を用ひて謀臣となし、遂に紂を伐ちて殷を滅し、天子となり、鎬京(省陝西)に都し、大に一族功臣を封して、王室の藩屏となせり。  
時に王畿即ち天子直轄の地は、主として今の陝西河南地方にあり。分封諸侯の爵は、封地の大小に従ふて公、侯、伯、子、男の五等に分たれたり。

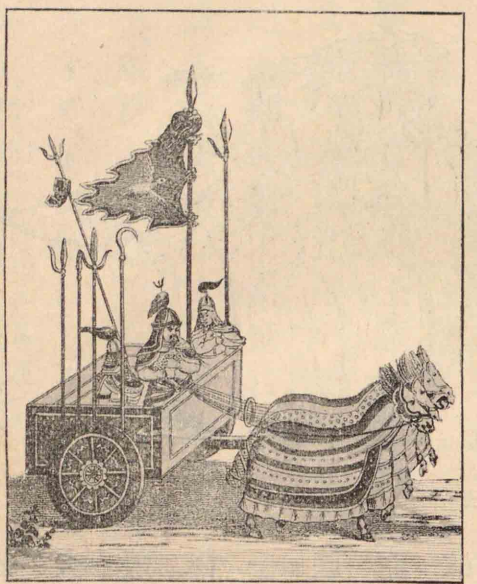
第三章 周の盛衰

周初の隆盛 武王の死するや、其子成王猶幼なり。叔父周公之を輔けて、政を攝す。周公は賢明多才、外は叛亂を征して、王室を固め、内は制度禮樂を制定し、文化燦然として、後世の模範となれり。此時又都を洛邑(省河南)に營み、西都鎬京に對して東都と名け、西都を以て王の常居となす。此二都は後世諸代

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

成康の際  
官制  
六官三公三孤  
大學小學

六藝



(古の代の兵車)

の國都となりて有名なり。成王の子を康王といふ。此二王の際には、天下太平、四十餘年の間刑法不用なりしと云ふ。  
周初の制度 當時、周の中央政府は、政務を分ちて天、地、春、夏、秋、冬の六官を置き、六官の上に三公三孤ありて、天子の顧問たり。六官の下には、大夫、士などの屬官あり。

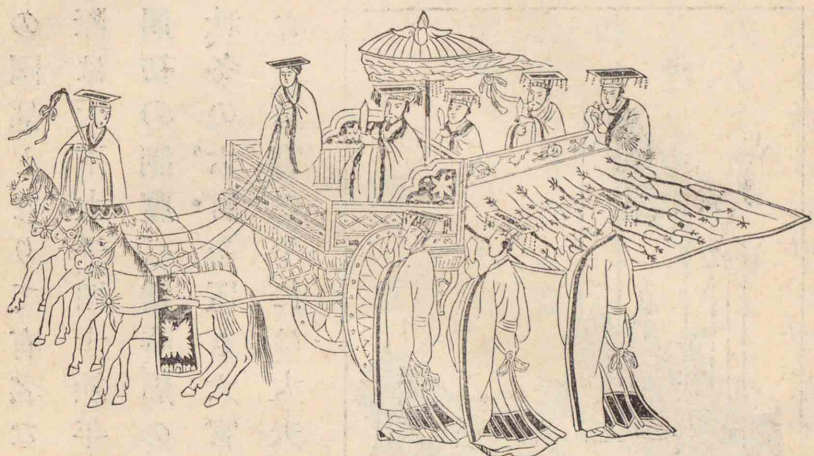
夏殷以來、國都には大學、郷邑には小學の設あり。周に至りて最も備はる。其盛時には、禮樂(德育)、射御(體育)、書數(智育)の六藝を教科とし、大學に於ては、修身、治國、平天下の大道を主とし、小學に於ては、洒掃應對の小事

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

軍制

伍兩卒旅師  
軍

宣王の中興  
幽王の失政



(古の代りの車)

を教へたり。次に軍制を考ふるに、周初は一般民間より兵士を徴集して、軍隊を組織し、五人を一伍、五伍を一兩、四兩を一卒、五卒を一旅、五旅を一師、五師を一軍と稱せり。而して天子は六軍を置き、諸侯は大小に従つて各等差あり。周の東遷 上記の如く、周初は天下太平なりしが、其後失徳の君あり、第十一代の宣王の時、周室中興の勢ありしも、其子幽王褒姒を寵して政を怠り、終に西

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五

犬戎の侵入

秦と西方の要地

弱肉強食の勢

十二國

方の犬戎といふ蠻族に攻め殺されしかば、幽王の子平王は犬戎を恐れ、輕しく西都鎬京を去りて、形勢不利なる東都洛邑に遷り、祖先以來の西方の要地を秦といふ一諸侯に與へたり。(皇紀前一〇年)之を周の東遷といふ。

### 第四章 春秋及び戦國の世

春秋の世 平王以後、大約三百年間を春秋の世といふ。是れ其間の事は孔子の手になれる「春秋」の書に記載せらるゝに由る。抑も周の初世には、大小の諸侯は千八百許の多數あり。然るに周の衰ふるや、諸侯互に併吞を事とし、平王の時に至り、唯百七十許を存す。かくて弱國は愈滅び、春秋の世、強國の存するもの、僅に二十許となる。其中魯、衛、晉、鄭、吳、燕(以上六國)、齊、宋、秦、楚、越(以上五國)の十一國は特に著名なり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五

尊王攘夷  
春秋五霸

桓公管仲の  
覇業

春秋の間は、王權上に衰へ、王命下に行はれず、諸侯互に相争ひ、夷狄漸く侵入す。是に於て、有力の大諸侯は尊王攘夷を名とし、王命をかりて、他の諸侯の盟主となれり。之を覇者といふ。其尤も大なるもの五人あり、之を春秋の五霸といふ。

**五霸** 最初に覇者となりしは齊の桓公なり。齊の地は今の山東省に在り。桓公は採鑛、伐木、漁業、製鹽、山海の利を以て富國を致し、武備を修め、王室を尊びて、諸侯の長となり、又夷狄を打ち攘ひし大功あり。其輔佐の名臣を管仲といふ。桓公の時は、實に我紀元前後の頃なり。

功業五霸に冠たる齊の覇業も、管仲と桓公相ついて死したる後は、内亂の爲に衰微せり。是より後、晉の文公は北方に起り、楚の莊王、吳王夫差、越王勾踐の三人は南方に起り、各一時中原の覇者となる。五霸とは即ち桓公以下の五人なり。五霸

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

東南の列國  
西方の秦

管仲の治術  
及び友道

臥薪嘗膽

多數の小國

は大體皆黃河大屈曲の東と南とに在り。前章の末に記したる秦は獨り其西方即ち今の陝西省地方にあり、大に其力を養ひ、東に向ひて列國に雄視せんとする状あり。穆公は春秋時代の秦の名君にして、西戎に覇たり。

春秋の間人才頗る多し、齊の管仲尤も有名なり、其治國はまづ實業を興し、  
 「倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱」といへり。管仲もと鮑叔と親交あり、仲常に「生我者父母、知我者鮑子也」といへり、所謂管鮑の交とは即ち是なり。春秋末に於ける吳越の對抗も亦有名なり。吳王夫差は其父讎を復せんと志し、朝夕薪中に臥し、出入に人をして「夫差而忘越人之殺而父邪」といはしめ、越王勾踐は會稽山の敗辱を憤慨し、膽を坐臥に懸け、之を嘗めて、「女忘會稽之恥邪」といへり。其謀臣范蠡も亦當時の一人材なり、治國と共に殖産を以て名あり、「天莫空勾踐、時非無范蠡」の二句は諸子の知る所なるべし。

**戰國七雄** 春秋の間、覇者たがひに興りて、多數の小國は愈

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

少數の大國  
重臣篡立

少數の大國に併吞せられたり。而してまた春秋の末より諸侯の重臣專横を極め、晉の重臣韓、魏、趙三卿は晉の地を分領して、遂に諸侯に列し、其後、齊の重臣田氏も亦其君國を篡ひて、諸侯となれり。かくて周の平王より大約三百年後の支那本部には、諸國の強大なる者七あり。秦、楚、燕、齊、韓、魏、趙の七國是なり。この七國は、二百年許の間、互に戰爭を事とせるが故に、七國を名けて戰國七雄と號す。周室其他の小國は、僅に七雄の間に残り存するのみ。之を要するに、春秋及び戦國の世は、秦の全國統一に至るまでの過渡時代なり。

戰國七雄

人才輩出

七雄競爭 七國は互に競爭して、各自國の強大を計り、之が爲に盛に智勇の人を得んことを力めたれば、戦國時代の人才輩出も亦注意すべき者あり。中にも、秦の商鞅、范雎、白起、楚の屈原、燕の樂毅、齊の孫臏、田單、韓の韓非、申不害、魏の吳起、趙

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

孝公と商鞅

の廉頗、藺相如等は、特に有名なり。

秦の富强 秦は、春秋の時、既に穆公一たび西戎に覇たり。戦國の初に當り、孝公は商鞅の政策を用ひ、特に農業を本とし、軍功を重んじたれば、國富み兵強く、且つ形勝の地利を利用して、東方の六國を壓せんとするの狀あり。

合從連衡 かくて富强なる秦に對する六國は、自から防禦的の地位に立ち、遂に合從連衡の說起れり。合從とは六國相合同して、秦に當るをいふ。雄辯の策士蘇秦始めて之を唱へ、六國に遊說して、遂に盟約の長となり、兼て六國に相となり、西の方秦を弱めんと謀りしも、六國が公約を重んぜざると、秦が離間策を施したるとによりて、合從忽ち破れたり。秦は六國合從の破れたるに乗じて、權謀の策士張儀をして、合從の不利を六國に遊說して、終に各秦に連和せしめたり。

蘇秦の合從說

張儀の連衡策

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三



六國の國是  
不定

之を連衡といふ。然れども、張儀一たび秦を去るや、連衡も亦破れたり。是より後、六國は策士の言に惑ひて、或は合従をなし、或は連衡をなし、國は一定せず、進退攻守共に其宜しきを失ひたり。

進略の國是

秦の統一 秦は六國に反して、歴世進略の國是を一定し、且

秦王政

つ廣く人材を外國に求めて國運を進め、戰國の晩年に至りては、范・雎の遠交近攻の策を用ひて、益、諸國を侵略し、秦王政に至り、李・斯の計を用ひて、諸侯を離間し、破竹の勢を以て疲弊せる六國を滅し、僅に空位を保ちたる周の王室も、六國の滅亡に先ちて、既に秦に滅されたれば、天下は終に全く秦の一統する所となれり。是れ實に皇紀四四〇年なり。而して周は武王より三十八世、八百七十餘年にして滅びたるなり。

秦の一統

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

孔子

第五章 周代の學術

上古の學術  
發展

人智の活動

世界の大型  
人

學術發展 支那上古の學術發展を考ふるに、堯舜の時、其根を植ゑ、夏殷の世、其芽を發し、周代に至りて、花を開きて、其美を競ふの狀あり。特に春秋戰國の世に及んでは、社會の變亂と共に、從來貴族世官の人々が獨占せし學問も、民間に波及し、思想も自由となり、且つ人材を求むること亦盛なれば、各自修養の學術を以て、世を救ひ身を立てんとする者四方に起り、人智の活動、非常に盛なる時代となれり。

孔子 孔子は、實に周代の學者中の偉人たるのみならず、世界全國の人類中に於ても、最も偉大なる人格を有する大聖人の一人なり。孔子名は丘、字は仲尼、春秋の末(皇紀一〇九九年)周公の封せられたる魯國に生る。其家もと貴し。然れども、孔子より

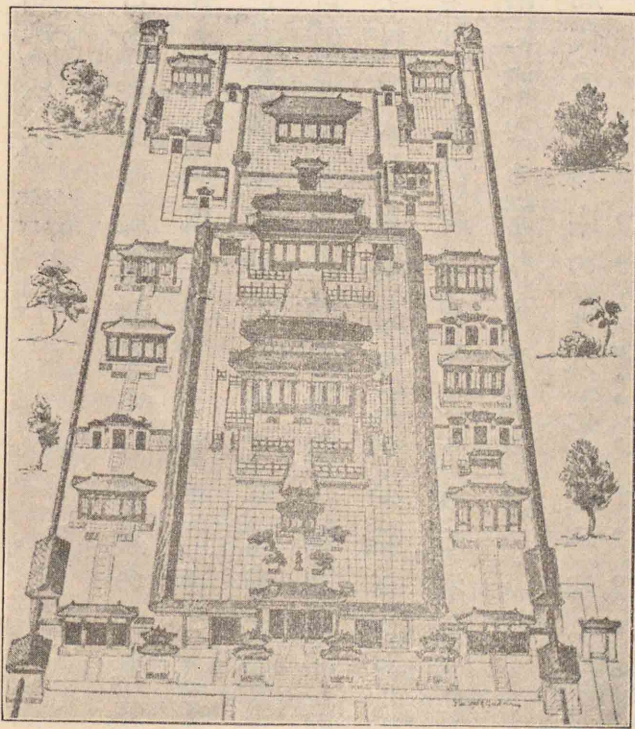
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

志學

數代前の祖先故ありて、宋より魯に奔り、降りて士となり、孔子の頃には、其家頗る貧賤なりしも、幼時より他の兒童と異なり、其遊戯にも常に禮儀を習ふの風あり。十五歳の時、學問に志し、苦學力行、會計牧畜の小吏となりしことあり。しかも好學の念非常



(像の子孔)



(廟の子孔るあに阜曲の魯)

九 八 七 六 五 四 三 二 一

學徳と趣味

に篤く、三十にして徳性堅く定まり、四十には不惑として義理の信念愈篤し。かくて其學徳の高きはいふに及ばず、多藝多才、音樂の趣味も人に優れたり。かつて帝舜時代の音樂を聞いて、其妙味に感動したる餘り、三月の間、食物の味を忘れたることあり。又其意志極めて強大にして、義を見て爲さざるは、勇なきなり」といひ、或は「身を殺して、以て仁を爲すことあり」といはれ、道の爲には一命も亦惜まざるの風あり。

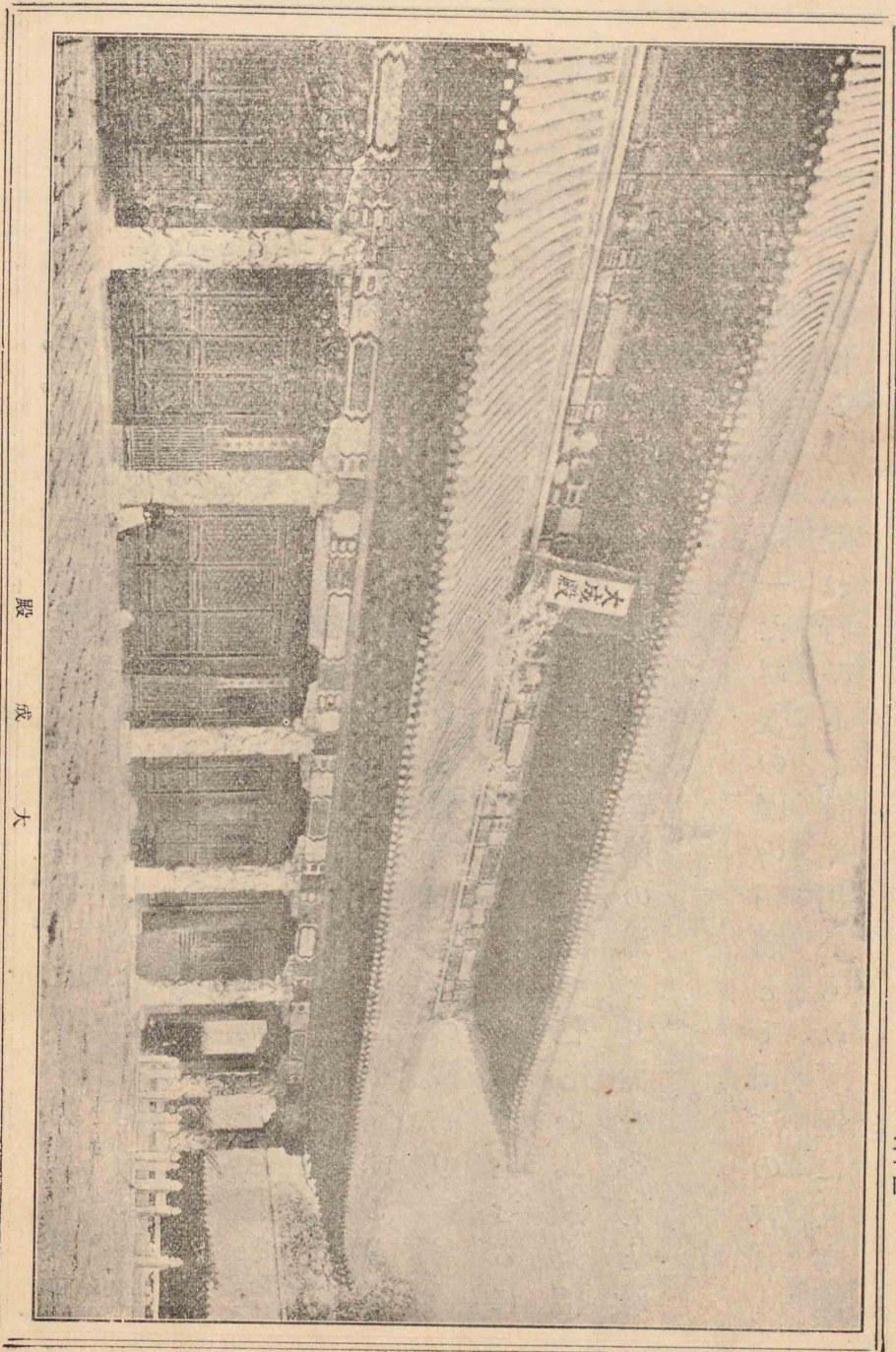
意志の強大

仁恕と孝弟

かくて修身治國の道を弟子に教へ、身を修め國を治むるには、仁恕を以て本とすべきことを説き、且つ仁といふ最上徳に達するには、最も手近かなる孝弟の道より始むべしと教へられたり。

其後、五十餘歳の時、一たび魯の國の司寇として司法の大官となり、宰相の事を兼ね行ひしも、長く用ひられず、遂に其本國

三 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一



大成殿

諸國遊歴

晩年の事業

儒教

弟子三千人

顔回最賢

心喪三年

孔里

聖廟

論語

を去り諸國を遊歴すること十數年の後、本國に歸り詩經、書經等の修正と春秋の著作をなすと、もに益、弟子の教育に盡力し、晩年に至るまで力學してやまず、七十四歳を以て歿したり。儒教は、實に孔子が大成したる道德教なり。

孔子の人を教ふる、諄々として倦まず。其弟子すべて三千人、其中六藝に通するもの七十二人あり。顔回最も賢なり。其不幸にして早く死するや、孔子は之を慟哭して、あゝ、天予をほろぼす、といへり。孔子の歿後には、門人は皆心喪の敬意を表すること三年。魯人の其墓の側に轉居する者百余家あり、名けて孔里といふ。後世其故堂に因りて廟を作り、孔子の衣冠、琴書を藏し、號して聖廟と爲す。

孔子の言行は、論語の書に詳なり。其教も、其當時には、其弟子の外には、廣く行はれざりしも、其歿後五百年許の漢の代の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五

先師至聖

頃より大に行はれ後世の人之を尊びて先師といひ至聖と稱し、つひに東洋道德の一大本となれり。

子思と孟子

其孫を子思といふ。また儒教の大家なり。戰國時代の孟子は學を子思の門人に受けたる者なり。孟子名は軻、魯の南にある鄒といふ國の人なり。其著書を孟子といひ、論語とならへて論孟の稱あり。孟子の所說中、性善說尤も名あり。又趙の人荀子あり。同じく儒教を説きしも、性惡說を以て名あり。

性善說

荀子あり。同じく儒教を説きしも、性惡說を以て名あり。

荀子の性惡

諸子百家 さて又孔子と同時代に、楚の人老子あり。自然無爲を主張し、其思想儒教と異なれり。列子、莊子等其說を傳ふ。

老子と列莊  
二子等の道  
家

此派の學者を道家といふ。其說亦頗る廣く世に行はる。

儒道二大教の外、楊子は自愛說を説き、墨子は兼愛說を唱へ、孫子、吳子は兵法を講じ、商鞅、韓非は法術を論ず。其他一家の說を立つる者多し。之を總稱して諸子百家といふ。

諸子百家

老子 列子 荀子 孟子 子思

漢字の起原

文字の發展

支那文字の起源は、堯舜以前にあり、象形即ち

草	行	楷	隸	篆	文	古
日	日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月	月
魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

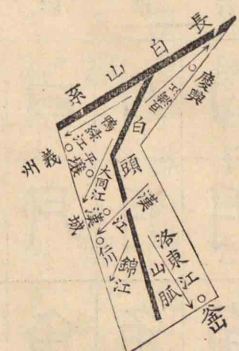
(表 字 文 今 古)

形體摸寫の畫的文字に始まり、上古の用字既に五千許り、其後、歴代増加して數萬字に至りしも、普通の常用の文字は千字以下なり。周以前は古文を用ひ、周初篆書の發明あり。周以後屢字體の變改あり、中古時代に至り、秦の時篆書の改良及び隸書の案出あり、漢以後楷行草の三體起れり、今便宜上茲に字體の變遷を表示せん。

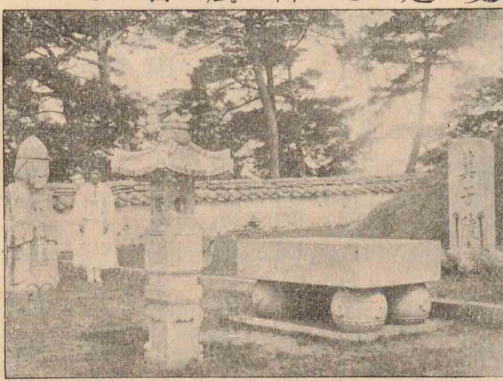
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

第六章 上古の朝鮮

日韓の關係



古朝鮮 朝鮮は古來我國と密接の關係あり、近年終に我國の保護國となれり。此半島國も古來屢變亂革命ありて、一定の國名なきこと、支那に似たり。朝鮮とは、東方の朝日鮮明の地なるにより、韓とは、其地古代支那人の所謂東夷に屬し、干夷の住地なりしが故に、干と同音の韓を以て古今の通稱となすものなりと云ふ。



(陵の子箕の壤平)

箕子と古朝鮮

其古史は未だ詳ならず、さきに周の武王の時、殷の王族箕子

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

世界の三聖  
印度の國名  
(1) India.  
(2) The Indus.  
(3) Aria.  
(4) The Ganges.  
印度人の起源

は古朝鮮の地に封せられたり。但し其地は今の半島に非ず。今の大同江と遼河との間の地なり。かくて箕氏はつひに今の平壤に都すること、四十一世九百餘年なり。

第七章 上古の印度、佛教の興起

釋迦の生國 釋迦は佛教の祖師にして、孔子及び基督と相並びて世界の三聖と崇拜せらるゝ者なり。其生國は印度にして、其時代は孔子と略同じく、基督よりは五百年許り前に生れたり。

上古の印度 印度は、支那と共に世界最舊國の一なり。其地名は、國中の大河印度河に本く。又天竺の稱あり、印度と其語源を同じうす。今より四千餘年前アリア人種の一派中央アジアより南下して、印度河邊の地に住し、其後次第に恒河地

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

印度と支那の類似點

- (1) Dravida.
- (2) Brahmanism.
- (3) Brahman.
- (4) Kshatriya.
- (5) Vaisia.

(6) Sudra.

衆生の渴望

宗教大革命

方に蔓延し、在來の土人<sup>(1)</sup>ドラヴィダ種を征服して、國を立てたるも、支那の上古、漢人が苗人を逐ひて、國を建てたると同様なり。かくて古代印度には、優勝のアリア人種と、劣敗の土人混住し、<sup>(2)</sup>ブラーマン教と稱する宗教行はれ、國民は其世業によりて、僧族<sup>(3)</sup>、王族<sup>(4)</sup>、平民<sup>(5)</sup>、奴隸の四階級に分たれ、僧族は最高位を占め、宗教學術を掌りて、最も勢力あり。次に王族は政治軍事に、平民は實業に、奴隸は諸種の賤業に従事せり。

**釋迦以前** 上記の階級制度は、印度の國運妨害の一原因たり。特に當時の僧族は教權と學術とを私して、他の三族を壓抑し、其弊害甚しかりしかば、社會衆生<sup>(6)</sup>は世を救ふ聖人の出で、宗教を革新せんことを渴望するに至れり。

**釋迦牟尼佛** この時に當り、釋迦出でて、新一宗教を開き、一大革新をなせり。その宗教は、即ち佛教なり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

- (1) Gautama Sidharta.
- (2) Kapilavastu.
- (3) Suddhodana.
- (4) Mahamaya.

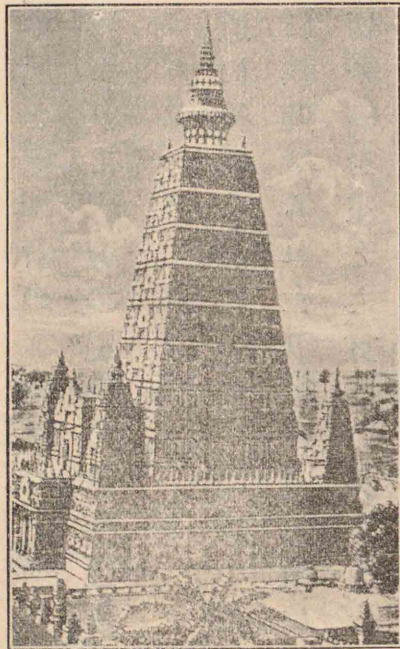
釋迦の父母

釋迦の本姓名を喬答摩<sup>(1)</sup>悉達<sup>(2)</sup>といふ。父は中印度の<sup>(3)</sup>カピラ國の城主スドダナといひ、母は<sup>(4)</sup>マハマーヤと稱せり。皇紀九七一年、西紀前五六四年頃に生る。少時より深く人生の無常を感じ、衆生濟度の<sup>(5)</sup>大念を起し、三十歳の頃、終に宮殿を出でて、山林に入り、難行苦心するも、凡そ六年にして無上の眞理を悟りたり。之を成道<sup>(6)</sup>又は成佛といふ。

一 二 三 四 五 六 七



(釋迦誕生)



(佛陀耶に於ける) 釋迦の成道地

- (1) Buddhagaya.
- (2) Sakya Muni Buddha.
- (3) Magadha.
- (4) Bimbisara.

成道の靈地は、實に佛陀伽耶<sup>(1)</sup>にある菩提樹下なり。かくて釋迦とは元來種族の名、牟尼とは賢者の義、佛陀<sup>(2)</sup>（單に佛と）は眞理を悟りたる者の義によりて、釋迦牟尼佛の尊稱起り、其教を佛敎といふ。

釋迦の説教  
一切平等

釋尊一生の  
四時期

**佛敎興隆** 釋迦は、成道の後四十餘年の間、中印度の各地に説教し、諸階級の人々に歓迎せられたり。是れ其佛敎はブラーマン敎と異なり、一切平等を主とし、貴賤の別なく、正道を修行せば、皆成道成佛し得べしと説きたればなり。特に中印度のマガダ國王、ビンビサーラの如きは最も熱心なる信者の一人となり、大に釋迦に補助を與へたり。

- 一、未婚修養の時期……降誕より十九歳頃まで。
- 二、結婚家居の時期……十九歳頃より三十歳の頃まで。

阿育王

- (1) Asoka.
- (2) Ceylon.
- (3) Birma.
- (4) Greece.
- (5) Alexander the Great.

アレキサンダー大王印  
度遠征

三、出家成佛の時期……三十歳の頃より六年許。  
四、説法布教の時期……大悟成佛の後四十餘年の四時期に分れ、晩年に至るまで、衆生に説法し、諄々として倦まず。皇紀一七六年の頃、八十許の高壽を以て歿したり。かくて佛敎は次第に流行したるも、釋尊の死後二百年許は未だ盛に行はれず。マガダ國王阿育王<sup>(1)</sup>（自三九二<sup>(2)</sup>至四一三<sup>(3)</sup>）が厚く佛敎に歸依し、熱心に之を奨励保護せしかば、印度國內は勿論中亞諸國<sup>(4)</sup>、セーロン島<sup>(5)</sup>、ビルマに至るまで傳播して、漸く世界の一大宗敎となれり。

**外人侵入** 印度は古來小國分立して、政治上の統一と勢力を缺き、屢、外人の侵入を破れり。阿育王の祖父の時、希臘のアレキサンダー大王は、東征の極、遂に西北印度に入れり<sup>(三三)</sup>。是に於てか印度文化と希臘文化との交渉起り、東洋史上に

於ける影響亦少からざるなり。

### 上古史の概要

上古史上、**支那**は太古漢人の移住三皇五帝の傳説古史時代より夏殷周の三代を経て、秦の全國統一に至り、漢人膨張の第一期をなし、其間支那風の文化大に發達せり、儒教及び道教の先師たる孔子と老子との出生も此間に在り。**朝鮮**には箕子の建國あり。**印度**に於てはアリア人種一派の南下より、アレキサンダー大王の遠征に至る、其間釋迦の誕生、佛教の興起あり、なほ此間に於ける漢人革命の大勢は左の如し。

太古—三皇—五帝—夏—殷—周

(春秋戰國)

秦(統一)

一 二 三 四 五 六 七 八 九

## 第二篇

### 中古史

(皇紀四四〇年より一八五〇年頃に至るまで、大略一千四百年間)

#### 第一章 秦の一統、漢楚の争

東洋の一英主

尊號尊稱

新政

**始皇帝の新政** 秦王政は、東洋史上の一英主なり。其六國を滅して、支那本部統一の君となるや、自ら**始皇帝**と號し、戰國以來の國都たる**咸陽**(陝西)に都す。皇帝の尊號はこの時に始まり、**朕**といふ天子の尊稱も亦始皇帝より始まれり。始皇帝は大に政體を改め、中央政府には**丞相**、**太尉**、**御史大夫**を置きて、全國を直轄し、地方には、封建を廢して、**郡縣**の制となし、全國を三十六郡に分ち、各郡に**守**、**尉**、**監**を置けり。帝は又全國の兵器を沒收し、富豪を咸陽に集め、度量衡を統一し、文字を改め、(二七)壯麗なる宮殿を造り、道路を修め、交通を便にし、屢地方に巡幸して、盛に朝廷の威嚴を示し、大

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 二〇 三

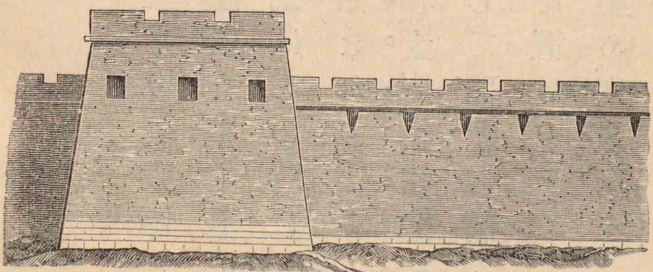


に中央集權と全國統一の事に盡力せり。時の丞相は即ち李斯なり。

(1) Hiung-nu (Hunnen.)  
匈奴

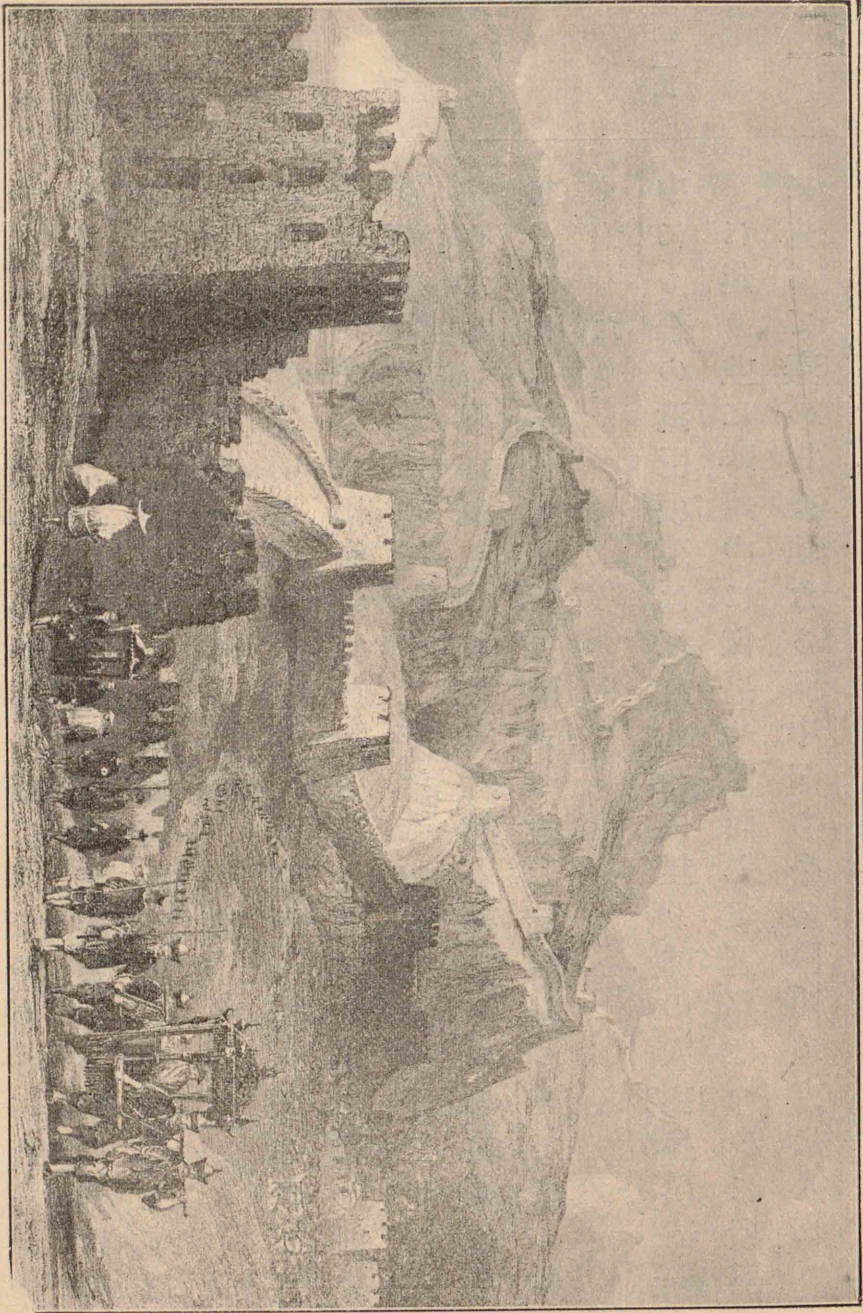
萬里の長城  
南越

**始皇の外征** 帝は内に向ひて帝威を示すと共に、外に對しても大に國威を輝せり。時に戰國以來支那の北邊を騷がしたる匈奴といふ北狄は、益南侵の勢あり。帝乃ち將軍蒙恬に大軍を授けて、匈奴を北征せしめ、且つ北邊に長城を増築して、其侵入を防げり。是れ即ち有名なる萬里の長城なり。なほ又帝は南の方南越(今安南地方)をも征したれば、秦の威名は遠く四方に振ひたり。  
**燒書坑儒** かくて帝の内外の事業は大なりしも、其費用も亦多く、國民は其負擔に苦



(長城の構造)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三



(萬里長城)

非常過激の手段

しみ、又遠征に疲れ、不平の學者或は其急激なる新政を非難する者ありしかば、帝は李斯の議を用ひ、醫藥卜筮農業以外の民間の書籍を焼き、遂に儒生四百六十餘人を坑殺して、以て異論を鎮壓せんとせり。

**群雄の蜂起、秦の滅亡** 是に於て全國漸く秦の政を厭ひ、且

つ秦を怨める六國の遺臣の隙を窺ふ者ある時に際し、創業の英主始皇帝は、一統後十二年、巡幸中に死し、少子二世皇帝嗣ぎたるが、不肖の君にして、宦者趙高權を恣にし、益、暴政を行ひたれば、楚の人陳勝、吳廣まづ叛し、群雄相つぎて蜂の如く起りたり。

中にも、楚の遺臣項羽は江東(江蘇省)に起り、沛の人劉邦は沛(江蘇省)に起り、並に群雄中に傑出せり。而して劉邦はつひに項羽に先ちて秦の根據地たる關中即ち今の陝西地方に入れり。

項劉二氏

始皇の遠逝

劉邦

大言不中

時に二世皇帝は既に趙高の爲に弑せられ、秦王子嬰位に在り、出で、劉邦に降り、かくて始皇帝が二世三世とかぞへて、萬世に至り、之を無窮に傳へんと大言したる秦の天下も、帝の死後僅に三年にして滅びたり。(四五)

**漢楚の争** 劉邦既に秦を滅したる後、簡易の政を行ひて、民

鴻門の會

心を收めたるに、後れ至りたる項羽は劉邦の功を忌み、謀臣范增の謀に従ひ、鴻門(咸陽の東)に會し、之を殺さんとせしが、劉邦は幸に其難を免る。時に項羽の勢甚だ盛なり、擅まに諸將を分封し、劉邦は之に由りて巴蜀(四川省)漢中(陝西省)の僻地を得て、漢王となり、而して項羽は東に還り、彭城(江蘇省)に都し、自ら西楚の霸王と稱す。

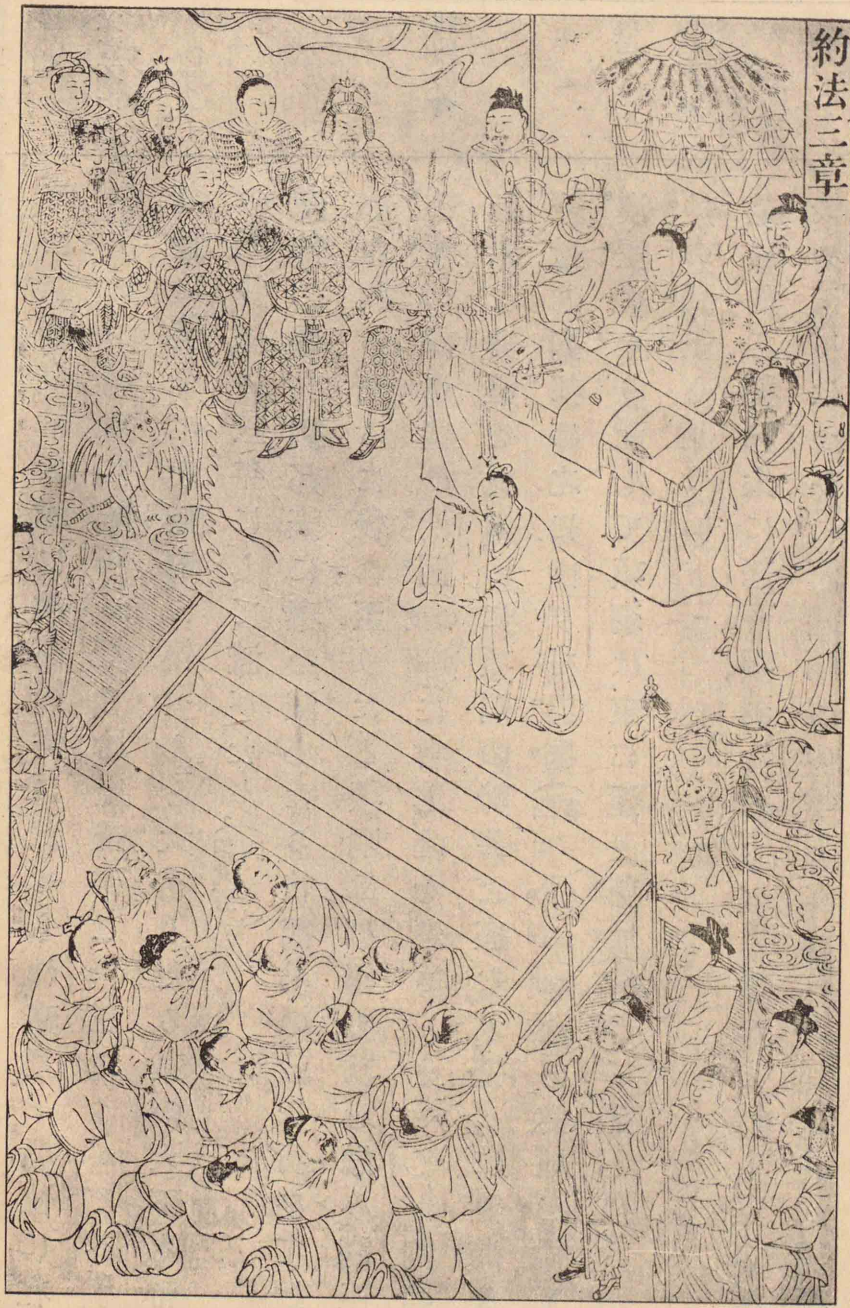
漢王

西楚の霸王

是に於て劉邦大に怒り、項羽と天下を争はんと欲し、秦の滅後の天下はつひに漢楚兩雄の争となれり。劉邦は其武勇項

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

約法三章



(劉邦簡易の政)

漢の三傑

最後の勝利

漢の高祖

項羽の慷慨  
悲歌

羽に及ばざるも、蕭何、張良、韓信の三傑及び陳平等を善用し  
たるに反し、項羽は謀臣范増を失ひ、分争五年の後、項羽は終  
に垓下(安徽省)の戦に大敗して自殺し、劉邦は最後の勝利を占  
めたり。劉邦乃ち皇帝の位に即き、長安(今の錦京)に都せり、之  
を漢の高祖とす。(四五)

項羽垓下に圍まるゝや、四面皆楚歌するを聞き、驚いて「漢皆已に楚を得た  
るか、何ぞ楚人の多きや」といひ、慷慨悲歌して、「力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅  
不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」といひしに、左右の人も皆泣いて能  
く仰ぎ視るものなかりしといふ、騅は羽の駿馬にして、虞氏は其寵姫なり。

第二章 前漢の初世 (高祖、呂后、文帝、景帝)

漢土漢人 漢代は合計四百餘年間繼續し、其威名内外に振  
ひ、後世に傳はり、漢土漢人の名は、支那及び支那人の別號と

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

なるに至れり。

王族分封

高祖 高祖は微賤より起り、善く人材を用ひて、終に帝位に登りしが、晩年に至りては、豪傑の功臣を忌憚して、多く之を誅戮せり。而して帝は又秦か孤立して、早く滅亡したるに鑒み、子弟同姓を諸方に封じて、以て帝室の藩屏となせり。然るに、諸王の地、廣大に過ぎ、遂に諸王反抗の禍源を作れり。

漢初内亂

呂氏 高祖の子惠帝の時、母后呂氏は、高祖の創業以來、内助の功ある女傑なるを以て、實權を握り、惠帝の死後、呂氏の一族は帝位を篡はんを圖りしが、周勃、陳平等王族の助をかり、呂氏を滅して漢室を保全せり。

仁君文帝

文帝景帝 惠帝の後、上記の二帝相つぎて立てり。二帝共に漢朝の國本を固めたる良主なるが、特に文帝は賢明の仁君にして、刑罰を寛にし、儉約を行ひ、農業を勵まし、屢田租を除

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

きたれば、吏民安樂し、國庫富裕となれり。次に景帝の世には、諸王の反抗を平定して、高祖以來の禍源を除き去れり。

第三章 前漢の中世及び末年(武帝の大業、四夷の服屬、王氏の篡立)

文武内外の功業

武帝の大業 景帝の子武帝は、東洋の一英主なり。文景二帝豊富の後をつぎ、文武内外の功業、古今に稀なり。今左に其大略を述べん。

儒教尊重

文教 漢初は、秦の暴政と其滅後の争亂をうけて、文教未だ盛ならず。武帝に至り、時の名儒董仲舒の建議を用ひ、特に儒教を尊重して、益儒教が支那政教の大本たるの基を固め、ついで大學を興し、五經博士を置き、又廣く古書を集めたり。なほ又帝は大平を裝飾する文藝を好みたり。帝の世には、儒家文士の名家少からず。大儒には、董仲舒の外に、孔子の後たる

大儒文豪

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

孔安國あり。文豪にては、司馬遷、司馬相如尤も名あり。司馬遷はまた特に史才あり、其著はせし史記は、有名の大著にして、修世修史の一大模範となれり。

武德 武帝は文教に注意するとともに、又武事を好み、外征の武功甚だ大なり。

東方經略 漢の東北には、古朝鮮あり。第一篇に述べたるがとく、箕氏茲に君臨して、九百餘年に及べり。漢の初め、燕(直隸省北)の人衛滿其地に入り、箕氏第四十一世の君箕準を逐ひ、自立して朝鮮王となれり。然るに、其孫衛右渠に至り、武帝の招諭を拒みしかば、武帝は之を征服して(三五)其地に漢の四郡を置けり。時に、半島の南部には、馬韓(京畿忠清全辰韓道慶尙東弁韓慶尙南道)の三韓あり、漢と三韓との交通起ると共に、三韓と交通せる我國人と漢との交通も、亦從つて開けたり。爾

箕氏朝鮮  
衛氏朝鮮

漢の四郡

三韓  
和韓漢三國の關係

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五

漢朝對匈奴

來、其地理上我國と支那との間にある朝鮮には、和漢關係の事件頗る多く、文物相傳の事も亦少からざるなり。

北方經略 北方匈奴は漢の大敵なり。さきに匈奴は秦の威を避けて、一時遠く北方に退きしが、漢の初、匈奴の單于(匈奴君主)義(義)に雄傑なる冒頓あり。東は滿洲族の東胡を滅し、西はチベッ

ト族の月氏を逐ひ、北方統一の猛威を以て、南下して漢に寇せり。高祖嘗て之を親征し、却つて平城(山西省)の包圍を被り、屈辱的の和親を結ぶに至り、匈奴は益漢を侮る風あり。かくて

武帝は對外國威の久しく振はざるを慨き、匈奴を伐ちて、數世の恥を雪がんと欲し、屢匈奴を擊破して、終に内蒙古の地

を取れり。衛青霍去病は時の二大將軍なり。

張遠使 張騫は時の一大冒險家なり。是より先き月氏は匈奴に逐はれて、西に遷り、葱嶺の西、中亞の地に於て新に大

(1) The Pamir. 終に内蒙古の地を取る二大將軍

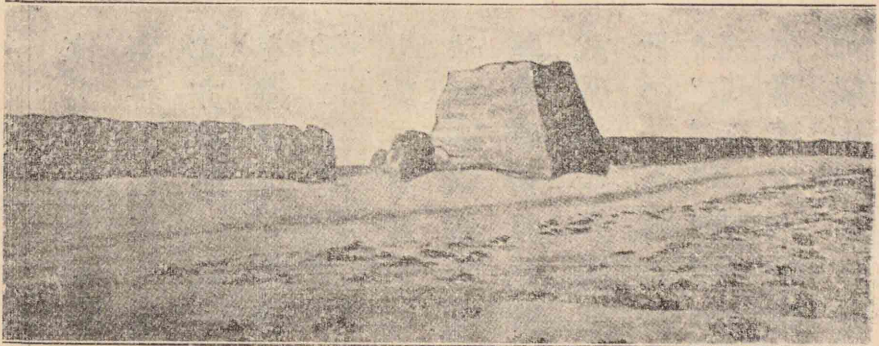
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五

武帝の遠交  
近攻策

往復十三歳

漢人始めて  
西域中亞及  
び印度の形  
勢を知る

東亞文物史  
上張騫の功



(城長の近附州甘な南西漠沙ビゴに并野廣部北西那支)

月氏國を建てしを以て、武帝は遠く大月氏と同盟して、近く匈奴を挾撃せんと圖る。張騫奮つて遠使の途に上り、艱難辛苦、往復十三歳を経て歸國せり。然るに、大月氏は既に肥饒の新領土に安堵して、復讎の志なきを以て、使命を達するを得ざりしも、張騫の復命によりて、西域中亞及び印度の形勢は、始めて漢人に知られたり。張騫は再び使者となり、大月氏の隣國烏孫國と同盟して、匈奴の勢をそぐを得せしめたり。

張騫の遠使は支那の物産文化史上にも注意すべき事なり。葡萄、苜蓿、胡麻、胡桃、胡瓜、石榴等は、張騫が

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

始めて遠使の西方諸國より支那に携へ來りし者なりといふ。葡萄のごときは、明に希臘語のポトルスの漢字音譯にして、ポトの上二音を譯して、下のルスを略したる者なり。

### 東西交通

張騫二回の遠使によりて、漢と西方諸國との交通開けたり。其後武帝は又將軍李廣利をして葱嶺の西を遠征せしめ、漢威西方に震ひ、交通益便なり。當時葱嶺以西の諸國は、アレキサンダー大王の遠征以來、希臘の文物を傳へたるを以て、是より後、其土地の珍品奇物と共に、西方の希臘的の文物も、亦從つて漢土に傳來して、東亞文物の發達を助けたり。而して又支那の事情及び物産も、亦漸く西方に傳はれり。

### 南方經略

さて又武帝は南越を伐ちて、今の廣東廣西安南地方を平げ、更に漢人の勢力外たりし西南夷(今の雲南貴州及び四川一部)

南越及び西  
南夷征服

漢軍葱嶺を  
越ゆるの始

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

漢代最盛時



(鏡銅青古の章唐葡葡の響影的朕希)

多事の爲め、財政困難となり、民間疲弊して、盜賊處々に起り

をも征伐して、漢の版圖を擴めたり。  
**武帝の版圖** かくて武帝時代の漢の勢力範圍は、非常に大となり、東は朝鮮より、西は天山南路に達し、北は内蒙古より、南は安南地方に及び、漢の威名四方に輝きたり。  
**民力疲弊** 但し、武帝の晩年には、多年内外

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

中興の良君

しも、幸に大變なきを得たり。  
**民力休養** 武帝在位五十四年にして崩し、昭帝、宣帝之につぐ、二帝の世は、務めて民力の休養をはかりたり。特に宣帝の時には、賢相良吏輩出し、國內善く治まり、中興の良君と稱せらる。

**對外又成功** 宣帝は、民力休養の後、武帝の業をつぎて、又匈奴を征伐して、其一部を降し、終に今の天山南北路地方をし

西域都護

單于入朝

て漢に歸服せしめ、鄭吉は始めて西域都護に任せられて、同地方を統監せり。なほ又宣帝の次なる元帝の時には、匈奴の呼韓邪單于漢に入朝して、和親を乞ひ、漢の宮女王昭君を得たる事あり。此後單于是漢の甥と稱して、臣服の姿あり。  
**漢朝中絶** 然るに、元帝以後數代は、宦官外戚勢力を有し、政權を弄して、漸く内政を亂す。特に外戚王氏の一族最も甚し。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

王莽の僞善

新

其中にも、王莽は陰に野心を有し、陽に恭儉を装ひて、世を欺き、賢才と交りて、巧に人心を収め、終に第十一代の平帝を弑して、自ら帝位に即き、國を新と號せり。(八六六)かくて高祖より二百餘年を経て、漢朝は一時中絶せり。

漢朝再興

然れども、王莽は即位の後、急に諸般の制度を變更せしより、内は人民其業に安んぜず、外は匈奴及び西域諸國之に服せず。かくて天下騒然として兵亂四方に起り、王莽は終に敗死せり。新の國運僅に十五年なり。時に、四方の群雄中、景帝の後たる劉秀の威望最も高きを以て、劉秀は遂に天子となり、洛陽に都し、諸方の群雄を平定して、(六六九)中絶の漢室を再興せり。之を後漢の光武帝となす。

王莽敗死  
劉秀の威望

第四章

後漢の初世

(佛敎の傳來、匈奴西域の叛服)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

漢朝復興の勢

西域に於ける班超の功名

國運復興

漢室再興の英主光武帝は、王莽惡政の後をうけ、又久しく兵事に勞したれば、天下平定後は、官民上下の休養に注意し、又學校を興し、節義を勵ませり。かくて後漢の學術は復興し、節義の士も亦多く後漢の世に出でたり。帝の後、明帝、章帝の二代も、亦よく光武の業を繼ぎ、漢の國運復盛となり、外國と交渉の事件續いて生ずるに至れり。

後漢の外征班超の遠畧

前漢の西方遠征以後、漢人の西方經略は久しく振はざりしが、明帝以後、漢人西征の勢再び勃興せり。後漢の初、匈奴は南北二部に分れ、南匈奴は早く漢に内附し、北匈奴は稍強くして、漢に反抗したれば、明帝以後、屢之を征し、又班超を西域に遣はし、恩威を以て西域諸國を鎮撫せしめたり。かくて漢朝の威は、遠くカスピ海の邊に及び、是に於て、漢朝は又西域都護を天山南路地方に置き、班超

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二



班氏兄妹

を以て都護となせり。(七五)

班超外に在る事三十餘年、其間は漢人の勢また西方に盛なり。班超の武功かくの如く大なるに對して、其兄班固は文章と修史とを以て名あり。其著漢書は史記と共に有名なる歴史なり。又其妹班昭も女徳と文學とを以て有名なり。

匈奴西定鮮卑興起

西域既に漢に降り、北匈奴の勢愈振はず。漢は之に乗じて、頻に之を攻めたれば、其餘衆は遂に遠く西アジア方面に逃れ去れり。而して彼等の故地には、滿洲族の一種たる鮮卑族來りて之を占領し、漸く北邊の強大部となれり。

東西交通

かくて漢人の勢は、西の方遠くカスピ海邊に達せる時に當り、西洋に於てローマ帝國は地中海沿岸諸國を占領し、東洋の漢と相並びて、東西の二大帝國たり。而して漢

(1) Roman Empire.  
東西二大帝國

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

海上東西の交通

(1) Marcus Aurelius Antonius.  
(2) Tongking.

三國鼎立

はローマの強大をきき、ローマは漢の豊富にして、美しき絹の産地たる事を知り、將に二大帝國の直接交通を見るに至らんとせしも、中間にある國の爲に之を妨げられたり。然るに後漢の末に至り、ローマ帝アントニウス(六八)の使者は印度洋を経て、後漢に通ぜり。(六八)是より後、西方の商船は今の東京地方に來航して、通商を營む者あり。

朝鮮半島

さてアジア大陸のかく多事なると共に、半島にも記すべき事少からず。前漢の武帝の時、古朝鮮を征して、漢の四郡を置きたるが、前漢の末に至り、滿洲人種南下して、一部は鴨綠江上流地方に高句麗國(或は單に高麗といふ)を立て、(六二)一部は更に南して半島南部の西半に百濟國を立て、(六四)而して又其東半部にある古の辰韓の一部は新羅國を立て、(六〇)亦次第に強大となれり。かくて朝鮮は高麗、百濟、新

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

三國の都

加羅

任那日本府

羅の三國鼎立時代となれり。以上三國、或はまた三韓ともいひ、或は後三韓といふ。三國中、北方の高麗は、終に略古朝鮮の故地を有して、支那に近く、百濟と新羅は南方に分立して、我國に近し。

又三國中、新羅は常に今の慶尙道の慶州に都し、高麗の都は一定せざりしも、多く今の平安道の内に都し、平壤に都せる事尤も久し。百濟の都も亦定まらざりしも、常に今の忠清道の内にあり。

なほ又後漢の初に當り、古の弁韓の地に加羅國起りたり。是れ即ち我垂仁天皇の時に任那の國號を賜はり、つひに任那の日本府を置かれたる地方なり。

**日漢交通** また後漢の初には、我九州地方と支那との交通も行はれ、九州の土豪の中には、後漢の朝廷より國王の金印

三三二二〇九八七六五四三二

佛教の東傳

カニシカ王

- (1) Kanishka.
- (2) Kashiapmadanga.

白馬寺

を受けたる者もありし事は、諸君の知る所なるべし。

**佛教東傳** さて又茲に後漢の初に起りて、東洋諸國に重大なる關係を共有する一大事件あり。上古史上に記したるが如く、佛教は阿育王以後、中亞地方にも行はるゝに至りしが、中亞の大月氏は、後漢の初、迦膩色迦王の時に至り、勢頗る強大、其領地は北西兩印度より中亞及び天山南路に亘り、王も亦佛教を信じて、其布教に盡力したれば、佛教は漸く天山南路にも傳來せり。時に後漢の明帝は西域と交通して、佛教の事を聞き、使者を發して、大月氏より高僧迦葉摩騰を伴ひ、佛像佛經を携へ來らしめ、洛陽に白馬寺を建てたり。(七二)是より後、佛教は漸く支那に流



(天山南路に於て發掘せる古代佛像)

三三二二〇九八七六五四三二

行し、やがて朝鮮及び我國にも次第に傳播せり。

### 第五章 後漢の末路、三國時代

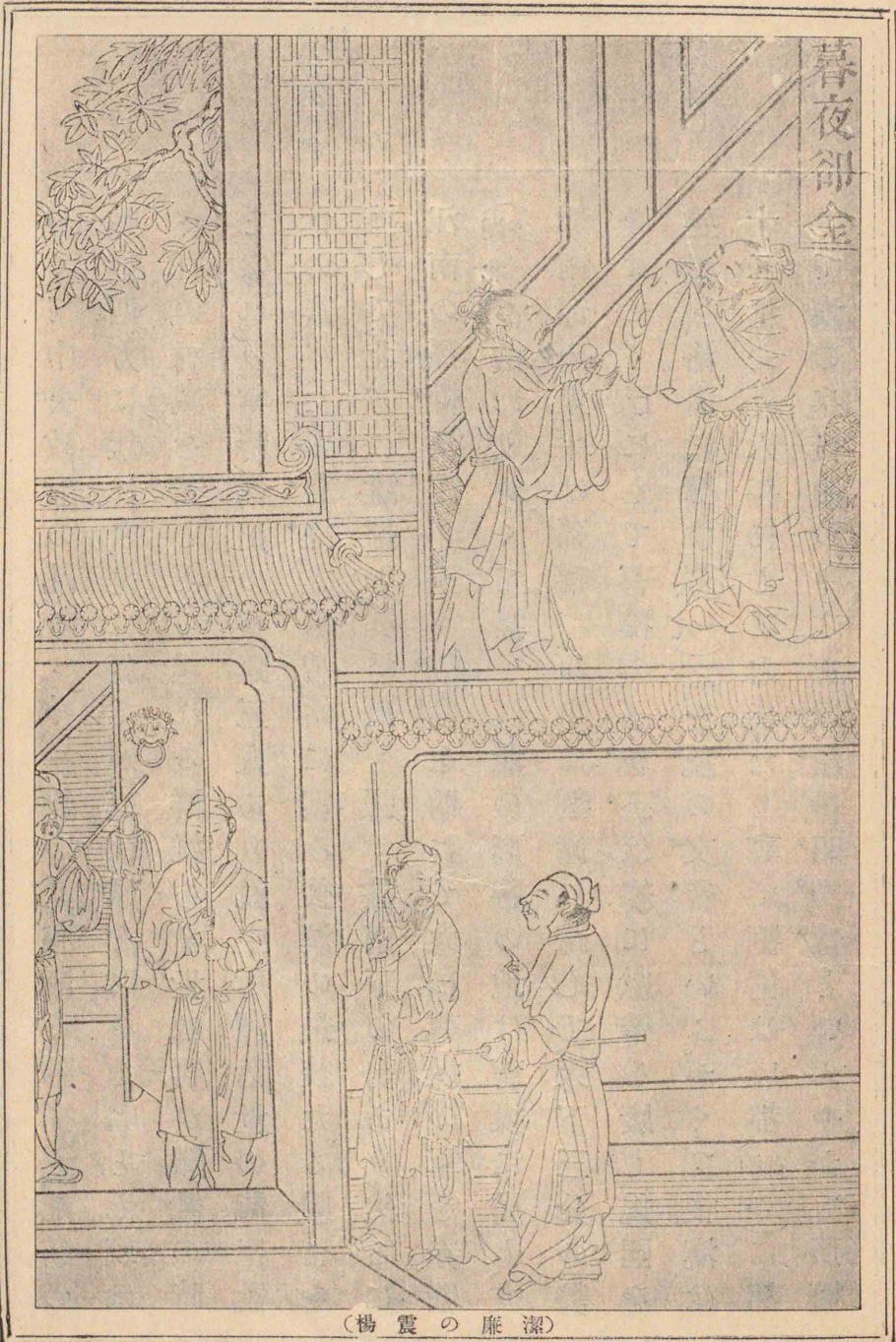
**後漢の末路** 後漢の初世は、國運隆盛なりしも、其後の諸帝多くは幼弱にして、外戚宦官權を弄ぶと、猶前漢の末の如し。かくて宦官の專横尤も甚しきに及んで、氣節を尙へる後漢の名士は、盛に其非を責め、其罪を攻めしかば、宦官は節義の士を目して黨人となし、皆之を禁錮せり、之を黨錮の禍といふ。

楊震は後漢の名士の隨一なり、其性極めて廉潔、かつて郡守となるや、ある夜、人あり金を贈り、暮夜知る者なしといひて、金を受納せんことを勧めたるに、楊震は、天知地知、子知我知、何謂無知、といひて、之を却けたり。所謂楊震の四知として、史傳に有名なり。

名士の奇禍

楊震の四知

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二



暮夜卻金

(楊震の廉潔)

曹操孫權劉備

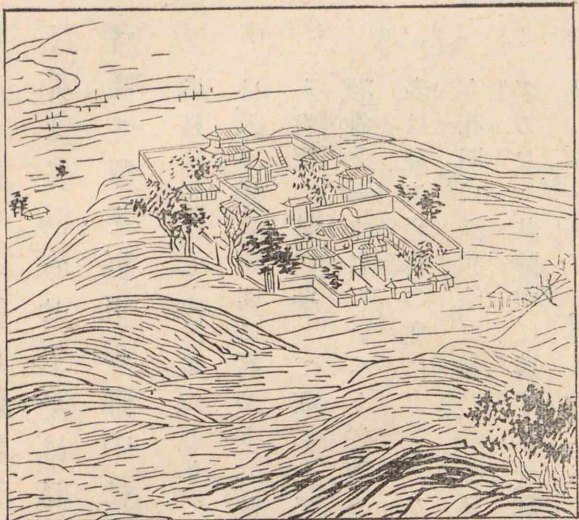
かくて中央政府の亂るゝや、一般の人心漸く動搖し、亂暴の賊徒四方に起れり。是に於てか、或は賊を討つを名とし、或は宦官の誅滅を名として起れる群雄あり、世は再び戰亂の時となれり。當時傑出の英雄三人あり。就中所謂治世の能臣、亂世の姦雄たる曹操、尤も智略に富み、後漢の最後たる獻帝を擁して、北方に雄據し、其勢最も強く、益南下の勢あり。然るに江南の孫權は漢の王族劉備を助けて、大に曹操の軍を赤壁(湖北)に破れり。かくて揚子江北の形勝の地は曹操に屬し、支那南部の東半は孫權に、西半は劉備に歸して、天下三分の勢をなせり。已にして曹操の子曹丕は終に獻帝を廢し、魏國を建て、洛陽に都す。(八八)之を魏の文帝といふ。かくて後漢は十二世一九六六年にして亡びたり。尋で劉備は成都(四川)に都して漢の皇統をつぐ。之を蜀漢の昭烈帝といふ。やがて孫權

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

後漢滅亡

三國鼎立

諸葛孔明



(岡龍鳳の陽南)

も亦建業(江蘇省)に據りて、吳國を建て、大帝と號せり。かくて天下は蜀・吳・魏三國鼎立の世となれり。  
三國の鼎立大約五十年間は、後世

の人が興味多き時代として感ずる所の一時代にして、後世三國志演義といふ歴史小説の作などあり。三國の中、蜀は最も小にして、人物も亦少かりしが、昭烈帝の寛仁と諸葛亮(字は孔明)の忠誠とに依りて、魏・吳二國と鼎立對抗するを得たり。昭烈帝の死後、諸葛亮は嗣帝を輔けて、軍國の重任に當り、屢北面して、魏

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

を攻めたるも、魏は依然として最も強大、しかも其將司馬懿も亦よく防戦せしかば、諸葛亮も竟に漢朝恢復の志を達せずして、魏と對軍の陣中に歿せり。(四八九)

臥龍  
草廬三顧  
水魚の交  
出師表  
忠武侯

諸葛孔明は、もと民間にありて、田野を耕し、常に管仲樂毅に比し、臥龍の名は、天下識者の間に高かりしかば、劉備は其草廬を三顧して、終に之を起せり。君臣の情誼極めて密にして、所謂水魚の交あり。劉備かつて「孤之有孔明、猶魚之有水也」といへり。征魏の軍に臨みて、上表したる前後二回の出師の表は、誠忠懇切の文にして、之を讀んで泣かざる者は、忠臣に非ず、との評あり。孔明は又兵法に長じ、八陣圖の發明あり。忠武侯の諡あるは偶然にあらざるなり。其陣中に歿するや、魏の兵は退却の蜀軍を追撃したるに、蜀軍は少しもさはがず、將に之に向はんとせしかば、魏兵は畏れて、敢て迫らず。されば、時の百姓は、死諸葛、走生仲達、といふ諺を作れりといふ。仲達とは司馬懿の字なり。

諸葛亮の死後、蜀の勢振はず、終に魏に滅されたり。其後、魏も

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

晋の一統

功臣司馬懿の孫司馬炎の爲に其國を篡はれ、吳も亦司馬炎に滅されたり。かくて司馬炎は全國を一統し。(九四)洛陽に都せり、之を西晋の武帝といふ。

### 第六章 晋、五胡十六國

八王の亂  
清談流行

晋の初世 晋の武帝一統の後、魏の滅亡に懲り、一族を分封して、帝室の藩屏となししが、其子惠帝の暗愚なるに乗じ、諸王前後八人政權を争ひて、骨肉互に相害する大亂を起したり。然るに當時の士人は漢末名士の奇禍に懲り、節義禮法を無視し、實用の學を事とせず、所謂清談として世務を輕んじて、空理を談ずるに耽り、誠實に國事を憂ふる者少きが上に、晋初地方の武備を弛めしかば、晋の國家は漸く其元氣を失ひ、當時既に支那内地に移住せる異人種は、漸く侵略を恣に

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

異族内侵

匈奴の劉淵

するに至れり。抑も異人種の漸く支那内地に移住雑居したるは、兩漢三國の間に起りしが、晉の初に至り、其雜居益増加し、各自治の部落を作り、其勢を養へり。中にも、南匈奴は漢の世より支那に内附し、劉氏と稱して今の山西省の北部に居りたるが、其酋長劉淵は遂に先づ兵を起し、國を漢と號し、洛陽の都を陥れ、晉の第三、四代の二帝をとらへたり。

晉の遷都

是に於て、晉朝は江北の地に安んずること能はず、都を建康(吳の建業)に遷し、江南の地を保ちて、晉の血統を繼續せり。建康は舊都洛陽の東南に在るを以て、之を東晉と名け、南遷の前を西晉といふ。

西晉と東晉

東晉の初王元帝は、南遷の後、名臣王導等を用ひ、江北の地を恢復せんと圖りしも、内亂等の爲に其志を果さず。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三

五胡十六國

淝水の戦

五胡十六國

晉の遷都の前後、支那の北部と西邊は、夷狄異人種の侵略益甚しく、東晉十一世百餘年の間、北支那は紛亂戦争の巷となり、異人種の主なる者五種あり、其間に興亡せし列國十六(漢人種の建國をも加ふ)なりしを以て之を五胡十六國といふ、淝水の戦 晉の南遷より五十年許の後、江北に於ては、氏種即ちチベット種の國にて、長安に都せる前秦の苻堅は五胡中に在りても雄傑なる者なるが、王猛を重用し、北方諸國を併呑し、尙東東西域の諸國をも征服したれば、更に進んで江南の東晉を滅して、天下を一統せんと欲し、九十萬の大軍を擧げて、東晉に迫りしに、東晉の名相謝安は其甥謝玄等をして之を淝水(安徽省)に逆襲せしめ、大に之を破りたり。(一四三)

苻堅と王猛とは、君臣相信じ、苻堅は自ら、如玄徳之於孔明、といひ、猛の死するや、苻堅之を哭して、天不欲使吾平一六合邪、何奪吾景略之速也、といへり。

三

三

二

〇

九

八

七

六

五

四

三

二

一

玄徳は蜀漢の昭烈帝劉備の字にして、景略は王猛の字なり。  
 謝安は少時より重名ありしも、風流を事とし、四十餘歳に至るまで、久しく  
 仕官せざりしかば、時の人は「安石不出如蒼生何」といへり、安石は謝安の字  
 なり。秦軍來侵して、上下震駭するや、安は獨り自若として碁を圍み、以て人  
 心を鎮定せりといふ。

後魏勃興東晉滅亡

かくて、東晉は、淝水の戦後一時小安を

保ちしも其後内亂相ついで  
 起り、國勢つひに振はず。時に  
 劉裕といふもの内亂を平定  
 し、又功を内外に立て、權力益  
 加はりしかば、遂に篡立して、  
 帝位に即き、東晉と同じく建  
 康に都せり。(八〇〇)之を宋の武



(今現)人族スーゲンツ

宋の武帝

帝といふ。

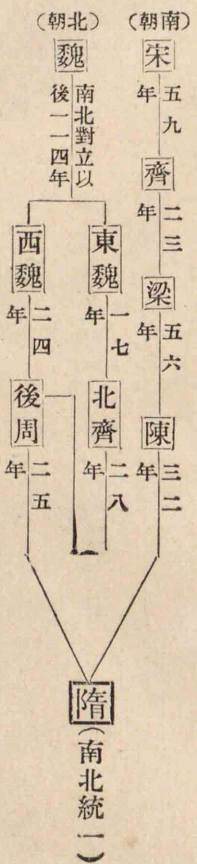
次に、江北に於ては、淝水の戦後、前秦は俄に衰滅し、江北の地  
 は復四分五裂せしが、今の山西地方に據れる鮮卑種族の後  
 魏の國最も強く、其太武帝は遂に江北諸國を一統するに至  
 り。(九〇)是に於てか、支那は宋魏の南北二國に分れ、江南の  
 國を南朝といひ、江北の國を北朝と稱し、所謂南北朝時代こ  
 こに起れり。

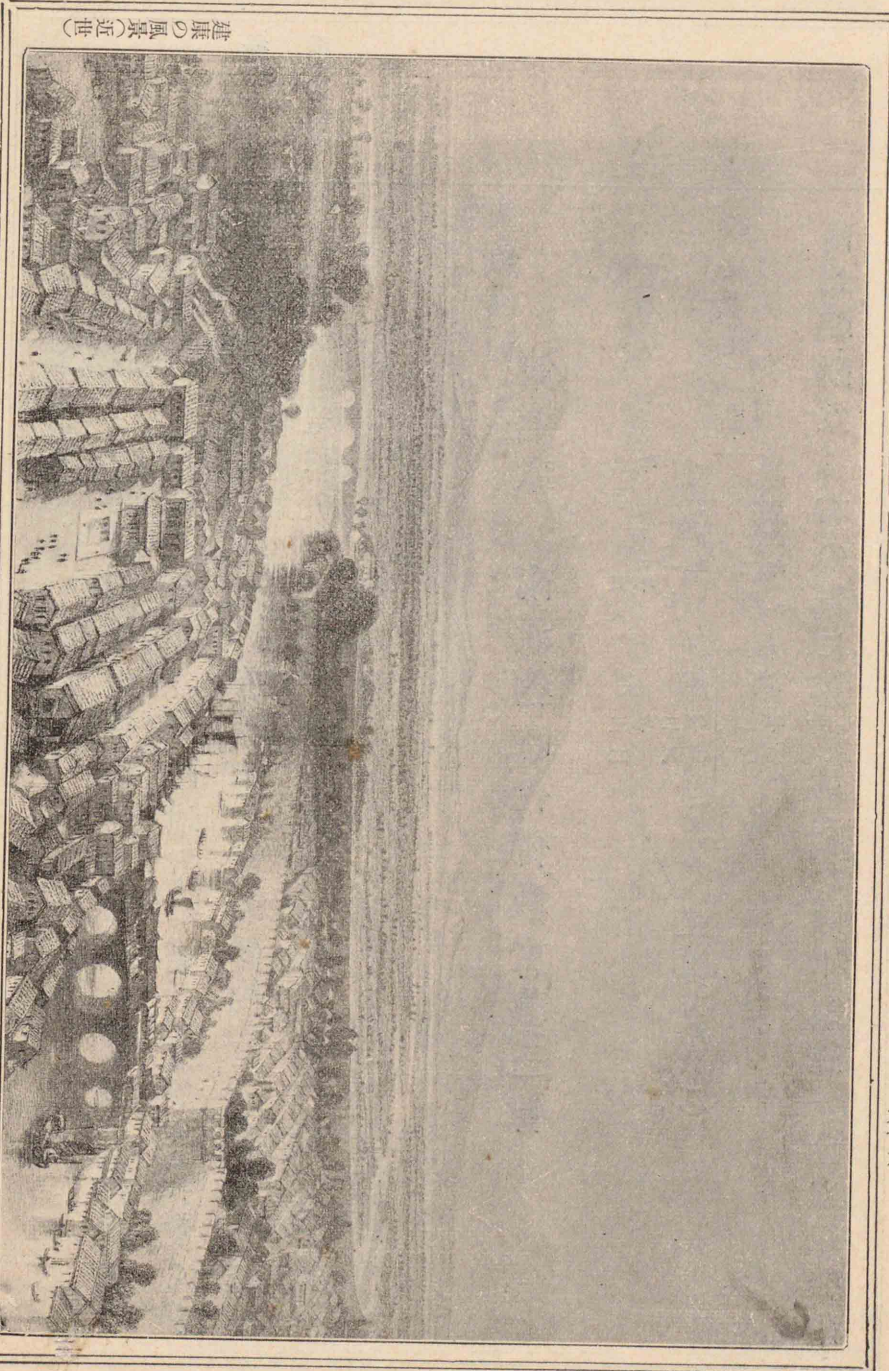
後魏太武帝  
南北對立

第七章 南北朝時代、佛教文藝、三韓

南北朝對立

右の表に於て見るが如く、宋魏の分立以後、隋





(建康の風景(南朝))

六朝

の統一に至るまで、漢人の國と、異人主權の國が南北に相對立する。大約二百年に近し。而して南朝の都は、吳と東晉と同じく建康にあり。かくて吳と東晉及び南方の宋齊梁陳の四朝を總稱して六朝といふ。次に、北朝の後魏は、初め平城(山西)に都し、後に洛陽に遷れり。

南北朝の間、支那は二大國又は三大國の對抗なれば、五胡十六國時代の如き紛亂なけれども、廢弒の多きを、前後無比、南北朝合計五十君の中、二十六君は弒せられ、四君は廢せられ、其位を全うしたる者は、二十君のみなりしといふなる亂暴の時にして、又多年紛亂の結果として、全國の戸口頗る減少せり。而して此間南北互に相排斥するを甚しく、南朝の人は北人を呼んで醜虜といひ、北朝の人は南人を呼んで島夷といふ者あり。然れども、大體、南人は北人に制せられ、南北の對

南北互に相排斥す

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



北人の勝利

抗は漸く北人の勝利に歸し、北方系統の隋は、終に天下を一統するに至れり。

佛教流行

兩晉より南北朝の間、戦亂相つき、學問文教は一般に振はざりしも、佛教は獨り盛に流行し、歴代の帝王も少からず之を信仰せり。梁の武帝の如きは其隨一なり。武帝深く佛教を信じ、自ら三寶奴と稱し、屢身を佛寺に捨てたり。彼の有名なる禪宗の開祖たる達磨大師が海路支那に來りたるは、武帝の時なり。(八一—八三)

(1) Bodhi Dharma.

達磨大師

法顯慧雲

工藝美術の

其他、西方の名僧の支那に來りて法を弘むるもの、支那の高僧の西方の往きて法を求むるもの少からず。東晉の法顯、宋の慧雲の如きは、尤も有名なり。當時、法顯は印度とセーロンとの往復滞在に前後十二年を費せり。又此時代には佛教流行の影響として、繪畫、彫刻、建築等の工藝美術頗る進歩せり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

進歩

なほ又この間に佛教は朝鮮を経て我國にまで傳播せり。左に之を略述せん。

三韓

神功皇后の御親征

高麗百濟新羅の三韓分立の事及び任那の事は、既に之を述べたり。新羅最も我國に近し、本邦上古、西國熊襲の亂あるや、神功皇后は熊襲は親征を勞せず、對岸半島の新羅を伐たんと謂ひ給ひ、遂に新羅御征服の事あり。つぎて百濟高麗も我國に來貢せり。然るに、其後しばらくにして新羅は朝貢を怠り、叛服常ならず。高麗は我仁徳天皇の頃に出でたる廣開土王の頃より、其國漸く強大となり、支那の南北兩朝に臣事して、屢百濟と新羅を侵し、百濟の如きは、始んど滅びんとしたるが、我雄略天皇の保護によりて、僅に其國を保ち、當時百濟人は、今の興復は日本天皇の恩なり」と迄いひあへり。然るに、其後我在韓諸將の失策ありて、我日本府も、爲に動搖

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

日韓の關係

廣開土王

の状あり。新羅は屢、任那を侵し、又連りに百濟を攻む。かくて新羅はつひに任那を滅し、やがて又日本府も廢せられたり。

(三二)

儒佛兩教の東傳

支那に於ける佛教流行の事は、既に之を

三國及び日本  
の佛教

述べたり。流行の勢は、支那に止まらず、前秦の時、佛教始めて高麗に傳はり、(三二)高麗は更に之を新羅に傳へ、百濟は別に東晉より之を傳へたり。而して百濟が更に之を我國に傳へたるは、是より百五十年許後の事なり。

儒教漢學の  
東傳

又此時代には、佛教のみならず、儒教漢學も朝鮮をへて我國に傳はれり。我應神天皇の時、百濟の博士王仁の來朝して、論語、千字文を獻したるは、支那に於ては、西晉の武帝の頃なり。この外、鍛冶、織物、陶器、繪畫等諸種の工藝技術の三韓より本邦に傳來するもの少からず。なほ本邦より直接に支那の

工藝技術の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

東傳

吳國より吳織漢織の名工を求めたるともあり。但しこゝに吳といふは、もと吳の據りたる處即ち南朝の國をさすものなり。

第八章 隋の興亡

隋の一統

南北朝對抗の時、北人の勢が南人より強かりし

隋の文帝

とは上に述べたり。南北朝の末、北朝の後周の外戚楊堅政權を握り、遂に幼弱なる周帝の位を篡ひ、帝位に即く。之を隋の文帝といふ。(四一)其後文帝は南朝をも滅して、南北を併せられた。漢末より三國、兩晉、五胡、十六國、南北朝の間、殆んど四百年間、大體紛亂の世も、終に其局を結びて、天下は隋の一統に歸せり。(四二)文帝は、性勤儉、南北兼併の後、意を政治に用ひ、多年の紛亂に疲れたる國民の休養に注意し、即位の初には、民

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

戸四百萬弱と稱せしが、其末年には八百萬以上となり、國力恢復、漢族雄飛の曙光を認めたり。

漢族雄飛の曙光

**煬帝の豪華** 文帝の子煬帝は性豪華を好み、驕雄の風あり。文帝勤儉の後を受け、府庫充貫の都富を濫用して、盛に土木を興し、其國都長安の外に數多の離宮を造り、運河を開き、四方に巡遊せり。

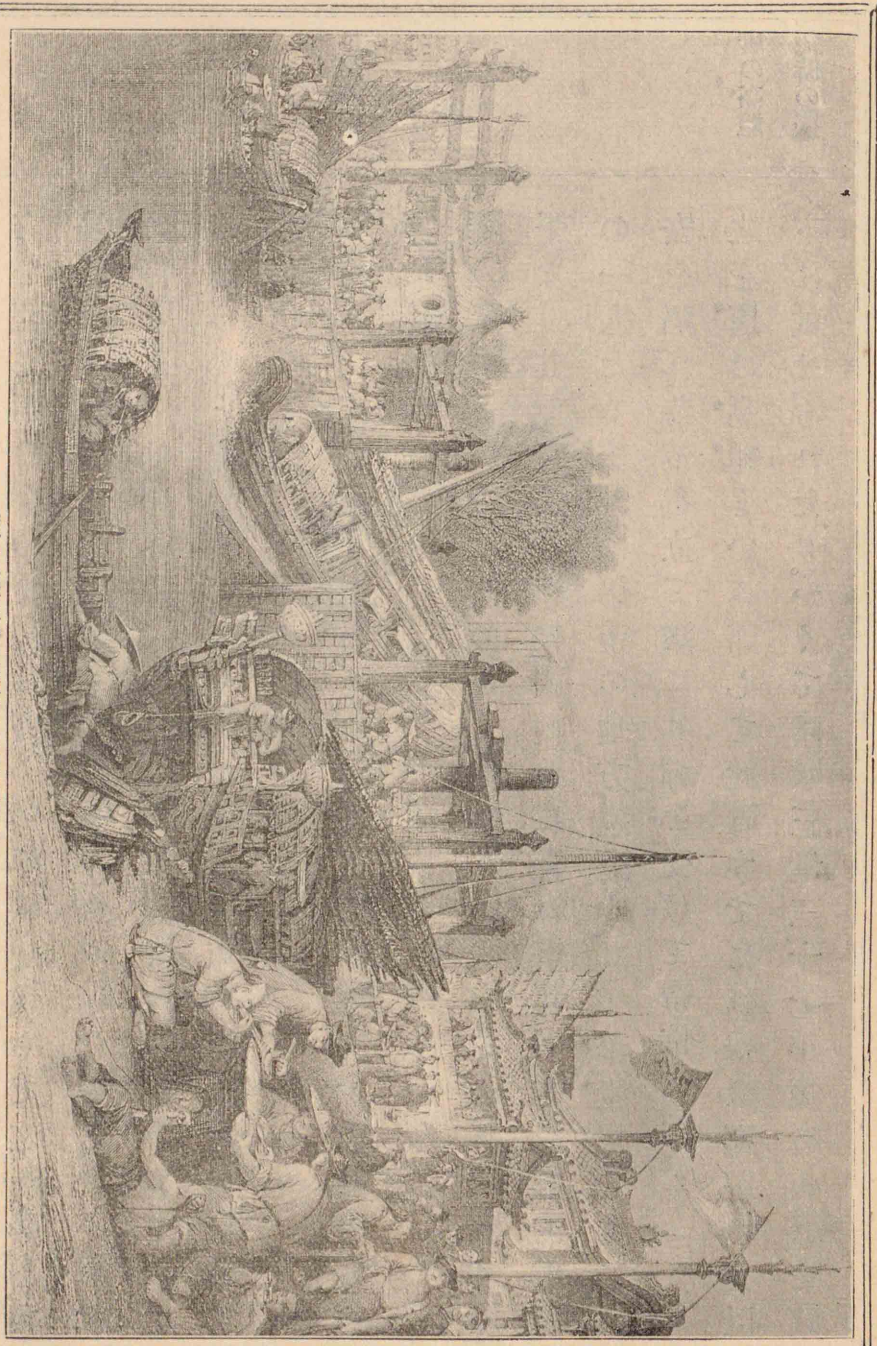
運河

煬帝は屢、運河に由りて巡遊せしが、元來運河は水運并に灌漑を便にするは勿論、其通路に於ける湖河水量の出入を整齊し易からしむるの功あり。特に支邦の如く、其國の兩大河即ち揚子江及び黃河が、大體東西の同一方向に横流する國に於ては、江南と河北とを縦通する運河は、其南北交通の上、に於ても、亦少からざる便利を與ふる者なり。

煬帝の遠略

**煬帝の外交遠征** 煬帝は又漢の武帝の雄圖の跡を追ひて遠征を好み、東は琉求(今臺灣)を征し、南は今の佛領交趾支那地

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



(圖るす航運を面斜傾の河運の船船)

方を征し、西は今の青海地方の鮮卑族を伐ちて之を降し、西域諸國を招致して、國威を誇耀せり。尙又帝はたとひ不成功に終りしとはいへ、更に進んで、將に遠く東羅馬帝國と交通を試みんとしたる事あり。然れども、其東の方高麗の征伐は、再三功なく、徒に國力の疲弊を致せり。

我推古天皇の時、小野妹子を遣して、隋と修交せられたるは、實に煬帝の時なり。

日隋修交

**隋の末路** 煬帝は、斯の如く豪奢遠征を事とし、國民漸く不平なり。其東征失敗以後、國內遂に亂れ、群雄四方に起り、群雄の一人たる李淵は、煬帝の地方巡遊中、其子李世民と共に長安を陥れ、恭帝を立て、遂に其禪を受けて帝位に即けり。(七一)

之を唐の高祖といふ。而して此時すでに煬帝は巡遊中其臣下に弑せられたり。かくて隋は三世三十七年、短時の盛を致

唐の高祖  
短時の盛

隋の末路  
煬帝の暴政  
群雄の起り  
李淵の起り

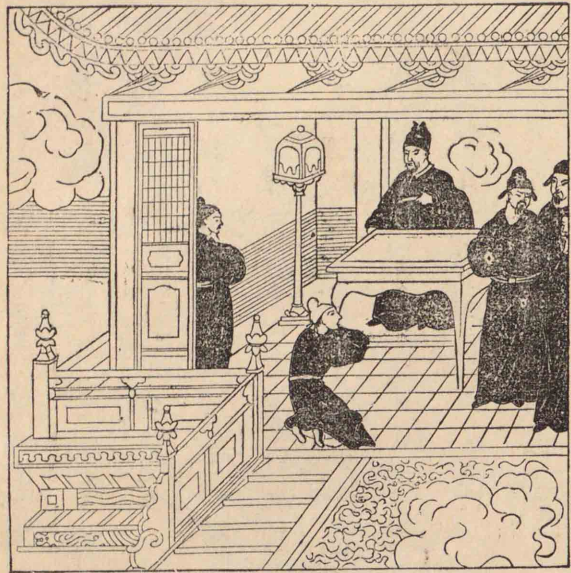
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

秦隋と漢唐との對比

秦隋と漢唐との對比  
秦の暴政  
漢の仁政  
隋の暴政  
唐の仁政

したるを、猶八百年前の秦の如くにして亡び、而して隋の次なる唐朝の隆盛は、又恰も秦の次なる漢朝に似たり。

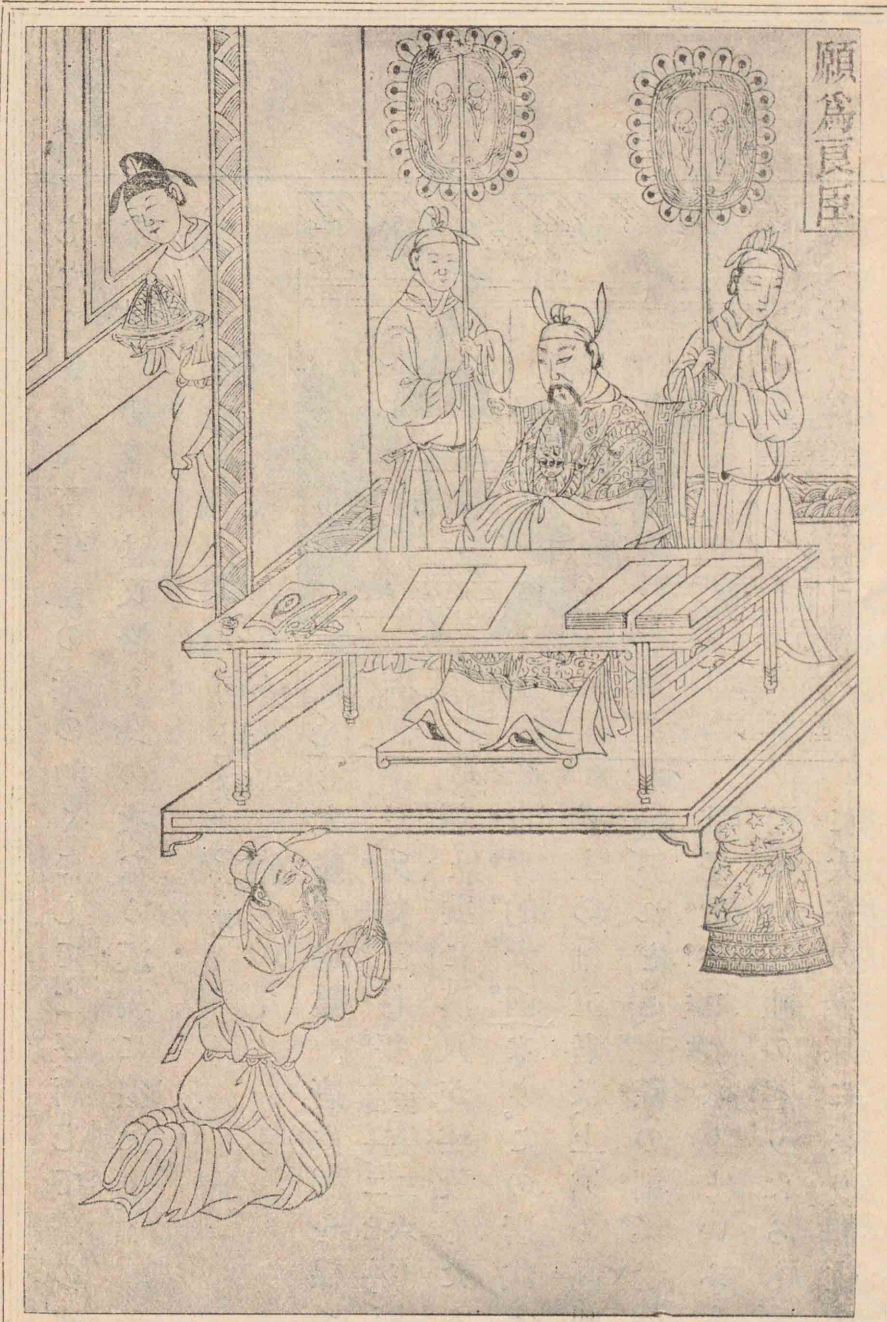
第九章 唐の初世 (太宗の功業)



(圖く聽を政宗太)

**太宗の功業** 唐は國を保つと、大約三百年(自一五七八漢朝と共に漢人が建設したる世界的大國なり。この唐代名義上の創立者は、上述の高祖(李淵)なれども、實際の創業者は、其子太宗(李世民)なりといふも可なり。高祖の起りたるも、實に太宗の參謀により、即位の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



願為良臣

右不初  
7 終同  
二 任又  
小 野 幸 子

(圖るす上言を別の臣良と臣忠に宗太徵魏)

英主と相將

後、群雄を征服して、天下を一統したる軍國多事の時にも、亦太宗の功最も大なりしを以て、太宗は次子を以て帝位に登るに至れり。太宗は非常の英主にして、其名臣も亦頗る多し。賢相には、房玄齡、杜如晦あり、良將には李靖、李勣あり、顧問には魏徵等あり。太宗は皆善く之を用ひたれば、文武の諸政大に整備し、國內泰平、國威外に輝けり。故に後世之を貞觀の治と稱す。貞觀とは太宗の時の年號なり。

貞觀の治

太宗の少時、一書生之を見て、濟世安民の人相ありといひたるによりて、世民と名けたりといふ。帝常に修身治國に注意し、臣下と共に創業守成の孰れか難きを論じ、又常に驕奢を戒め、或は以銅爲鏡、可正衣冠、以古爲鏡、可見興替、以人爲鏡、可知得失、といひしなど、其名言善行頗る多し。

**武韋の禍** 太宗の子高宗も、初めは名臣の補佐に依りて、内治外征の功を奏せしが、元來意志強固の君にあらず、しかも

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

周  
則天武后

玄宗

晩年多病となり、世に稀なる女傑たる皇后武氏に國政を委ねしかば、大權自ら武后に歸し、高宗の死後その二子中宗及び睿宗位に即きしが、武后は之を廢して、自ら皇帝の位に即く。是れ即ち則天武后なり、其後張柬之等武后に迫り、高宗の子にして先きに武后に廢せられたる中宗を復位せしめて唐室を復興せり。然るに、中宗も亦暗弱の君にして、終に皇后韋氏の爲に弑せられしが、中宗の從子李隆基、韋氏を誅して、父睿宗を迎立し、後自ら帝位に即けり(七三)之を玄宗といふ。

第十章 唐の制度

總論 太宗、高宗の二代は唐代の最盛時にして、諸般の制度も亦多く此間に成れり。是等の制度は、支那後世の模範となりしのみならず、我國及び朝鮮の古代の制度も、亦是に參酌

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

三省六部

地方行政

租庸調

したる所あり。今に左に其大略をのべん。

官制 中央政府に於て國政を掌る主なる官廳は三省と六部となり。三省とは尙書中書門下なり、其中尙書省は他の二省が宣奉審査せる天子の詔勅を施行することを掌り、其權尤も重し。六部は即ち此尙書省に屬し、政務を分擔する者にして、吏部(官吏の任を掌る)、戸部(戸籍收税を掌る)、禮部(儀式貢舉を掌る)、兵部(軍事を掌る)、刑部(刑法を掌る)、工部(工務山澤を掌る)の六部を云ふ。以上諸官を京官といふ。

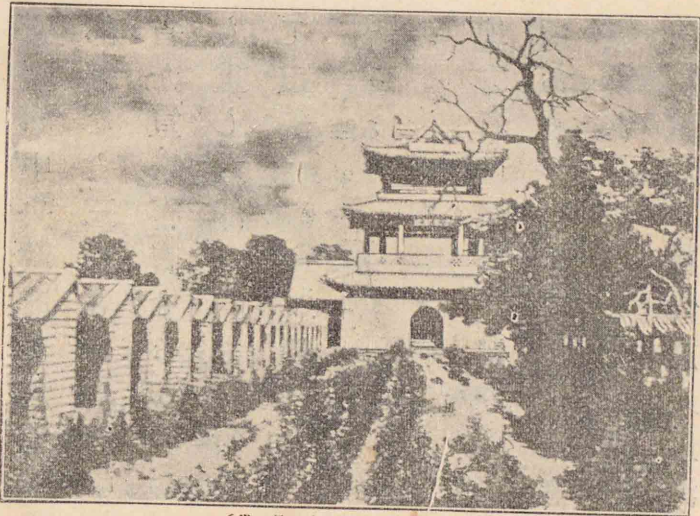
地方行政には、全國を十道に分ち、道の下に州あり、州の下に縣あり、州に刺史、縣に令を置きて、民治を掌らしめ、各道に巡察使あり、州縣を監督す。以上諸官を外官といふ。

田制税法 唐代歲入財源の大本は租庸調の三者なり。租は田地に課し、通常一百畝の田より粟二石を上納すると、庸は

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

六百三十四府

國子學大學



(代現)(院貢京北)

丁男が毎歳廿日間の公役に就くと、調は郷土の産物(絹綾麻布の類)を上納するとなり。此外尙商業税、關税、鹽鐵税等あり。

**兵制** 全國十道の諸要地に六百三十四府あり、府に上中下の三等あり、上は一千二百人、中は一千人、下は八百人の府兵より成り、地方を鎮し、且つ番上して禁衛の務にも服したり。

**學制并に官吏登用法** 京師には、國子學、大學等の設あり。地方の各州縣にも學校あり。此等の學校より出身する者を生徒と

三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

進士

制舉

五刑

大惡

老幼

いひ。州縣より推選する者を郷貢といふ。生徒、郷貢は毎歳尙書省の試験を受け、及第すれば官吏となる、之を進士といふ。又非常の人材を待たんが爲に、天子親しく擧ぐる事あり、之を制舉といふ。

**刑律** 唐の刑罰に、笞杖徒流死の五刑あり。皆金を納めて罪を贖ふ法あれとも、君父國家に對する大惡は、之を贖ふを許さず。又刑の適用に當りても、主從尊卑屬親の別によりて輕重あり。老者(九上)幼者(七下)の如きは、死罪を犯すも、其罪を論ぜず。

第十一章 唐の外征通商 三韓

**唐初の外征** 太宗及び高宗時代に於ける唐の外征も、眞に非常の隆盛を極めたり。

三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

北方突厥

- (1) Turks
- (2) Tibet.
- (3) Nepal.

西藏印度及南洋方面

當時北方の突厥(蒙古種の遊牧人)はアルタイ山地方を根據地として、南北朝の末より漸く勢を増し、其領土は遂に今の内外蒙古、新疆、中アジア等に連亘するに至りしが、其後東突厥西突厥に分れ、隋末唐初に至り、内亂ありしに乘じ、太宗及び高宗は之を征服したれば、唐の領土は中アジアまでも延長せり。當時恰も阿剌比亞國西亞に勃興し、其勢甚だ烈しく、波斯其他の諸小國は其侵略的銳鋒を避けて、比較上平和なる唐に歸服せんとしたれば、唐の中亞經略に便利を與へたり。かくてアラビア人も亦唐と交通せり。

② 西藏は重疊せる山岳を以て支那と離隔し、從來兩土の交通なかりしが、唐初始めて支那に内屬し、其南隣の子パール及び印度も亦唐に來聘せり。かくて今の後印度及び南洋諸國も亦唐の威風を望みて、來朝する者多し。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

太宗の高麗遠征失敗

安市城の圍

朝鮮錦江河

三韓 唐初の武威、斯の如く盛なりしが、太宗も高麗の遠征には失敗せり。是より先き朝鮮の三國は互に相争ひしが、唐初太宗の時に及び、高麗は百濟と連合して、新羅に當り、新羅は孤立の姿となり、援助を唐に乞へり。是に於て太宗は遂に親ら大軍を總督して、遼東に赴き、白巖城(今遼東北陽州)を降したるが、安市城(今遼東北蓋平縣)を圍むや、久しく抜けず、且つ氣候寒く糧食盡きんとするを恐れて、軍を還せり。(一五三)

太宗崩じ、高宗立つに至り、新羅は又救を求めたるを以て、唐の將蘇定方は山東より海を渡りて、先づ百濟を攻め、其國都泗泚(扶餘縣道)を抜き、其王義慈を降せり。(二〇三)

此時、我朝廷は百濟の敗を傷み、當時質として日本に在りし義慈王の弟豐璋を送り還して、王位を嗣がしめ、海軍を發して、之を援護せしめたるが、我援軍唐の海軍と錦江の河口附

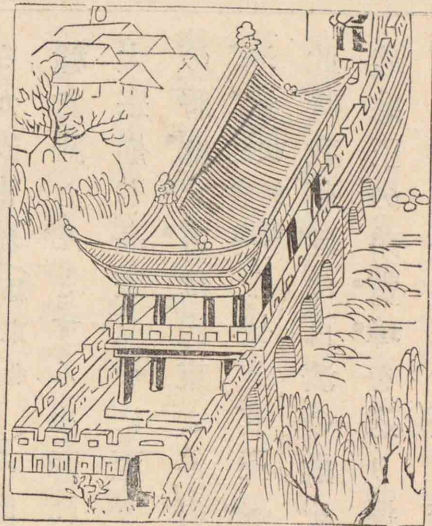
一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三



口附近の日唐海戦百濟滅亡

高麗滅亡

新羅の叛服



(築建鮮朝)

近に戦ひて利あらず。豊璋は高麗に奔れり。かくて百濟は前漢末の建國以來六七八年にして滅びたり。(皇即位前三天) 其後五年をへて、高宗は又つひに高麗をも滅せり。高麗は前漢末の建國以來七〇五年なり。かくて唐はつひに高麗と百濟の故地を併吞せり。然るに、新羅は忽ち唐に叛きて、平壤以南の地を取りしも、猶唐に臣事して世々その官爵を受けたり。

**六都護府** 以上述べ來りたるが如く、唐初外征の國威は四方に輝き、其勢力の及ぶ所は、非常に廣大となり、東は朝鮮半島より、西



(唐の平百濟碑)

唐の外征

唐の領土統治法

は中アジアに至り、南は南洋諸國より、北は外蒙古に達せり。かくて唐は四方の要地に、六都護府を置きて、之を統べ治めたり。

府名

統治區域

府名

統治區域

一、安東都護府(遼東及び朝鮮) 二、安北都護府(外蒙古)

三、單于都護府(内蒙古) 四、北庭都護府(天山北路)

五、安西都護府(天山南路及中亚地方) 六、安南都護府(南海諸國)

右の中、安東都護府は、初め平壤にあり、後に遼東に徙れり。

**東西通商** 唐初の對外事業の盛なるを、上の如し。かくて其對外通商も頗る發展せり。隋唐の初には、南支那地方の唐船は、遠く印度、洋、波斯灣に往來する者あり。特に唐の中世以後は、當時の東西の二大帝國たる唐とアラビア國との間には、通商頗る盛に行はれ、アラビア人は遙に廣州(廣東省)泉州(福建省)

唐船西航  
アラビア人  
東來

安東都護府の所在地

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

の諸港に來航して通商せり。

當時支那の輸入品の主なる者は、芳香、藥品、貴木、象牙、犀角、玻璃、珠玉等にして、其輸出品には、絹帛、穀類、金屬、陶器等あり。又唐の時、アラビア人の手を経て、製紙の法、西方に傳はれりと云ふ。尙又唐代支那居留の西方外人は、十數萬人に及びたり。

### 第十一章 隋唐時代の諸宗教 日唐の交通

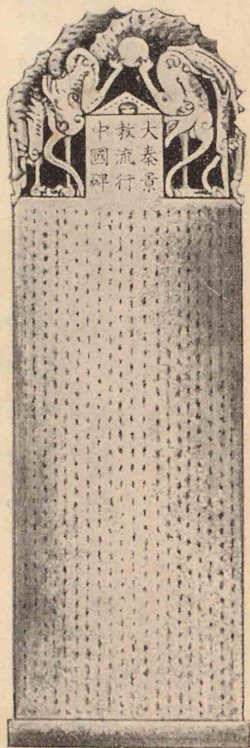
西方諸宗教の東漸 前章の末にのべたる如く、東西通商の開くると共に、西方の諸宗教も次第に支那に傳はりたり。其主なるものを回教及び景教とす。

回教は隋の末にアラビアのムハメッド之を創め、アラビア帝國の盛となるに及び、四方に傳播せるものなり。次に景教は基督教の一派、ネストル教といふものにして、前者と共に一時頗る盛に行はれ、後世にも其影響を及ぼしたり。

- (1) Muhammed.
- (2) Christianity.
- (3) Nestorianism.

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

- (1) Syria.
- (2) Alopán.



(景教流行の碑)

寺を大秦寺といふは、回教が其源を大秦即ち羅馬に發するに由る。此圖は明代に長安即ち今の西安より發掘せる當時の景教流行の碑なり。又唐代建立の回教寺の廣東に現存する者あり。

佛教 唐の時、諸西教の東傳にもかゝらず、佛教は猶盛に行はれたり。太宗の時、有名なる玄奘は、天山南路、中アジアをへて、天竺に入り、往復十七年を費し、經論六百五十餘部を得て、還り、之を翻譯して、支那佛教史上に一新紀元をなせり。又高宗の時、義淨は海路より天竺に入り、往復二十四年を費せり。

玄奘と義淨

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五

八宗派



(圖の天渡并玄)

かくて此前後に流行したる佛教の分派には、三論、法相、華嚴、律、成實、俱舍、天台、真言の八大宗派あり。

佛教東傳

遣唐使僧侶留學生

而して當時日本と唐との交通頗る盛なりしが故に、我奈良朝より平安朝にかけて、是等の宗派は概ね我國に傳來せり。日唐交通 我日本は既に隋と修交せしが、唐の時には、彼我國の交通頗る厚し。我國よりは、舒明天皇(太宗時代)以來、屢遣唐使の派遣あり。又當時僧侶、留學生の唐に遊學する者頗る多し。弘法傳教の兩大師、吉備眞備及び阿倍仲麿等は、其有名なるものなり。

第十三章

唐の中世

(開元の治の亂)

開元の治文藝の美

さて第九章の末に記したる玄宗は、宮廷内亂の後に即位し、大に政治に勉勵し、一時全國太平、都鄙繁昌したれば、後世開元の治といひて、太宗の貞觀の治と併せ稱す。開元とは當時の年號なり。

かくて、太宗以來の文學獎勵の道は、玄宗の太平時代に至りて、益盛となり、唐は元來歷代中文學隆盛の時なるが、其間に於て玄宗時代は特に盛唐時代と稱せられたり。李白と杜甫とは、實に此頃に出でたる二大詩人なり。

此時代前後は、單に文學のみならず、他の藝術も發達し、書には、張旭あり、顔眞卿あり、畫には李思訓あり、王維あり、善く山水を畫き、吳道玄あり、佛畫に長せり。又玄宗の時には、雅樂、俗

書畫

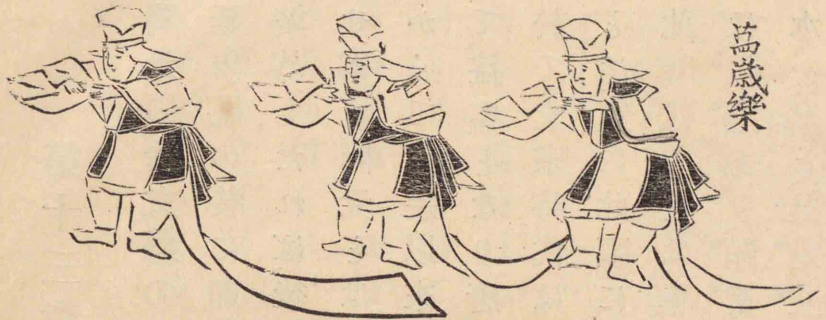
盛唐時代の二大詩人の

開元の治

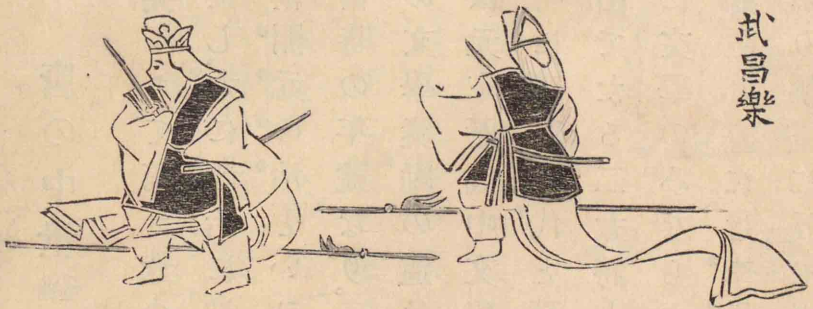
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

音樂

高麗樂



武昌樂



樂共に流行し、中古時代の我國に傳來せる者もあり。  
なほ又玄宗より數十年をへて、韓愈と柳宗元の二大家あり、文章を以て名あり。又早くより、我國人に愛讀せられたる白居易文集の作者たる白居易も其頃に出でたり。  
安祿山の亂 玄宗は又意を邊境に用ひ、四邊の要地に十人の節度使を

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

韓柳二家

十節度使

白居易

前後別人の如し 楊貴妃

(1) Uigur.

安祿山

勤王諸將

外人來援

置き、兵馬の大權を與へて、四方を鎮守せしめられたれば、唐の國威又外に振ひたり。  
然るに、其初には勤勉なりし玄宗も、在位四十三年間の後の十餘年間は、前とは別人の如き驕奢の君となり、楊貴妃を寵愛して、政治に怠慢したるを以て、唐朝大亂の源因は、既に宮廷の内部に萌したり。  
時に、唐の邊境に於ては、節度使の權力重きに過ぎて、制し難き狀をなすに至りしが、中にも東北の夷狄に對せる三節度使を兼ねたる安祿山といふ胡人は、之に乗じて叛旗を擧げ、  
四五直に洛陽を陥れ、長安に迫るや、玄宗は出奔して、四川省地方に至り、太子其位を繼ぐに至れり。然れども、幸に顏真卿、顏杲卿の二人まづ義兵を擧げ、其後郭子儀、李光弼等の勤王諸將善く戦ひ、且つ回紇人(東突厥の滅亡後、暫く其故地を占領せるトルコ種族の一派)及び

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

アラビア人來援したるを以て、つひに安祿山及び其餘黨の亂を平定せり。此亂前後九年に亘り、大損害を唐朝に與へたり。

二顔と張許の忠烈

此亂初に於ける顔真卿、顔杲卿の忠節は、二顔の忠と稱し、其忠烈は古來多く見ざる所なり。大亂の平定は郭李の功なりといふも、實は二顔の率先盡忠に由るとは、決して過稱に非ざるなり。又當時張巡、許遠の忠烈も亦稀に見る所なり。特に其睢陽の籠城の如きは、四萬の士卒、餘す所僅に病傷の四百人に至るも、一兵の叛する者なく、終に力盡きて皆敗死せり。後世慷慨の史詩、正氣歌等、二顔張許の忠烈を讚美する者多し。又顔真卿は書を善くし、其雄健峻整なる筆法は我國にも傳はりて有名なり。

第十四章 唐の末世藩鎮官の禍、唐の滅亡 五代の興亡

亂後の唐朝 唐朝は、高祖より玄宗に至るまで、六世一四〇

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二〇 二一 二二 二三

玄宗の前後

年許を経過し、玄宗以後は、十四世一五〇年許り繼續したるが、安祿山の亂後、唐の勢は前の如く盛ならず、次第に衰弱して、終に滅亡を見るに至れり。其源因の大なるもの二あり。  
**節度使の專横** 抑も節度使は異人種の侵入を防ぐ爲に設けたる者なり。然るに、安祿山の亂後、異人種の侵入相づくに及びて、節度使の數漸く増加し、民政兵馬の大權を恣にし、其勢日に強く、終に朝廷の命を奉せざるに至れり。

弊害根治せず

第十一世の君は即ち英武なる憲宗なりしかば、一時節度使の專横を抑制したるも、未だ其弊害を根治する能はず。

**宦官の禍** 斯の如く、唐の國勢漸く振はざるに當りて、上に英主なくして、下には宦官の禍あり。唐朝の晩年は、一難未だ去らずして、一難又來るの狀あり。抑も、唐の初、宦官の地位は卑く、勢力も小なりしが、玄宗が遊樂に耽りしより、内侍の宦

宦官專横の源因

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二〇 二一 二二 二三

宰相の不和

黄巢の賊

官は次第に其數を増し、且つ信任愛用せられて、漸く勢を得  
 後には天子の禁軍を主り、政務に參與し、終に文武官の任免  
 は勿論、天子の廢立までも之を恣にするに至れり。且つ當時  
 朝廷の宰相は亦不和にして、朋黨を立て、相争ふと、四十餘  
 年に及べるが上に、藩鎮の跋扈は猶未だ滅了せず、天下の政  
 治大に亂れしかば、人民は流離し、賊徒四方に起れり。特に賊  
 將黄巢は諸方を掠めて、遂に長安に入れり。黄巢の賊徒は幾  
 何もなくして平定せられたるも、爾來國內大に亂れ、豪傑四  
 方に蜂起せり。

唐末宦官の專横は實に甚しく、天子の廢立弑逆を恣にし、定策國老其天子  
 を策立する功を立てし故に、國老と稱す。又は門生天子天子を視ると、試験  
 官が受験生を視るが如きによりて門生といふの號あるに至り、時の天子  
 中、赧獻受制強臣、今朕受制家奴、といひて慨歎したる者さへあり。赧獻とは  
 周の赧王及び漢の獻帝にて、俱に亡國の君なり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

朱全忠

後梁の太祖

唐の滅亡 時に黄巢賊徒の降將朱全忠なるもの尤も權略  
 あり、唐朝第十九世の昭宗の時、兵を率ひて長安に入り、悉く  
 宦官を誅し、功を以て梁王となり、後昭宗を弑して、哀帝を擁  
 立し、やがて其禪を受けて帝位に即けり。(六五)之を後梁の太  
 祖となす。

五十餘年間  
五代十三君

五代の興亡 後梁の太祖既に帝と稱したれども、其勢力の  
 及ぶ所は、僅に所謂中原地方に過ぎず、節度使は猶諸方に割  
 據して、一統の天下とならず。しかも其嗣子の時に至りて、其  
 國忽ち滅亡せり。其後、後唐、後晉、後漢、後周の四代忽ち興り、忽  
 ち亡び、共に一統の功を成すを能はず。唐の滅後五十餘年の  
 間に、すべて五代の興亡、十三君の更迭あり。其革命は多く唐  
 未以來の悪弊たりし節度使の篡奪にあり。而して五代の中、  
 後梁の太祖は賊徒の降將にして、後周の太祖は漢人出身な

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

り。此外、後唐、後晉、後漢三代の主は、皆北狄より起りたる者なり。

### 第十五章 東方韓滿地方諸國の盛衰

東方多事

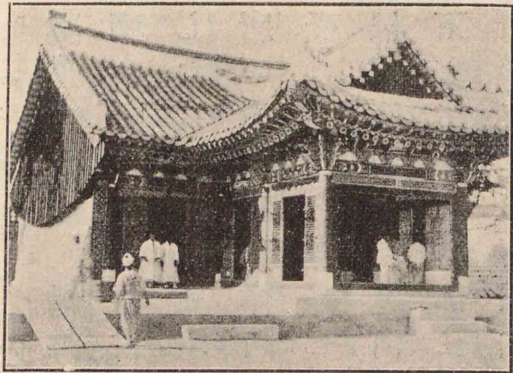
高麗の統一 唐末以來、支那本部の地は紛亂無統一の處たり。東方諸國も、亦頗る多事の地たり。先づ韓半島の事より説き起さん。

高麗の太祖

既に第十一章に於て之を述べたるが如く、朝鮮半島に於ては、百濟、高麗の二國共に滅び、新羅獨り存して、二百餘年に及びり。唐の末に至り、其國政の亂るゝや、半島の地復分裂の狀ありしが、王建といふものあり、新羅を滅し、松嶽(今開城)によりて、國をまた高麗と號し、終に全く半島の地を統一せり。王建即ち高麗の太祖の元年は、支那の五代の中頃なり。(九一五—九六五)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三

朴昔金三氏



(廟王麗高近附城開)

大祚榮の建國

かくて新羅は建國より五十六世九九年にして滅びたり。而して其王姓は朴昔金の三氏たり。  
渤海の興亡 さて半島の北なる滿洲の地には、東胡及び鮮卑等の滿洲種族の居りし事は、既に漢代及び兩晉南北朝時代に之を述べたり。唐の初に至り、今の滿洲人の祖先たる靺鞨といふ部族滿洲に居住せり。唐の中世に及び大祚榮といふもの其間に起り、靺鞨諸部を合せ、玄宗の封を受けて、渤海郡王となり、(七一三—七三五)因りて其國を渤海と號せり。其領土、東は日本海に濱し、南は新羅に界し、西は滿洲西部に接し、北は黑龍江邊に至り、一時東方の強國たりしが、十四世二百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三

十餘年にして、終に契丹の爲に滅されたり。時に五代の中頃なり。

日本と渤海

渤海國人は、聖武天皇以後二百年許り、我國と交通し、屢、貂皮、虎皮、熊皮、及び人參等を貢獻せり。其國內に五京あり、其中の東京といふは、今のウラヂ

ポストク邊に在りしといふ。

- (1) Khitan.
- (2) Vladivostok.
- (3) Yeli Apaoki.

契丹の興起 渤海國を滅したる契丹も、亦滿洲族なり。南北朝の頃より、内蒙古の東部に居り、隋唐の際、常に支那に内附したるが、唐の衰ふるや、獨立して南侵の勢あり。

唐の末、其主耶律阿保機雄略あり、國人より天皇王の尊號を受け、四方を侵略せり。之を契丹の太祖となす。時に其領地は、黑龍江の上流、遼河の東西地方に亘りたるが、更に進んで南下して支那本部に侵入せんを圖れり。恰もよし次の太宗の時、五代中第三代の後晉の高祖は、其國を建つるに當り、契

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

契丹國號を遼と改む

- (1) Khitan.
- (2) Khitai.
- (3) Kathay, Cathay.

支那の別名

丹の援助を要し、其報酬として支那東北部の十六州を契丹に割與せり。是に於て契丹は長城以南の支那内地にも其地を得、國號を遼と改め、而して更に好機の到來を待ちしが、高祖の後、後晉は契丹に對するを冷淡なりしかば、契丹の太宗は、大舉南征して後晉を滅し、其國都(汴即今河南開封府)に據れり。然るに支那人は遼人の侵掠を憤怨して、之に反抗したれば、太宗も占領の志を果すと能はずして北に還れり。

契丹は、後支那の北部を兼併して、其國勢一時強盛となり且つ其一族中亞細亞に建國し、一時東亞支那と西方歐洲との間にありて、貨物を交易せしかば、其名西人に聞え、契丹の名を轉訛して、露西亞人はキタイと呼び、波斯人は、カセーと稱し、是等の名稱は、今も猶西洋人間に保存せらる。

### 第十六章 宋の初世

(宋初の内治外 交遼夏の追健)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



宋の弱點

太祖の一統 唐末五代八十餘年の紛亂に上下亂を厭ふに及んでは、一英主の下に歸一せんことを望む情の起るは自然の勢なり。五代最後の後周の末に至り、將士は後周の節度使趙匡胤を其出征の陣中に擁立して、汴(河南開封府)に即位せしめたり。之を宋の太祖といふ。(二〇六)かくて太祖及び其弟太宗は、次第に諸方割據の群雄を平定して、遂に全國を一統せり。而して太祖は、唐末以來、地方の藩鎮節度使等武將の驕暴益甚しきに懲り、其宿弊を除かんと欲し、宰相趙普と謀り、宿將には名譽と俸祿と安逸とを與へて、其兵馬の實權を解き、節度使に代ふるに文官を以てし、漸く中央集權文治的の政を行へり。是に於て節度使專橫武人跋扈の宿弊を一掃し、寛厚なる政治を行ひ、人民休息することを得たれども、宋代武力の弱きとも亦こゝに原因せり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

太祖の政治

澶州の役  
宋の屈辱

太祖の即位も武將驕横の爲なり。太祖もと後周の節度使なりしが、其北征の陣中、一夜醉臥したるに、翌朝部下の將士は、強て天子の御服たる黃袍を著せて、萬歲歡呼の間に之を天子に推戴したるなり。

宋遼交渉 さて太祖の時には、當時の東亞の二大國たる宋と遼との間も、大事なかりしが、太祖の次の太宗は天下一統の勢に乗じ、曩に遼が五代の後晉より取りたる北支那の地(前章を)を恢復せんと欲し、遼を伐ちしかば、宋遼の好こゝに破れたり。然れども、大体宋軍は利あらず。太宗の子眞宗は、大舉して南下せる遼軍を澶州(直隸省)に防ぎしも、勝利の望なかりしを以て、遂に遼を弟とし、宋を兄とし、而して毎歲銀十萬兩、絹廿萬匹を遼に與へて、和約を結びたり。(六一六)かくて遼は愈、宋を侮るに至れり。

遼の全盛 是時、遼は太祖(耶律阿保機)の玄孫聖宗位に在り、賢主

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

(1) Lake Baical  
遼は一時東  
亞の最強國  
たり

西夏の實利  
虚禮

宋代第一の  
仁君

の聞えあり。宋と和し、東南高麗を征服せり。當時遼の領地は、東は日本海に瀕し、西は天山に接し、南は支那の北邊を併せ、北はバイカル湖邊に至り、國中に五京を立て、(其中の北京一京は)高麗以下六十餘國の朝貢を受け、遼の全盛時代にして、又東亞の最強國たりしも、聖宗死後國勢不振となれり。

**宋夏遼三國の交渉** 時に西藏族の趙元昊なるもの支那の西北に據り、國を西夏と號し、連に宋の西邊を侵せり。時に宋は眞宗の子仁宗の代なりしが、遼はこの西夏の難あるに乗じて、南侵の勢を示したれば、宋は毎歲銀絹各十萬を増し贈りて、和約を繼續せり。後又仁宗は西夏にも毎歲多額の銀絹を贈り、宋の臣下たる禮を執るを約して、和を結びたり。

**仁君賢臣** 仁宗の時、對外の勢は振はざりしも、仁宗は恭儉にして、人を愛し、民を恤むの心あり。宋代第一の仁君として、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

名臣大儒

神宗の氣概  
雄心



漢の文帝と並べ稱せられ、其内治觀るべきものあり。

又當時は、名臣大儒頗る多く、韓琦、范仲淹、司馬光、歐陽修、周敦頤、程顥、程頤等は特に有名なるものなり。

第十七章

宋の中世

(王安石の新政 澁金 興亡宋の南渡)

**神宗と王安石** 上記の如く、宋は太宗以來、屢外交上の失敗あり、其財政も、國家多事、外國贈幣等の爲に、亦大に困難の狀あり。仁宗より英宗をへて神宗に至るや、雄心氣概あり、奮發して國勢を振ひ興さんと欲し、王安石を擧げて、宰相となせり。是に於て、安石は舊法を改めて、新法を案じ出せり。其要は

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

富國強兵の策

神宗不如意の歎

富國と強兵との二點に在り。安石は先づ特に第一の點に注意し、國庫の充實を務めたり。新法中、青苗、均輸、市易の諸法は富國策として、保甲、保馬の法は強兵策として有名なり。かくて、神宗は大體内政を王安石に委任し、更に進んで外征の事に従ひしが、理財強兵の結果猶未だ擧らざりしが爲に、失敗を招くも多く、神宗は勤勉苦心の効なく、終に不如意の歎を抱きて崩し、又朝廷に於ては二大政黨の争起りたり。

**新舊兩派の黨争** 王安石の新法發布以來、宋朝には、王安石一派の新法黨と、司馬光一派の舊法黨との黨争あり。互に其政論を鬭はすと、三十餘年に及び、新法黨の盛時には、王安石を尊んで、孔子の聖廟に合祭するに至れり。然れども、新法は畢竟一利を起すは一害を除くにしかずといへる時の民情に反し、且つ其實行に伴へる干涉收歛の弊ありしを以て、却

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

司馬溫公

つて人民の不平と騷擾をひき起したり。

舊法黨の領袖司馬光は、即ち幼時より穎敏にして、嘗て水を入れたる甕を破りて、其中に陥りたる小兒を救ひ出したりと傳へらる、司馬溫公なり。其長ずるや益、賢明、在官中は遼人も西夏の人も之を畏敬して、敢て侵略を恣にせざりし程なりといふ。又其卒するや、京師の四民は市を罷め、其像を畫きて之を賣り、畫工富を致す者ありしと云ふ。或人溫公に一言以て終身之を行ふべき者を問ひしに、溫公は、其誠乎、といひ、其人重ねて其修養の法を尋ねたるに、自不妄語入、と答へたりといふ。

**宋遼の衰運** 宋は神宗の後哲宗を経て徽宗に至り、多藝の君なるも、治國の才に乏しく、新法派の蔡京等政を執りて、權威を弄し、且つ帝に勸むるに奢侈土木を以てし、國費多大、國運漸く衰弱せり。又遼に於ても、一時東亞最強の盛運を見たる聖宗時代の後は、國勢漸く振はず、徽宗と同時代の暗弱な

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

宋遼漸衰金國勃興

金の太祖阿骨打

- (1) Nüchen.
- (2) Akuta.
- (3) YeliTasni.

遼の滅亡

西遼建國

金宋の強弱

る天・祚帝に至り、衰運益甚しきに當りて、金といふ一強國遼の北方に現はれたり。

金の興起及び宋遼金の關係 金はもと女眞と號し、現今の

滿洲人種の祖先にして、黒龍江地方に繁殖し、遼に隸屬せし

が、阿骨打女眞の長となるに及び、遼の國運衰へ、且つ天祚帝

の暗弱なるに乗じ、遼の軍を破りて、獨立し、都を今の滿洲吉

林省内に定め、國を金と號す(七五)之を金の太祖といふ。時に

宋は徽宗の代なりしが、金の勃興を聞き、之と同盟し、遼を挾

擊して、其他を分割せんを約し、金は東北より、宋は南より

遼を攻撃して、遂に遼を滅せり。遼は建國より九世二一〇年

なり。(八五七)此時遼の王族耶律大石は餘衆と共に中央アジア

に遁れ、西遼國を建てたり。

然るに、此役金軍は連勝せしも、宋は連敗せるを以て、遼の舊

一 二 三 四 五 六 七 八 二 三 三 三

地分割に當りて、金は殆んど其全部を取り、宋は金に多額の銀絹を贈りて、僅に燕京(今北京)と其附近の地を得たるのみ。しかも是より後、宋は遼よりも更に強大なる金と其境を接するに至りしは宋の失策なり。

兩皇北行 かくて遼は宋軍の弱を看破し、太祖(阿骨打)の弟太

宗は長驅南下して宋を攻む。徽宗は乃ち己を罪して、位を其

子欽宗に譲り、勤王の軍を起して金に當りしも、金軍は遂に

宋の都汴京を陥れ、徽宗、欽宗の兩皇並に后妃皇族以下三千

餘人を執へて北に還れり。(八七七)

宋の南渡 是に於てか、欽宗の弟高宗位に即きしが、金の南

侵の勢を恐れ、遂に揚子江南に退却して、都を臨安(浙江省杭州府)に

遷せり。(九一七)之を宋の南渡と稱し、是より後を南宋といひ、以

て汴京を都とせる北宋に別つ。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三 三 三

南宋北宋の別

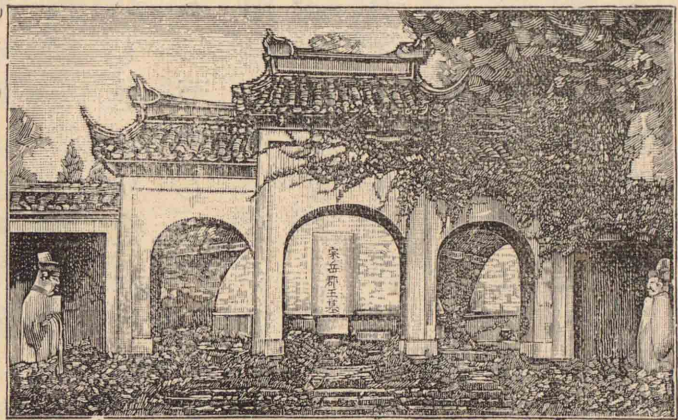
宋の大敗

第十八章 宋の末世(宋金蒙古の關係)

11 有 4 十

主戰論者

講和論者



(岳飛の墓)

宋金交渉及び宋の和戰兩派 南  
宋の時、宋人は對外奮發の念を起  
し、南渡の初め、李綱、岳飛、胡銓等忠  
勇なる軍人並に學者の主戰論者  
少からず、若し上下皆一致したら  
んには、恢復の業も難からざりし  
ならんに、元來高宗は兩皇及び生  
母韋太后が金に在るを以て、和議  
を希望せるに乗じて、秦檜なるも  
の巧に講和説を唱へて、宰相とな  
り、金人が最も畏るゝ所の岳飛を

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

宋の屈辱的  
和約

岳飛の忠勇

(1) Harbin.

殺して金と和し、境界を改定して、土地を金に割譲し、毎歲、銀  
絹各廿五萬兩匹を贈るとなし、且つ金の封冊を受くるが  
如き屈辱的條件を結びて、敵國に死せる徽宗の柩及び韋太  
后を迎ふるを得たり。(一八)かくて秦檜は益、專横となり、異  
議の人を貶竄して、金國に屈服したれば、金宋の間一時無事  
となれり。

岳飛の忠烈武勇は當時第一と稱すべく、金人も之を畏れて、ウゴラスハ撼山易、撼岳家  
軍難、といひ、其死を聞くや、酒を酌んで相賀せりといふ、平生、盡忠報國の四  
大字を其背上に入墨せり、又嘗て或人が「天下何時太平」なるを問ひしに、  
「文臣不愛錢、武臣不惜死、天下太平矣」といひしが如きは、其一名言なり、其杭  
州府にある岳飛の廟には、千載の後、猶香火絶えずと云ふ。

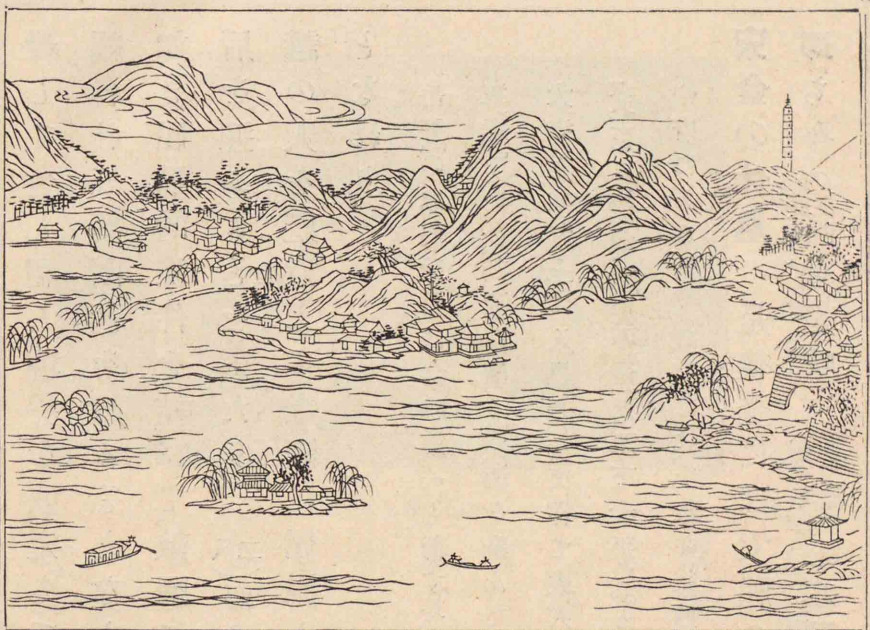
宋金の休息 是後、金には太祖の孫迪古乃其君たり、其舊都  
即ち今の阿勒楚喀河(松花江支流)水源地方の上京會寧府の邊鄙

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

金の遷都

北方の小堯舜

南宋の一賢君



(景風の湖西近附州杭即安臨)

なるを厭ひ、燕京即ち今の北京に遷都し、益、南侵を圖り、遂に大軍を以て宋を攻めしが利あらず、且つ軍中に弑せられ、其從弟世宗帝位に即けり。世宗賢明にして、北方小堯舜の名あり。是と同時に南宋に於ては、孝宗位にあり、又賢君の稱あり。かくて、宋金の間無事にして、南北一時休息するを得たるを、三十餘年な

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

金宋の衰弱

蒙古人物興

金主の大志  
文才

り。然れども、兩國の氣力共に衰弱して、僅に其餘命を保つが如き狀あるのみ。かくて亡國の運は近き將來に迫れるが如き觀ある時に當りて、北方の蒙古人は、其勢漸く強大となり、金宋二國を併呑して、遂に世界無比の大帝國を作り、東洋史上、一新紀元をなすに至りしとは、第三篇の近世史上に於て之を説かん。

金主廸古乃江南併呑の大志あり、畫工をして宋都臨安並に附近の吳山西湖の山水城市宮室を圖寫せしめて、以て屏風となし、且つ己れの像を圖して、馬を吳山の絶頂に策ち、其上に、萬里車書盡混同、江南豈有別疆封、提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰、といふ詩を題せりといふ。

第十九章 宋の儒學文藝と佛教  
儒學 宋の一代三百二十年の間の特色は、武にあらざして、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

宋代の特色  
漢唐儒者の  
言語學的研  
究  
宋儒の哲學  
的研究

朱子

陸象山



宋(子)學なり。

又朱子と同時代に陸九淵あり、朱子と並び立ちて別に一家の説を立て

むしろ文にあり。儒學研究の一新の如きは、特に支那文化史上に光彩を添ふる者なり。漢唐の儒者は多く經書の字句注釋、即ち言語學的研究の方面に盡力せしが、宋に至りては、字句の注釋のみに満足せずして、人性理論の哲學的研究に進みたり。是れ即ち所謂宋學又は性理學なり。  
此一新學風の開祖ともいふ可きは、北宋の仁宗時代の周敦頤なり。之に次いて二程即程顥、程頤の兄弟等之を發展し、南宋の晩年に至り、朱熹出で、之を大成せり。是れ即ち爾來儒學の正統と成なり、我國にも盛に行はれたる朱子學なり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

たる大儒なり。

文藝 唐代に美觀を極めたる文學も、唐末五代の亂世に衰へたるが、宋に至り、太祖以來崇文の風ありしを以て、文物再興の世となり、特に議論的文章に至りては、唐の人に優る趣あり。

宋初歐陽修まづ古文の復興を鼓吹してより、大家相踵いて起れり、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏及び王安石の如き、最も名なり。以上六大家と唐の二大家即ち韓愈と柳宗元とを併せて、唐宋八大家と稱す。

又宋代には修史の業頗る發達し、中にも司馬光の資治通鑑の如きは、一種の特色ありて有名なり。又宋代には書畫も發達し、徽宗の如きは、美術品を集め、特に繪畫を獎勵して、美術の發達を助けたれば、支那の美術史上、其年號によりて、宣和時代の名を設くる者るに至れり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

唐宋八大家

宣和時代

禪宗

佛教 宋代尤も盛に行はれたる佛教は、禪宗の一派にして、儒者の之を兼學せる者も少からず。我國鎌倉時代の初め、僧榮西も宋に遊び、本邦の禪學是より開けたり。北條氏の間、禪宗がひろく武人の間に行はれし事は、國史に於て知る所なるべし。

### 中古史の概要

中古史上、東亞に於ては、支那漢人と塞外異族との競争ありしが、漢族は屢對外遠征の優勢を示し、特に漢唐二代の如きは、漢人建設の世界的大帝國にして、東亞と他の亞細亞諸國との直間接の交通あり、希臘的文物の東來、佛教の傳播、及び東西洋交通等の大事件は、此時代に起り、彼の儒學の統一隆盛もまた此時代の事なり。然れども、元來漢族の擴張は、國民の公意に由る者少く、君主の大望と名譽心に由る者多し、故に其勢力一回の擴張あ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

れば、即ちまた一回の縮小あり。中古史上、前後相次で起れる蒙古滿洲地方の諸族、匈奴、鮮卑、突厥、契丹、女眞の支那漢族に及ぼせる迫侵、及び其侵入より生せる支那の各種言語の變化は注意すべき事なるべし。尙又是等諸族の亞歐兩大陸に及ぼせる直間接の影響も亦少からざるなり。朝鮮に於ては、國內諸部の起伏と、其東(日本北滿洲)西(支那三隣)に對する外交との歴史多く、又和漢交渉、文化、東傳の事件も相次で起れり。印度に於ては、アリアン種族の建國、及び佛教の興隆の後、數朝の興亡を経て、佛教は印度本土に振はす、波羅門教の一變體たる溫都教之に代り、此時代の晩年に至り、一時印度の國教となるに至れり、  
なほ又中古時代の漢人歴代の革命の大勢と、塞外諸族盛衰の大略を表示すれば左の如し、



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二



第三篇 近古史(皇紀一八五〇年頃に至るまで大略四二三年頃)

第一章 蒙古の勃興、成吉思汗の武略

- (1) Lake Baikal.
- (2) Onon.
- (3) Kerulen.
- (4) Temujin.

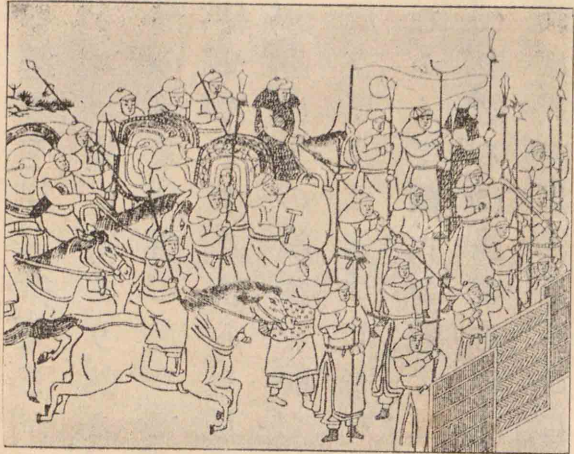
鐵木眞成吉思汗

(5) Djingiskhan.

成吉思汗即位 宋金相争ふの時、支那の北方に勃興して、遂に亞歐兩大陸に跨れる大帝國を建てたる蒙古族は、もとバヤカール湖の東方、黒龍江の上流オノンケルレン(1)兩河の地方に遊牧し、初めは遼と金とに屬せしが、宋末に至り、鐵木眞なる者あり。幼にして、其父エスガイを失ひ、其母ホエルの艱難なる養育の下に成長して、逆境の間に英雄となり、つひに蒙古部の長となり、ナイマン等の諸部落を併呑して、殆んど内外蒙古の地を占領したれば、各部の酋長をオノン河上に會して、大汗(大)の位に即き、成吉思汗(堅強なる大王)といふ尊號を受く。(一六八)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

西夏と金との攻撃



(兵陸人古蒙)

蒙古人は當時開化柔弱の風を受くること最も少く、固有粗剛の蠻風を保存すること最も多く、且つ蒙古人は特に騎戦に長じ、軍紀特に嚴なるを以て、戰鬥力最も強きが上に、蒙古勃興の際は、金國も漸く弱く、其他支那塞外の諸異族にも強者なかりしを以て、大に勃興蠶食の好機を得たり。

成吉思汗遠征

かくて成吉思汗は先づ南下して西夏を降し、尋て金を攻めたるに、衰運に傾ける金人は之を防ぐこと能はず。公主金帛を獻して和を乞ひ、燕京(今北京)をすて、汴京(河南省)に遷り、黄河以北の地を失ふに至れり。時に蒙古の西方天山北路、及び中亚地方には、是より先きに滅びた

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

中亞の二大國

中亞遠征

- (1) Djoutchi, Tchagatai, Ogotai, Toului.
- (2) Caucasus.
- (3) Russia.

る遼の王族耶律大石が建てたる西遼並にホラズムといふトルコ族の國あり。然るに成吉思汗が征服したるナイマン部の餘衆は西に走りて、西遼を奪ひ、其勢に乗じて蒙古に復讐せんとする狀ありしを以て、成吉思汗は金の征伐より還り、直に其の銳鋒を轉じて西方遠征を企てたり。

成吉思汗は先づ其將を發してナイマンの餘衆を征服せしむ。かくて蒙古の領土は直にホラズムと其境を接するに至れり。然るに偶、蒙古の隊商ホラズムに入りて殺害せられたれば、成吉思汗はつひに其子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷と共に、ホラズムに進入して、忽ち之を征服し、敗走せるホラズム王を追撃せる一隊は、更に進みてカウカサスを踰えて、阿羅思(今シニア)を侵略せしが、印度方面に進入せる成吉思汗の本軍の東歸と共に、亦軍を收めて東に歸れり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

西征七年

太祖

太祖廿年間の征略

成吉思汗の征略  
 内蒙の征略  
 天山南の征略  
 中亞の征略

(1) Kuriltai.

クリルタイ

金の滅亡

かくて、成吉思汗は西征七年にして本國に歸りたる後、再び西夏を攻めて、之を滅し、更に進みて金を滅せんとしたるが、六盤山(甘肅省)南の軍中にて病歿せり。(一七八)之を蒙古の太祖といふ。太祖は實に成吉思汗と號してより二十年許の間に、内蒙古、天山南北路、中西アジアの大部分に亘る大地方を征略したるものなり。

### 第二章 蒙古の南征及び西伐

**太宗南征** 蒙古の俗、大汗推戴及び和戰の大事は、王族功臣及び酋長等より組織せるクリルタイといふ大會にて議定するを常とす。太祖の死後、其第三子窩濶台は衆議によりて大汗の位に即けり、之を太宗と云ふ。太宗は父の遺志を継ぎ、金を攻めて之を滅し、(一八九四)金は建蒙古と宋とは、直に其

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

境を接するに至れり。尋て太宗は都を(1)ハ喇和(2)林(3)（外蒙古の河畔）に定めたり。

高麗降服 時に高麗は、是まで宋・遼・金の三國に對し、巧に其國運を維持して、蒙古の初に至る。成吉思汗の時は、即ち高麗第二十三世の高宗の時なり。固より蒙古の武威に抗するこゝと能はず、遂に之に朝貢し、又之に叛きしも、太宗に攻められ、て、又之に降れり。

拔都西征 かくて太宗は東方稍無事なるを以て、又太祖の志をうけて、西方遠征の役を起せり。

西征の主將は拔都(3)（太祖の子長子）にして、太宗の子貴由(4)、太祖の四子拖雷の子蒙哥(5)及び老將速不台(6)等之に副として、歐洲に侵入し、先づ阿羅思を蹂躪して、遂に中部歐洲に進み、南進の一隊はハンガリーに入り、北進の一隊はポーランドを攻め、

- (1) Karakorum. (6) Subtai.
- (2) Orcon. (7) Hungary.
- (3) Batu. (8) Poland.
- (4) Kujuk.
- (5) Mangu.

高麗叛服常なし

歐洲侵入

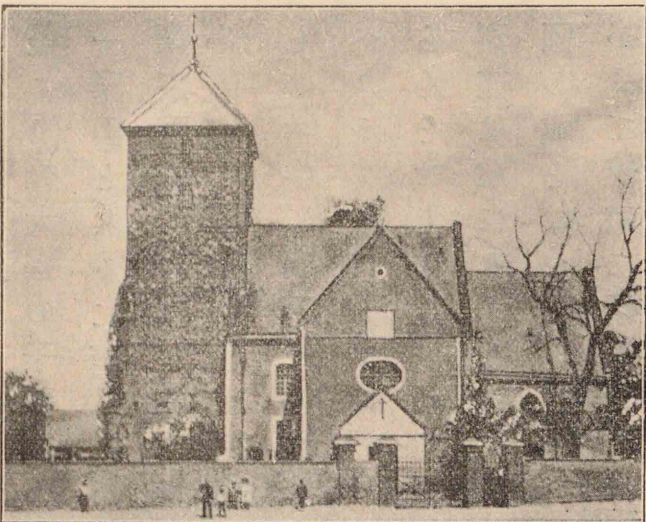
一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三 三

- (1) Silesia.
- (2) Germany.
- (3) Wahlstatt.

ワールスタットの戦

- (4) Volga.
- (5) Sarai.
- (6) Kipchack.

欽察汗國



（世二一リンへ公アツレシ）の死の跡の教會の會堂

シレジアに入りて、ポーランド及びドイツの諸侯騎士郷兵等の聯合軍を大にワールスタットの野に破り、(1)其猛威は

一時大に全歐洲を震動せしが、太宗の訃音に接したるを以て、全軍急に東に歸れり。(2)時に拔都は留りて、征服諸國を鎮撫し、後、ザルガ河下流のサライに都し、東歐及び西亞の一部に跨れる。欽察汗國の祖となれり。

蒙古内亂の原因 太宗の死後、其子定宗(貴)立ちしが、在位三年にして死するや、クリルタイ大會は、太宗の孫を立てず

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三 三

蒙古宗室の不和

- (1) Kubilai.
- (2) Hulagu.
- (3) Egypt.
- (4) Tabris.
- (5) Ilkhan.

世祖忽必烈汗の即位

して、拖雷の子蒙哥を推して、大汗となせり。之を憲宗といふ。是より後、太宗の子孫は、不満を抱き、後日蒙古大帝國分裂の一原因となるに至れり。

**憲宗時代の征伐** 憲宗はまた大征伐を企て、まづ其弟忽必烈をして雲南地方を征せしめ、尋で自ら將として宋を伐ちしが、軍中に病死せり。又憲宗の時、其弟旭烈兀は西方を征し、ベルシア、小アジアの回教諸國を征服し、將にエヂプトに入らんとせしが、憲宗の凶報に接して、其軍を旋せり。而して旭烈兀は遂にタブリスに都して、西亞の大部に君臨し、伊兒汗國の祖となれり。

かくて憲宗に繼ぎて大汗となりしは、(二〇九)即ち有名なる世祖忽必烈汗となり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

遷都及び國號新定

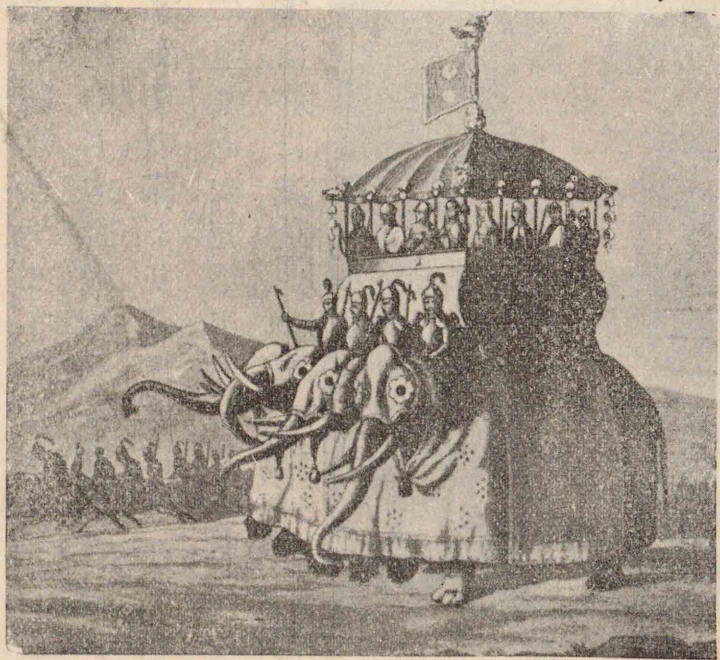
却を  
まふ  
カラ  
42  
指

### 第三章 世祖の大統一及び東侵の失敗

**世祖の統一** 世祖即位後、都を燕京(今北京)に遷し、之を大都と名け、國號を立て、元と稱す。かくて世祖は祖先の志を繼ぎ、宋を征せり。時に宋は中



(祖世)



(圖る乘に輦象中軍祖世)

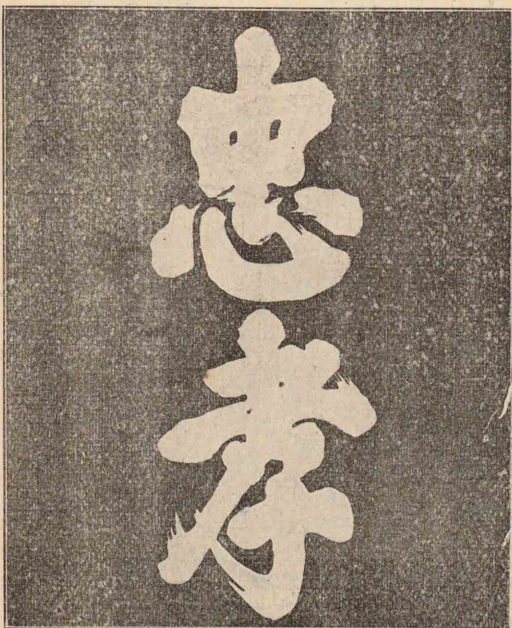
一 二 三 四 五 六 七

宋の滅亡

古史の末に記したる孝宗の後、國勢竟に振はず、元の南征するや文天祥等勤王の師を起ししも、衰弱の宋は、竟に連勝の元軍に敵すること能はず、臨安の都より益南方に遁れ、終に崖山(今の廣東灣)に遷るに至りしが、元軍の壓迫益強く、宋の上下殆んど皆海に投じ、宋は終に滅び、(一九三九、太祖以來十南渡以後)世祖は全く支那を一統せり。

文天祥の忠義

文天祥は博學能文にして進士及第に第一優等の名譽を受け、官丞相に至る。忠義の心厚く、切に宋の恢復を圖りしも、時勢不利にして、終に元軍に囚へられ、節操愈堅く、遂に従容死に就



(字二孝忠意筆祥天文)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三 四

高麗及び南方諸國の降服並に來貢

(1) Java.  
(2) Sumatra.

文永弘安の兩役元軍の大敗

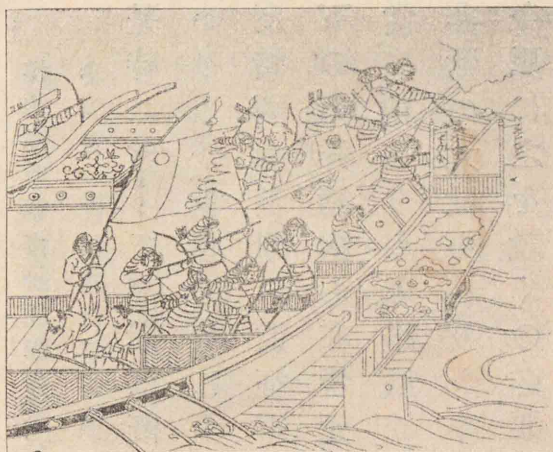
是時に當りて、高麗は既に早く蒙古に降りしも、心服の風なかりしが、世祖の時に至り、終に元に降服せり。其外今の後印度諸國も世祖の遠征軍に降服したれば、ジャバスマトラ以下の南洋諸國も亦皆元に來貢せり。斯の如く世祖の外征は常に功ありしも、唯我が國に對せる文永弘安兩度の役には、非常の大敗を被りし事は、我國史上に有名なる事件なれば、今更に之を説くの必要なかるべし。

**大版圖** かくて元は太祖成吉思汗以來、祖父子孫三世の間僅に七十年許にして、アジア大陸の大部と、歐洲東部とを征

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三 四

四大汗國

元朝本國



(元の海軍)

する者なり。

服して世界空前の最大帝國を統一するに至れり。此大帝國內には、蒙古諸王の自治的私領の大なるもの四あり。是れ即ち既に之を記したる欽察汗國、伊兒汗國の二國と、窩濶台を始祖として、西部蒙古アルタイ山脈一帯の地を領せる窩濶台汗國及び察合台を始祖として、中亞地方を領せる察合台汗國の二國なり。而して皇帝たる世祖は、東亞地方支那本部及び蒙古其他の大版圖を直轄し、且つ名義上四汗國をも統治

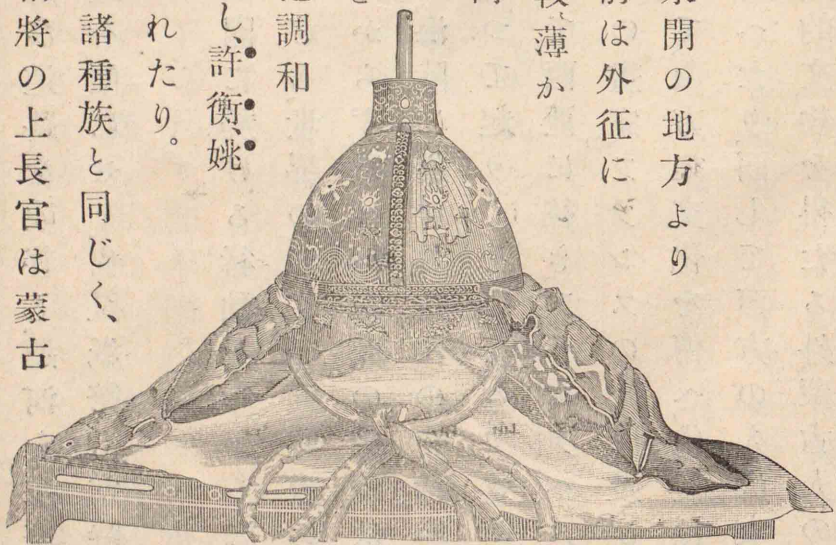
一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 二 三

第四章 元の治亂

元初の内治 元はもと北方未開の地方より起り、諸制度備はらず。世祖以前は外征に忙はしく、内治に關する注意較薄かりしが、世祖の大統一以後は、内治に注目し、諸制度も漸く其體裁を備へ、國民も亦稍休息せり。世祖は特に蒙漢兩族の同化調和を圖り、其政府にも兩者を併用し、許衡、姚樞、劉秉忠等の漢人も重用せられたり。然れども漢人は帝國內の他の諸種族と同じく、次官以下に任せらるゝのみ、相將の上長官は蒙古

蒙漢兩族の關係

元初の内治 元はもと北方未開の地方より起り、諸制度備はらず。世祖以前は外征に忙はしく、内治に關する注意較薄かりしが、世祖の大統一以後は、内治に注目し、諸制度も漸く其體裁を備へ、國民も亦稍休息せり。世祖は特に蒙漢兩族の同化調和を圖り、其政府にも兩者を併用し、許衡、姚樞、劉秉忠等の漢人も重用せられたり。然れども漢人は帝國內の他の諸種族と同じく、次官以下に任せらるゝのみ、相將の上長官は蒙古



(元の安弘の分捕の兜)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 二 三

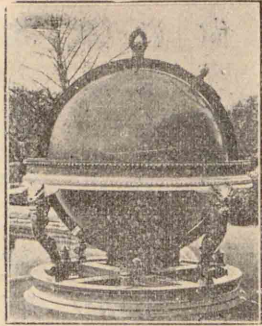
東西の  
文化の  
交渉

- (1) Italy.
- (2) France.

の掌る所たり。又世祖は曆法及び道路を改善し、運河を完修し、國都燕京と南支那との交通を便にせり。尙又紙幣も當時其國內に行はれたり。

**東西大交通** 蒙古人の亞歐諸國に於ける行動を考ふるに、むしろ破壊的の事較多しと雖ども、世界の人文發達建成の方面に於ける功績も亦没す可からず。是れ即ち元の領地は亞歐の兩大陸に跨れるを以て、海陸に於ける東西の交通盛に起り、東西文化の交渉も亦隨つて起りしを以てなり。當時支那人は工人又は勞働者として西亞に往き、アラビアヘルシアの學者及び技師、イタリヤの畫家、フランスの金匠、及びドイツの鑛夫等は東亞に來りて、西方の文化を傳へ、佛徒は來りて印度、西藏的の文化を傳へたり。而して西方の人は支那より絹及び陶器其他の物質的文物を得たる外、蒙古人の

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



元代建立北天宮  
文臺の上の天宮

大國建設及び東西交通の勃興は、頗る西人の地理學の發達と一般見識の進歩とを助け、世界文化の發展に間接の影響裨益を致したり。

① 當時東來の西人中、尤も有名なるは、イタリア人マルコポーロ及び② アフリカのマロコ出身のアラ

③ ビア人イブン、④ バッタータなり。マ

⑤ ルコポーロは十七歳の時イタ

⑥ リアのヴェニス市を出て、元

⑦ に在ること十七年、頗る世祖の信

⑧ 任を得たり。其本國に歸るや、東

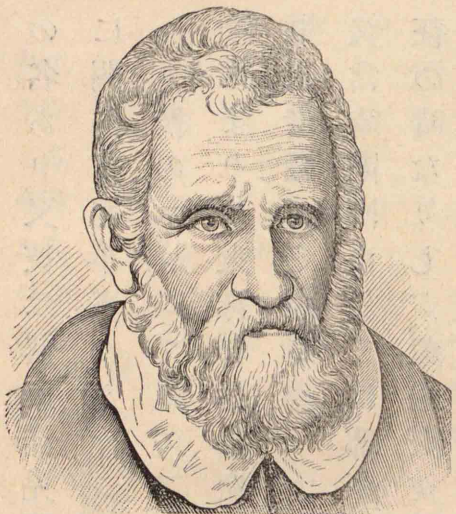
⑨ 洋より持ち歸れる珍物奇品多

⑩ かりしを以て、一時「マルコ長者」

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

- (1) Marco Polo.
- (2) Africa.
- (3) Marocco.
- (4) Ibn Batutah.
- (5) Venice.

マル  
コ、  
ポ



(マルコポーロ)

(1) Zipangu.  
(2) Columbus.  
(3) America.

(4) Innocent IV.  
(5) Louis IX.

元と耶蘇教國

東西貿易

の名あり。又彼は其東洋見聞録を公にせしが、其書中我日本に關する記事あり。ジバング(日本)の名は始めて歐洲に傳はれり。彼の<sup>(1)</sup>コロンブスの<sup>(2)</sup>アメリカ發見も、亦マルコポーロの書によりて、東洋に近路をとりて航海せんとしたるより起りし者なりといふ。  
又當時歐洲に於ては、耶蘇教徒が回教徒に對して十字軍遠征の時なりしが、蒙古人が回教諸國と戰爭せるを聞き、遠く蒙古と同盟して、近く回教徒を攻撃せんと欲し、且つ又東亞地方に耶蘇教布教の意もありしかば、ローマ法王<sup>(4)</sup>インノーセント四世、フランス王<sup>(5)</sup>ルイ九世等の使者及び宣教師の元に来るもの少からず。  
尙又東西の商人は東洋貿易の巨利に注目し、東西海陸の貿易大に開けたり。特に南支那の泉州は當時繁昌の港となり、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

元代文學の一特色

郭守敬

分裂衰微の原因

(一) 領内不統

外國商人の來住者頗る多し。  
**元の學術** 元一代名儒なきにあらず、世祖に信任せられたる許衡及び吳澄のときは、共に一代の名儒たり。然れども、元來武事に長せる<sup>(1)</sup>元朝の文學は到底唐宋の隆盛に及ばず。但し戯曲小説は頗る發達して、元代文學の一特色をなせり。三國志演義水滸傳などの歴史小説は、元代の作なり。なほ天文曆法に長せる郭守敬の如き學者を出したるは、亦元代の誇りとすべきことなり。

**蒙古帝國の分裂衰微** 元は世祖に至りて隆盛を極めしも、其後漸く分裂衰微せり。今之を考ふるに、種々の原因あり。  
(一) 元の境域甚だ廣大にして、各地方特別の文化を有し、統一の實なき事。<sup>(例へば)</sup>世祖は支那文化を主とし、西方汗國は蒙古固有の文化<sup>(は)</sup>を主とし、北方汗國を主とせるが如し。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



(二) 相續法の缺點

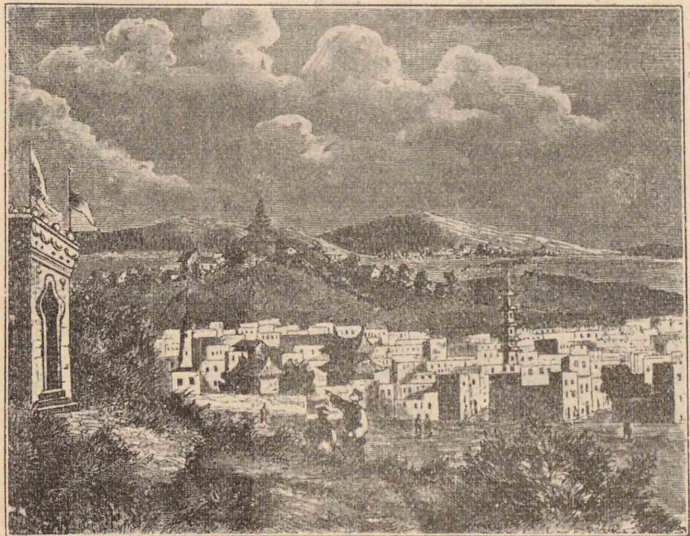
(二) 蒙古の相續法は、必ずしも父子の世襲に限らず、クリルタイ大會の決議によりて定まるを以て、帝位相續の際

は常に多少の紛争を生じ、權臣の専横亦之に伴ひて起り、或は内亂を起すに至りし事。

(三) 内亂の後、諸汗國獨立分裂の勢成りたる事。

(四) 連年の戦争の結果として、財政の困難となりし事。

(五) 世祖以來、西藏より傳來の佛教の一派たる喇嘛教を尊信し、遂に僧侶専横の弊



(西蔵のサツラ景)

(1) Lamaism.

落人、不平

(三) 分裂の勢  
(四) 財政の難  
(五) 喇嘛教の弊

を生じ、且つ其佛事の費多かりし事。

群雄の蜂起

安の大原因たる洪水飢饉地震等の天災地變相ついで起りしが上に、元來漢人は蒙古朝廷に不満なるを以て、支那歷朝の末路に共有なる群雄并に賊徒四方に蜂起せり。就中江淮(揚子江)地方に起りたる朱元璋の勢最も強く、まづ南方を平定し、遂に北進して元を攻めたれば、元の順帝(世祖六孫)は國都燕京を棄て、蒙古に逃れ去り、世祖國號一定以來、十世九十八年にして、元は亡びたり(二七〇)。是に於て朱元璋は帝位に金(舊名建康)に即けり。之を明の太祖(洪武)といふ。かくて支那は復漢人の天下となれり。

明の太祖洪武帝洪武は太祖の年號なり、明代より天子一代一年號の制なり、従つて年號を以て帝王を呼ぶの風起れり、は少時父母及び長兄を失ひ、

元朝の滅亡

明の太祖金陵に都す

孤立依る所なく、佛寺に入り僧となり、乞食までしたることあり。嘗て漢の高祖が微賤より起りて、天下を一統せる偉業を聞き、大に感奮する所あり、亂世の風雲に乘じ、幸運の寵兒となりて、つひに大業を成したるなり、

第五章 明の初世(太祖の創業、靖難の役、成祖の武功、文廟)

太祖施政の得失

太祖の政治 明の太祖は、即位の後、元の餘衆を撃破し、國內の群雄を征服したる後は、意を内治に注ぎ、且つ漢人的文化の復興を力め、法典を修正し、六部の官制を再興せり。太祖は又國防に注意し、宋代に鑑みて、諸王子を要地に封じて、帝室の藩屏となしたるは不可なきも、帝の性残忍猜忌の缺點を有し、死後の事を慮り過ぎて、多く功臣を誅戮したるは、失策といふべし。

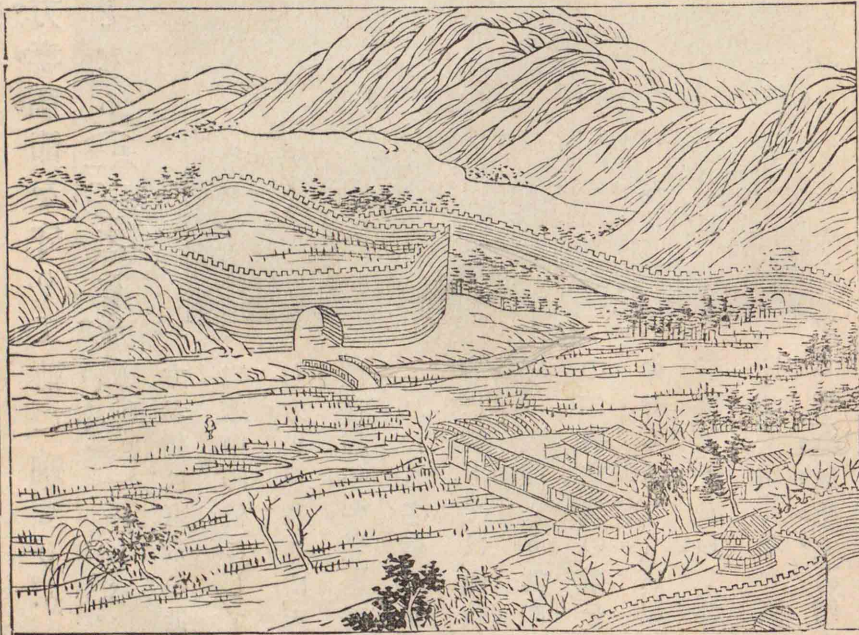
靖難の役 太祖の死後、年少の皇太孫惠帝(建文)即位せしが

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

燕王舉兵

靖難の師

叔父諸王の強大を恐れ、之を抑へんとせしかば、素より野心を懷ける燕王棣(太祖の四子)は遂に兵を燕京に擧げ、君側奸臣の誅戮を名とし、其兵を靖難の師と號して、金陵を攻めたるに、之を防ぐべき宿將なく、惠帝の南軍は、燕王の北兵に敵せず、且つ燕王に内通の宦官ありしかば、金陵の都終に陥り、惠帝は出奔し



(金陵の明宮故址)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

成祖永樂帝

方孝孺の節義

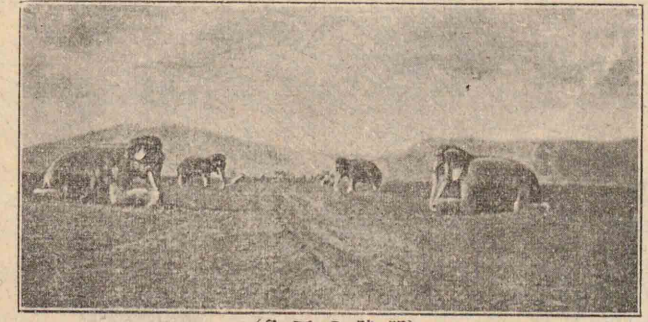
て往く處を知らず。儒臣方孝孺節を守りて難に殉ぜり。かくて燕王は自立して天子となる。(六二〇)之を成祖(永樂帝)といふ。



(官文人石陵明)



(官武人石陵明)



(象石の陵明)

方孝孺は惠帝の世子以來の師傳にして、若し方氏を殺さば天下讀書種子絶矣」と稱せられたる名儒なり。此難に當りては、節義を守り成祖より其即位の詔書文案の事を懇命せらるゝも、成祖の不義を痛罵して、之に應せず。成祖之を強ふるや、「燕賊篡立」の四字

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

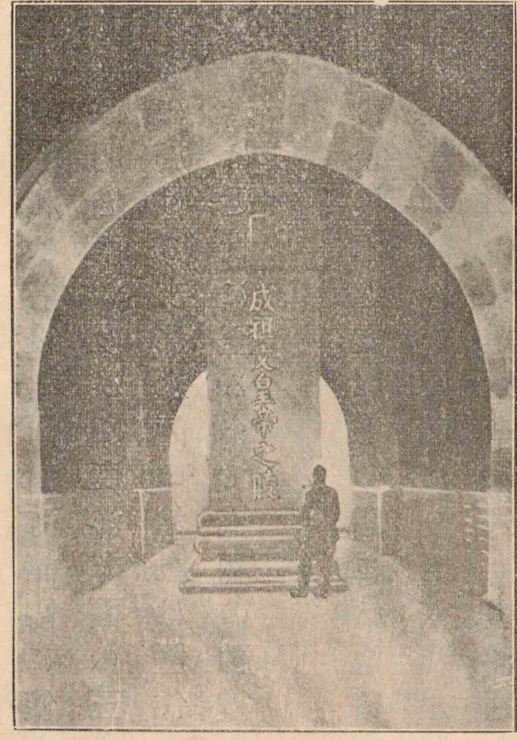
明の遷都  
北京と南京

漠北親征

を大書せしかば終に磔刑に處せられ、其家族學友及び門人の誅せらるゝ者、數百人に及び、其結果明代の文運を害するに至りしといふ。

成祖の雄略武功 成祖一代は明の盛時なり。成祖は燕京を以て北京とし、後北京に遷り、舊都金陵を南京と稱す。

帝の時内治其宜しきを得たるが、外征の功も亦少からず。北に向つては長城を増修し、又漠北を親征して、蒙古の餘衆を鎮壓し、南に向つては、安南地方を伐ち、一時之を征服せり。



(陵の帝樂永祖成)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

西南洋の經  
略 鄭和七回の  
遠征

海外交通

又成祖は惠帝の或は海外に出奔せしを疑ひ、宦官鄭和に命じて、海外を探らしめたり。鄭和は前後七回南海諸國に使用し、明の恩威を示したれば、明と南洋及び印度洋方面の三十餘國との交通起り、明初に於ける支那水師の活動は、歴代中第一の稱あり。南洋航海者は近世に至るまで、鄭和の神靈を崇拜する者あり。

日明交通

元寇弘安の役後、日本と支那との間には、僧徒商人等の私に通するのみ、公然國際の交通稀なりしが、我足利義滿は屢明と交通貿易して、明の永樂錢を輸入して、流通を助けたり。其後足利時代の本邦と明とは、其交通頗る繁く、明よりは藥種顔料錦繡諸織物を輸入せり。而して當時明にゆきたる本邦人中尤も有名なるは雪舟及び絶海等なり。

永樂錢輸入

雪舟及絶海

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

大徳は...  
指あり

宣宗宣德帝

陶製大層塔

第六章 明の中世及び末年

宦官の専横

初め太祖は前代の弊にこりて、宦官の政事に與るを禁したるが、成祖の即位するや、惠帝の宦官が内通したるを徳として、其禁を解きたれば、明代に於ける宦官の禍源ここに始れり。

宣徳の治

然れども、成祖の後、仁宗を経て、宣宗(宣徳)に至り、賢相多くして、國內善く生まれり。又此時代は、支那の工藝中美麗なる陶器の製造を以て名あり。彼の南京の有名なる陶製の大層塔は、明初の建築にかゝるものなり。

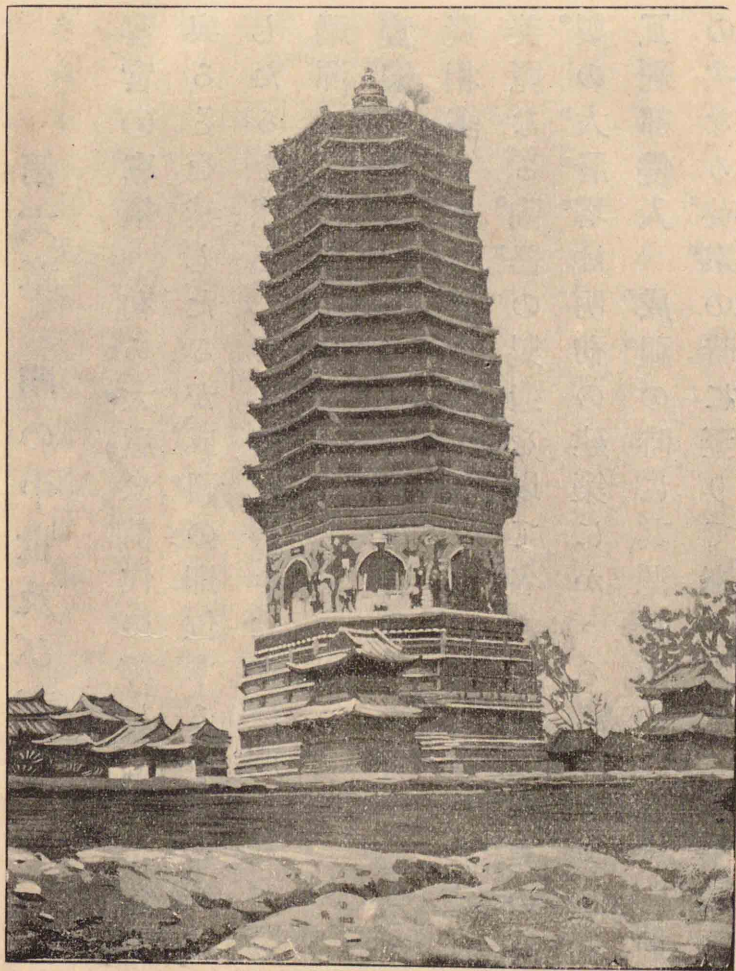
瓦剌部侵入

成祖の時に其源を發したる宦官の弊は、宣宗の次なる英宗の時に至りて漸く甚しく、之が爲め明の政府の紊亂せるに乗じて、瓦剌部といふ蒙古の餘衆南下して明

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

英宗大敗

に冠し、英宗は之を親征し、却つて生擒の辱を受け、僅に和議



(塔大の製陶の京南)

により、送還せられ、其後、蒙古の餘衆の入寇止まらず、明は防禦に苦むの

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

王陽明長知の說

陽明學

み。

王陽明の文徳武功 外寇斯の如きが上に、第十一代の武宗

の時に内亂ありしが、王守仁(號陽明と)能く之を平定せり。

王陽明は博學にして、獨創の思想見識に富み、始めて良知の說を唱へ、道は我心に求むべきことを説きたり。此學說は朱

子學に對し、陽明學として世に行はれ、我國にても、中江藤樹、熊澤蕃山、大鹽中齋等は、篤く之を信奉せり。

倭寇 明代北邊の患は上記の如くなるが、東南海邊も亦不

穩なり。弘安元寇の役後、我國南北朝分争の頃より、我西南海諸國邊民の頻に朝鮮及び支那の沿海を侵掠する者あり、明人は之を倭寇と稱す。

成祖の時、足利義滿と修交し、其後勘合符を定めて、彼我の通商を開きしより、倭寇の勢一時稍減じたるが、足利氏の末世

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

より又起り、明の奸民も之に加はりて、侵掠を事とす。其後明人力を盡して、大略之を平定したるも、其殘黨は猶臺灣によりて其近海に出没せり。

北虜南倭  
日本刀の銳利  
八幡船

明人は倭寇を畏るゝと甚しく、北方の蒙古と並稱して、北虜南倭といひ、特に日本刀の銳利を嘆美畏怖して、倭人揮刀如神、人望之、輒懼而走、といひ、また島夷出沒如飛、隼右手持刀、左持盾、大舶輕艘、海上行、華人未見、心先隕、と稱す。當時我國の海寇船は八幡大菩薩の旗幟を立てたれば、八幡船と稱せられたり。

東方の大變

**萬曆朝鮮の役** 所謂北虜南倭の二患滅したる後、明の外交は稍平和なりしが、明末神宗(萬曆帝)の時に至り、東方の大變起れり。是れ即ち我豊臣秀吉が明を伐つ第一着手として、先づ明の東藩たる朝鮮を征したる事なり。是時神宗は藩國の救助と自衛との爲に、朝鮮に出兵したるが、明は一定の成算

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

國力疲弊

南宋對蒙古

明人對滿洲

高麗の外交術

高麗對蒙古

なく、大兵を動かさず、大金を費し、而して屢大敗したるを以て、國力大に疲弊せり。  
**滿洲人勃興** さて中古史の末に於て、南宋の衰弱せる時に當りて、北方の蒙古が漸く強大となりて、終に之を滅すに至りし事は、既に之を述べたり。明末に於ても、其國力の疲弊せる時に當りて、其東北に勃興せる滿洲人の勢力は益強くして、終に明を滅すに至りし事は、之を近世史上に説かん。

### 第七章 近古元明時代の朝鮮

**高麗の降服** さて既に記せるが如く、高麗は宋代の初め、遼に屈服し、又宋の正朔をも奉し、金の起るや、又之に事へて、巧に其國運を維持せり。而して蒙古の成吉思汗の出でたる時は、高麗第廿三世の高宗の頃なりしが、固より成吉思汗の勢

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

元寇の役高麗の應援嚮導

元の外藩

に敵すること能はず。高宗は遂に蒙古に入貢せり。既にして蒙古の勢力は益々東方に伸び、高宗の晩年、高麗は終に元の太宗に征服せられたり。然れども、其後叛服常なかりしが元の世祖忽必烈汗の時、遂に全く元に降服せり。かくて高宗の子元宗は、元寇弘安の役の時、元軍に應援して之を導き、且つ其徴發に困められたが、元の大敗と共に、高麗も亦其人船軍費を損失すること少からざりき。次に元宗の子忠烈王は、もと久しく質子として、元の都に居りしものなるが、其王位に即くや、元の世祖の女を迎へて妃となし、其制度衣冠等元朝に倣ひ、文武諸臣の蒙古の女を娶るもの少からず。かくて高麗は、全く元の外藩となる。是迄遼金に對しては、朝貢の臣禮をとりしに過ぎざりしが、是時に至りて、高麗の内外の政治共に元の干涉を受け、殆ん

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

元の一諸侯の如し

元に臣事せず

李成桂

鄭夢周 朝鮮 九三〇

鄭夢周

ど元の一諸侯の如し。かくて又忠烈王より恭愍王に至るまで七代の間、高麗王の太子は元の都燕京に質子となり、且つ元の皇女を娶るを常とせり。然るに恭愍王の時は元の最後の順帝の時に當り、元の勢衰へたれば、其頃より後は、元に臣事せざるに至れり。高麗滅亡 然れども、高麗も内には姦臣の憂あり、外には倭寇等の患あり。其國勢依然として振はず。元亡びて明の興るや、また明に事へたり。然るに、明の初に當り、高麗の人李成桂なる者あり。倭寇を撃ちて功あり、漸く人心を收め、高麗王朝晩年の忠臣たる鄭夢周等の反對ありしにもかゝらず、終に自立して、王位に即けり。(二〇) (五二) かくて高麗は、三十四世、四十六年にして滅びたり。

鄭夢周は圃隱と號し、高麗王朝末年の大忠臣なり。我國にも使し、倭寇を止

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

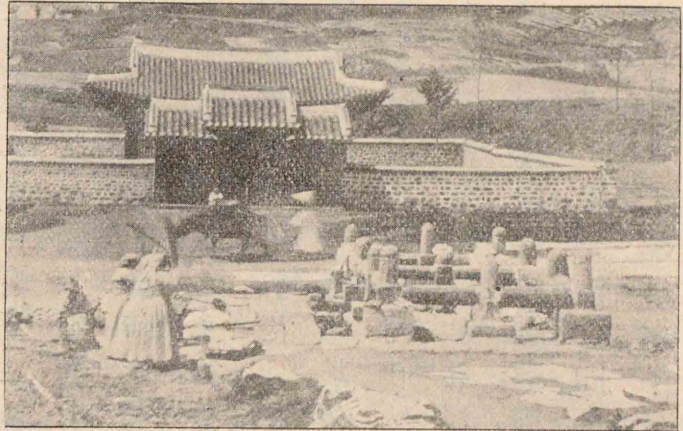
めんことを請ひしことあり。九州探題今川貞世之を厚遇す。夢周の九州に

在るや、詩を求むるもの少からず。後ち夢周は李成桂の黨與の爲に殺されて、國難に殉せり。九州の人傳聞して、之を悼惜せりといふ。今高麗の舊都たる韓國開城の城外に善竹橋あり、是れ即ち鄭夢周殉難の處なり。

李氏朝鮮建國

李成桂既に高麗

に代りて半島を一統し、明の太祖より新に朝鮮といふ國號を賜はり、且つ明の封爵を受け、東藩と稱せり。之を朝鮮の太祖といふ、今の韓帝の先祖なり。太祖は今の京城



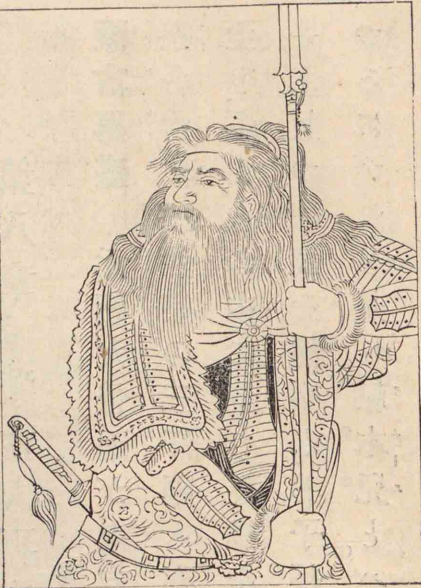
(跡の死忠周夢鄭)

朝鮮の太祖

(1) Söul.

(漢陽、漢城又は漢京とも云はる)に都し、其國を分ちて八道となせり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



(中古時代の朝鮮武士)

豊公征韓 李朝初世以來、日韓兩國の交通漸く復興せしが、太祖より第十五世の宣祖の時、我豊臣秀吉は明を討つ志あり。先づ朝鮮王に諭して嚮導たらし

めんとす。然るに、國初以來明に恭順なる朝鮮王は明を恐れて之に従はざりしかば、秀吉は大舉して先づ朝鮮を伐ち、(五二)やがて明に及ばんとす。



(中古朝鮮の旗) (右翼の虎火焔を持)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



此役我陸軍は連戦連勝し、朝鮮王は北の方義州(鴨綠江口)に走り明の援助を乞ふに至れり。かくて、明の神宗(萬曆帝)之を援けたれども、平壤に大敗せしかば、和議起りしも、竟に成らず。我軍再び朝鮮を征したるも、秀吉薨ぜしを以て、其軍を回せり。此役前後七年に亘り、戦後六年を経て、日韓兩國の和議成り、兩國の交通舊に復せり。

第八章 蒙古人再盛 (帖木兒の雄圖、莫臥兒帝國の建國)

蒙古再盛 元朝大帝國が東方に衰亡せる間に、西方にある察合台、伊兒、欽察の三汗國も亦皆衰へたり。然るに明の初に至り、蒙古人の中に忽ち英雄を生し、舊蒙古帝國の大部を統一し、且つ印度を侵略し、其子孫は遂に印度に一大帝國を建つるに至れり。是れ帖木兒とバベルとの兩雄なり。

蒙古人兩雄 (1) Timur. (2) Baber.

蒙古人の一衰一盛

前後七年

平壤の役

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

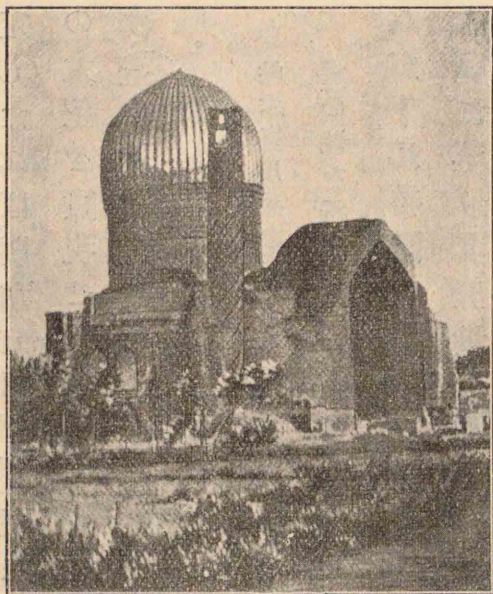
帖木兒の大望 帖木兒の雄略

第二の成吉思汗

(1) Kesh. (2) Samarcand.

第二の蒙古帝國

帖木兒の雄圖 帖木兒は碣石(中亞の南)より起り、察合台汗國に屬せしが、當時察合台汗國は、諸汗國中尤も蒙古人固有の慄悍なる氣風に富む。乃ち天に二日なく、地に二王なし、世界大なりと雖ども、我大望に比するに足らず。といひて、世界一統の霸氣に満ちたる帖木兒は、其慄悍なる國人を率ゐて、まづ當時分裂せる察合台汗國を統一して、元朝滅亡の翌年、撒馬兒罕に都を奠め、遂に伊兒汗國を併せ、欽察汗國を降し、尋で印度に入り、更に小亞細亞に進みて、土耳其帝を破り、かくて亞細亞の大部を平



(帖木兒の廟)

かくて亞細亞の大部を平

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

定したれば、明初(成祖永樂帝の時)更に東の方、明を滅して、世界一統の大望を實現せんと圖り、東征の軍を起せしが、中途に病死し、(二六五)成祖と帖木兒の東西兩雄の大衝突を見ずして終れり。

帖木兒用兵の初め、足を傷けて跛となりたれば、(一)チムールンク(チムール跛者の號を得たるが、西人は之を訛りて、タメルランと云ふ。)

**ムガール帝國** 帖木兒の死後、其大帝國は分裂せしが、明の中頃に至り、其五世の孫バベルは、中亞より進みて、北印度に入り、(三)デリーに都して、**ムガール帝國**(ムガールの轉音なり)を起せり。(二八一)  
バベルの孫(六)アクバル亦雄略あり、アフガニスタン及び中、東兩印度をも一統して、祖父の志を實現し、ムガール帝國の最盛時代を開けり。アクバルは實にムガール王朝第一の賢主

- (1) Timur i leng = (Timurlenk.)
- (2) Tamerlan.
- (3) Delhi.
- (4) Mogul.
- (5) Mongol.

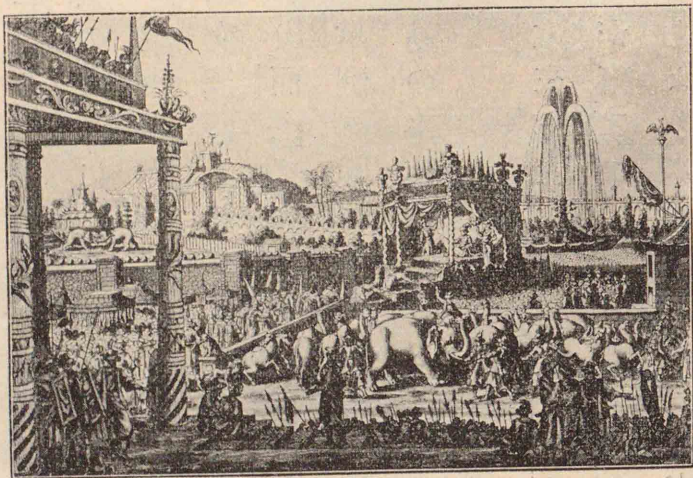
ル賢主  
アクバ  
ル (6) Akbar.

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

(1) Aurangzeb.

ムガール帝  
の衰運と  
西洋人の  
侵入

たり。  
其後アクバルの曾孫(一)アウラングゼブの時に至り、南印度を征して一時印度を統一せしが、國內の諸教徒を遇すると不公平なりしかば、人民離叛する者あり。且つ其後の君主皆庸劣にして、ムガール國漸く衰微せる時に當りて、西洋人の印度侵入あり。其事は近世史上に於て之を説かん。



(圖の華繁庭宮國帝ルーガム)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

第九章 歐人東漸の初期及び天主教の東傳

- (1) Portugal.
- (2) Vasco da Gama.
- (3) Cape of Good Hope.

東洋人主動  
西洋人原動  
東洋交通開  
始の由來

歐人東漸の  
發端  
葡人東  
來

**總說** 歐人の東漸は近古史上の一大事件にして、其東洋諸國に及ぼせる影響實に大なり。是より先き、元朝の時東西交通の盛なりし頃より、明の中世に至るまで、百數十年間は、東西の大交通殆んど中絶し、西洋人の東洋に注意する者少かりしが、明の中世(西曆第十)に至り、東西交通復興れり。但し蒙古時代には東洋人主動して、東西交通盛となりたるが、明代には、西洋人原動して、東洋に來れり。而して西洋人が新に東洋交通を開くに至りたるは、當時歐洲諸國に於て航海の術進歩し、新陸地の發見、殖民及び貿易の事業勃興せるに由る者なり。

**葡西兩國人** 先づ第一に東洋に遠來したるは、ポルトガル人なり。初め同國人(2) **バスコ・ダ・ガマ**が南アフリカの(3) **グードホープ** (喜望峯) を廻りて印度に達せしより、ポルトガル人の東

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

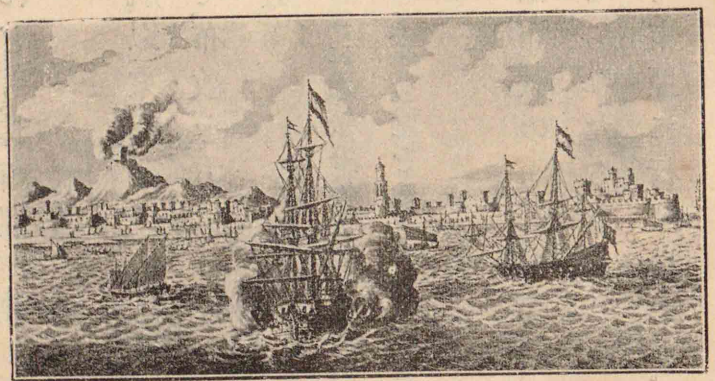
- (1) Goa.
- (2) Macao.
- (3) Spain (Hispania).

澳門  
西班牙人東  
來



(シツリ士教蘇耶)

に航する者多く、遂に印度の(1) **ゴア**を  
取りて、之に據り更に東して、支那海  
に航し、まづ **廣東** 港に入り、(2) **七** 尋で  
今も猶其有たる **澳門** を取りて、其根  
據地となし、(3) **我國** の **平戸** にも來  
り、頗る長く **東洋** 貿易の利を獨占せり。又 **イスパニア** も **ポル**



(門澳の末明)

一 二 三 四 五 六

トガル人に次いて東洋に來り、<sup>(1)</sup>フィリピン群島を占領し、<sup>(二二五)</sup>マニラに據りて、東洋貿易を營みたれども、其商權はポルトガルの下にあり。

**天主教の東傳** ポルトガル人の東航以來、耶蘇教特に天主教<sup>(3)</sup>ジエズイト派の教士も東に來りて、布教を力めたるが、中にもザヴィエー及びリッシ等尤も有名なり。

ザヴィエーは我國にも來り、九州中國及び京都等に布教せり。リッシは漢名利瑪竇と稱し、北京に入り、明の神宗の許可を得て、天主堂を建てたり。明人の歸依者も少からざりしといふ。

**西學東傳** 當時の西洋耶蘇教士には、布教の傍ら、天文學、數學、理學、砲術等を傳へて、明人に尊敬せられたる者あり。かくて是等の科學的洋書の翻譯も、始めて東亞に行はれたり。

- (1) Philippine Islands.
- (2) Manila.
- (3) Jesuit.
- (4) Francis Xavier.
- (5) Mathias Ricci.

マニラ

### 近古史の大要

近古時代に於ける東洋史上の特色は、**蒙古人の勃興隆盛**にあり。亞歐兩大陸に跨りて空前の大帝國を建設したる蒙古人の**元朝**一時の隆盛はいふに及ばず、元朝分崩して、東亞支那の地は、又漢族主權の天下となり、大體同一人種同一文化の**明朝**となりたる時に於ても、支那以外の**アジア**に於ける蒙古人の勢力は猶頗る盛なる者あり。**アジア**の西半及び印度方面に於て蒙古人の勢力を發揚せること、二回に及べり、**帖木兒王朝**及び**ムガール帝國**の勃興即ち是なり。而して近古の時、東亞支那の地方と西邦との關係を考ふるに、**元代**於ては、東西の大交通あり。又當時歐人の或は奉使により、或は仕官により、或は布教により、或は通商によりて、支那に來りし者あり、從つてまた**歐人東漸**の遠因こゝに生まれり。而して近古より近世に至る過渡時代の**明代**には、つひに葡萄牙人西班牙人の東來、及び天主教の東傳あり、歐人東漸の形勢いよゝ明なり。次に**印度**に於ては、**帖木兒大王**の侵略、及び**ムガール帝國**建設等の大事件あり。**朝鮮**には

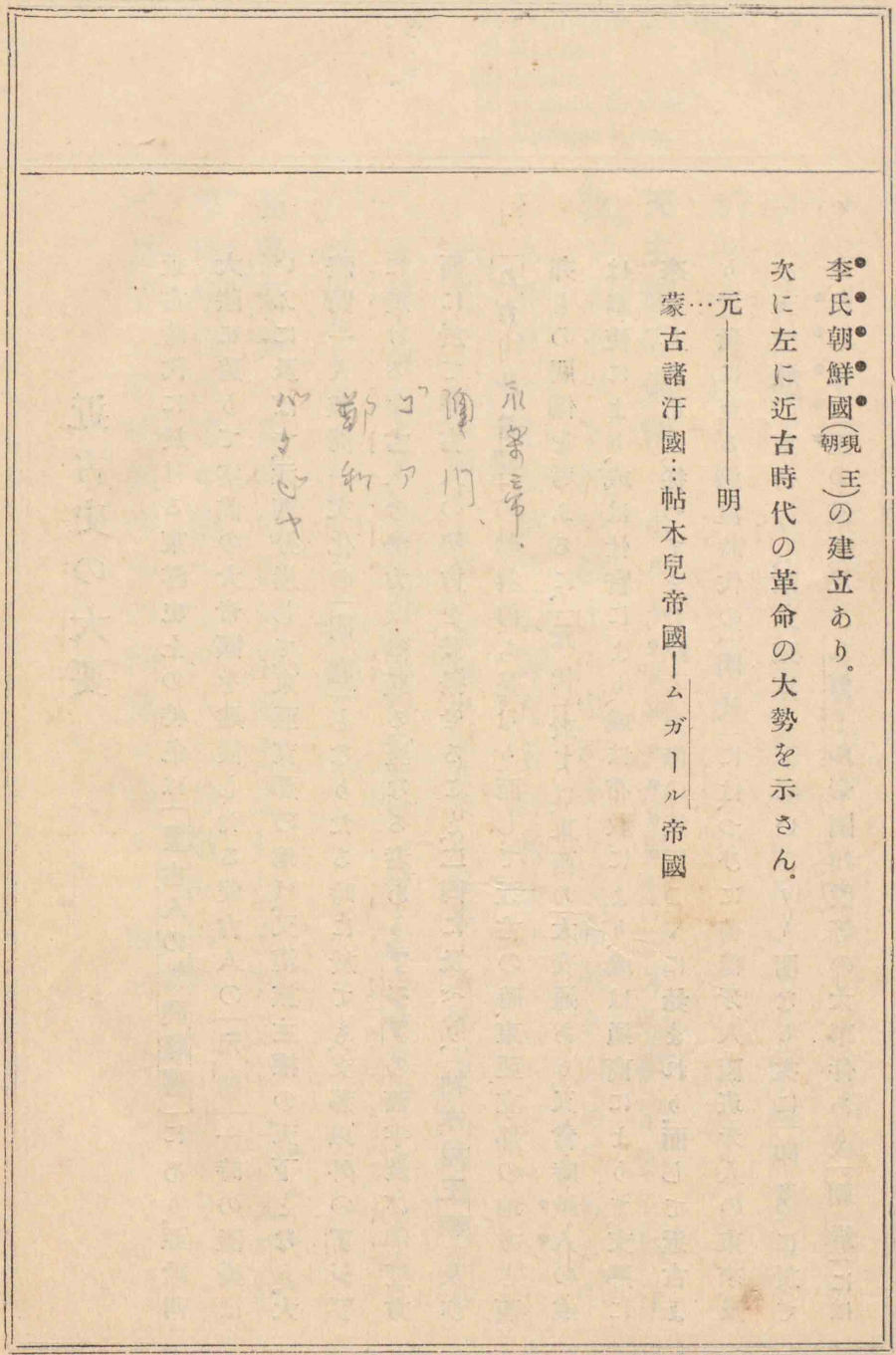
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

李氏朝鮮國(現王)の建立あり。

次に左に近古時代の革命の大勢を示さん。

元 ————— 明

蒙古諸汗國：帖木兒帝國—ムガル帝國



一  
二  
三  
四

第四篇 近世史(皇紀二三〇年頃より現代に至るまで)

第一章 清朝開國

清の太祖努爾哈赤  
國號滿洲  
奉天遷都  
國號清

滿洲族勃興 蒙古人が金を滅してより、後滿洲族の勢振はざりしが、金の滅後、大約四百年を経て、明末に至り、もと鴨綠江上流、長白山下地方に居りたる一部の酋長努爾哈赤等は、今の興京地方に移住し、次第に滿洲諸部を統一し、自立して帝位に即き、國號を滿洲と稱せり(七二六)。是れ即ち清朝の太祖とす。時に明は神宗の晩年、國勢不振の時なりしかば、太祖は次第に其勢を張り、遂に今の奉天府に遷都せり。是より太祖及び其子太宗は、益遼東及び蒙古地方を征服し、太宗の時には國號を改めて清と稱せり(九二六)。

朝鮮降服 清朝勃興の頃、朝鮮には、豊公征韓役當時の宣祖

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
二  
三

朝鮮服従  
事大主義  
迎恩門慕華館

明の年號

吳三桂出征

の孫仁祖位にありて、猶明に通せしかば、清の太宗は之を征して服従せしめたり。(九七二)  
此時朝鮮は城下の盟をなしてより以來、清朝に對しては「事大」と稱し、毎年使貢をなすこととなり、京城の郭外には、迎恩門、慕華館を建て、清の使者來れば、遠く之を鴨綠江邊に迎へ、使者入京の時には、朝鮮王之を迎恩門に迎へ、慕華館に休憩せしめ、而して後京城に入るを常とせり。然れども、國人は清朝に悦服せず、公文書以外には明の年號を用ふる者少からざるなり。

**明朝滅亡** かくて清朝は東方後顧の憂を絶ち、太宗の子世祖の時には、力を專にして明に迫り、明の神宗の孫毅宗は吳三桂をやりて之を防がしむ。斯の如く明の外患益切迫すると共に、國內には神宗以來の重税に苦める不平の流民諸

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

流賊蜂起

毅宗の自殺

空名の三王

吳三桂の去就  
北京遷都

辮髮令

方に蜂起したるが、陝西より起れる賊魁李自成尤も強く、遂に明の都北京を陥れしが、毅宗は自殺し、かくて明は十七世二七七年にして亡びたり。然れども、明の血統は未だ絶えず。毅宗の後、三王相つぎて江南に立ちしも、勿論ただ空名を保つのみ。

**清の一統** さきに出征したる明の將吳三桂は北京の急をきき、歸りて之を救はんとせしが、陥落の變報をきき、つひに清の世祖に降り、清軍を導いて李自成を撃ちしかば、清朝は容易に北支那を平定せり。かくて世祖は遂に都を北京に遷して、即位の禮を行ふ。(二四三)是より後、清朝は次第に江南に退去せる明の諸王等を征服して、支那本部を統一し、辮髮滿裝の令を下して、民俗を一變せり。

**鄭氏の孤忠** 然るに、明の遺臣、鄭氏の一族は善く戦つて頗

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

鄭成功の忠烈

る長く清朝を苦めたり。就中鄭成功最も有名なり、成功は明人鄭芝龍の子、母は我國平戸の人なり、初め厦門に據り、後臺灣に退く。臺灣は古より支那に屬せず、明末一時倭寇其地によりて、高砂と呼び、後和蘭人之を奪ひしが、(二二)成功は和蘭人を逐ふて之を占領せり。かくて忠烈なる成功は専ら明の恢復を圖りしが、竟に利あらず、其孫に至りて、終に清朝に降服せり。(二三)

國姓爺

鄭成功は明王より明の國姓朱氏を賜はり、朱成功といひ、國姓爺の稱あり。我國の近松門左衛門の劇曲國姓爺合戦にも其忠勇を傳へ、兒女もなほよく知る所なり。なほ又當時明の遺民の我國に歸來せるもの少からず、中にも朱之瑜即ち朱舜水、僧隱元等尤も有名なり。

### 第一章 清朝の盛時

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

最初の三代  
次の三代  
清朝最盛時

鄭氏降服  
蒙古西藏地方征服

内治文德



(康熙帝)

**總說** 清は建國より第三代の世祖に至りて、略支那を一統し、第四五六の三代に於て祖業を完成擴張せり。特に第四代の聖祖康熙帝と、第六代の高宗乾隆帝の二代は、清朝の最盛時にして、文武の功業最も大なり。

**康熙時代** 康熙帝は在位六十一年の間、まづ明の降將にて、雲南地方の大藩に封せられたる吳三桂等の亂を平げ、又明の遺臣鄭氏を降して臺灣を取り、尋て親征して蒙古を併せ、

更に進みて喇嘛教の本土たる西藏及び青海地方を征服して、大に清の領地を擴張せり。  
帝は又大に内治に注意し、制度を定め、學術を勵し、親ら孔子の廟に謁し、古聖賢の後を優遇し、又明末

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二

以來の名儒を重用して、修史著述に従事せしめたるが如きは、漢人の心を收むるに與りて大功あり。又和蘭人南懷仁を天文館の副長となし、西洋の學術にも注意せり。但し制度學術及び康熙時代の清露兩國交渉の事は、別に章を設けて之を説くべし。

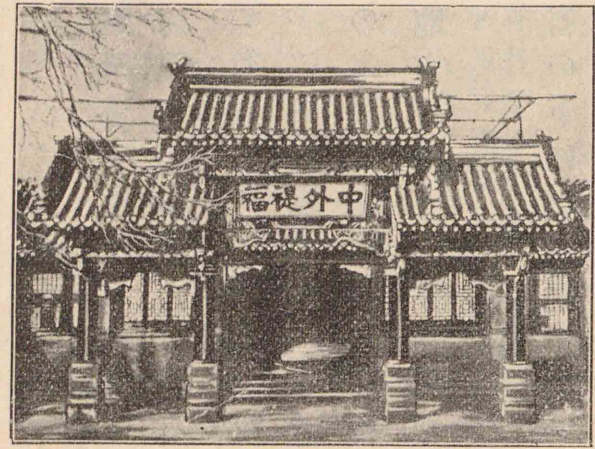
**乾隆時代** 康熙帝の子世宗(雍正)は在位久しからずして崩じ、其子高宗乾隆帝之につぐ。帝も亦在位六十年の久しきに及び、功業の盛なるも、康熙帝に次げり。帝の時には、天山南北兩路を平げ、(1)緬甸、(2)安南及び明末に我國の山田長政が武功を立てたる暹羅等の後印度諸國を降して、清朝に朝貢せしめ、其武勳赫々たるが上に、學術獎勵の功も亦少からざるなり。然れども、在位中數度の戦争と行幸との爲に、金穀を費すこと多く、清朝財政難の源因は此時代に起れり。

在位六十年  
功業の盛

- (1) 原名 Verbiest.
- (2) Birma.
- (3) Siam.

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

内閣  
六部  
軍機處



(門 衙 理 總)

### 第三章 清朝の制度學術

**總說** 前章に康熙乾隆二代の事を略述したれば、是より大體二代の間に大成せられたる清朝の制度の一斑を記し、併せて學術の事に説き及ぼさん。

**中央政府** 初めは内閣に大學士、協辦大學士を置き、天下の政を總理せしめ、其下に吏部、戸部、禮部、刑部、工部、兵部の六部(官長を尙書、次官を侍郎といふ。其職務は、唐の六部と同じ)ありて、政務を分擔せしが、乾隆以後、特に軍機處を設け、親王重臣等より特選の軍機大臣を任命し、天下の實權を握らし

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三



總理衙門  
海軍衙門

三院

十八省

新疆省

總督巡撫提督

滿洲及び藩部

めたれば、内閣の實は軍機處に移れり。近世外交及び海軍の政務多きに及んで、更に總理各國事務衙門(單に總理衙門ともいふ)及び海軍衙門の設あり。此外、都察院(帝國議會權力の一部と、會計檢査院權限の一部と、大審院權限の一部とを有するものなり)、理藩院(蒙古西藏の政事を掌る)及び翰林院(國史圖書詔勅の文章の事を掌る)の三院あり。以上は中央政府の重要政務機關なり。其大官の定員は、滿漢人員の權衡に注意せり。

地方行政 支那本部を分ちて十八省とし、(直隸、山東、安徽、江西、浙江、福建、廣東、廣西、湖南、湖北、河南、山西、陝西、甘肅、四川、雲南、貴州)天山南北兩路も之を一省とし、(新疆)省の下に府、州、縣あり。一省又は二三省毎に總督ありて、文武の大權を握り、省内自治的の勢あり。其下には民治の巡撫と、兵務の提督とあり、共に毎省一人を常とす。尙其下に知府、知州、知縣等ありて管内を治む。但滿洲の東三省(盛京、吉林、黑龍江)には將軍及び府尹等ありて之を治め、藩部は理藩院に屬し、蒙古

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

考證學風

圖書の編著

同文館  
大學堂同文書院師範學堂  
日本留學

には親王酋長等あり、新疆には伊犁將軍あり、西藏には駐藏大臣あり、各其管内を治む。

學術 宋儒以來主として高尚なる哲學的研究の學風流行し、やゝ空論の弊を生じたるが、明末よりは、其反動として古典を緻密精確に研究する考證學風起れり。顧炎武、黃宗義等は此學風の發達當初の名儒なり。又清代には、地理學、言語學、考古學、史學等も大に發達せり。尙又康熙乾隆二帝の間には、大部の著述少からず。就中康熙字典の如きは、我國にも廣く行はるゝ者なり。

近代に至りては、同文館を設けて歐米の國語を授け、又近來北京に大學堂、諸方に同文書院及び師範學等堂を設けて、新學術を修め、尙又我國に留學する學生も亦少からざるなり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

歐人東漸の勢益大なり

- (1) Holland.
- (2) Java.
- (3) Batavia.
- (4) Zeelandia.
- (5) England.
- (6) France.

蘭人の東洋貿易

### 第四章 東洋に於ける蘭英佛諸國の競争

#### 總説

明の中世に、其初幕を開きたる歐人東漸の大活劇は、近世に至りて益烈しく、東洋近世史上に於ける歐米人の關係勢力は、實に大なる者あり。今左に之を略記せん。

蘭人<sup>(1)</sup> 和蘭人は、明末に至り、始めて東洋經營に従事したれども、先來の葡西兩國人と競争して之に克ち、瓜哇<sup>(2)</sup>のバタヴィア<sup>(3)</sup>に其政廳を置き、<sup>(七二)</sup>遂に一時臺灣をも占領して、ゼーラント<sup>(四)</sup>ンヂー<sup>(五)</sup>といふ城を築き、<sup>(九二)</sup>又我長崎の出島にも居留して、盛に東洋貿易を營めり。

英佛競争 葡人より後るゝと大約百年の後、英佛二國人も相前後して、印度に入り、共に東印度商會を建てたり。而して英人はつひに先づ葡人と蘭人とを壓倒したるが、佛人とは

英佛の競争

英領印度の基礎

印度總督

- (1) Clive.
- (2) Plassey.
- (3) Hasting.

激烈なる競争をなすことなれり。競争の初め、佛人の勢盛なりしが、其後英國の東印度商會書記出身の勇將クライヴ<sup>(1)</sup>善く戦ひ、大に佛人の軍をブラッシー<sup>(2)</sup>に破りたれば、印度の實權は英人の掌中に歸せり。<sup>(二四一七)</sup>（乾隆年間）

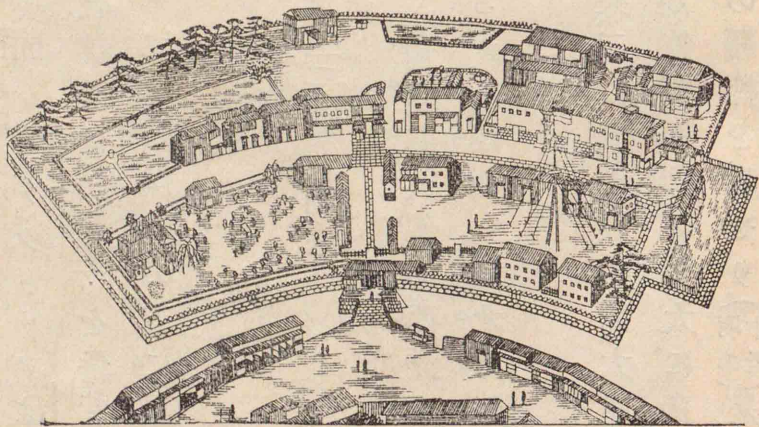
#### 英領印度

其後、クライヴ及び初任の印度總督



(ヴィラク)

たりしヘステイ、<sup>(三)</sup>以下諸總督、皆着々功を奏し、當時已に衰亂せるムガール帝國



(地留居人蘭の島出崎長)

印度女皇

を蠶食し、終に其皇帝を廢し、<sup>(二七五)</sup>同帝國を滅し、尋て東印度商會を廢し、西曆一八七七年<sup>(明治十年)</sup>英國女皇<sup>(一)</sup>ヴィクトリアは印度女皇の位を兼ねるに至れり。其後、英國はビルマを併せ、<sup>(明治十九年)</sup>又馬來半島の諸小國をも併せて、英國保護の下に置けり。

### 第五章 露國の東略、清英露三國の關係

露國の獨立及び東略 上記の如く、葡、西、蘭、英、佛の西洋諸國は南方海上より東洋に交通したるが、露西亞人は北方陸路より東亞を侵略せり。抑も露國は蒙古の拔都の西征以來、二百五十餘年間、大體蒙古人に臣事せしが、拔都の建てたる欽察汗國の勢大に衰微せるに乘じ、獨立して始めて蒙古の羈絆を脱せり。<sup>(明の中世)</sup>是よ

- (1) Queen Victoria.
- (2) Malay Peninsula.

2.133

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

露人東略の第一歩

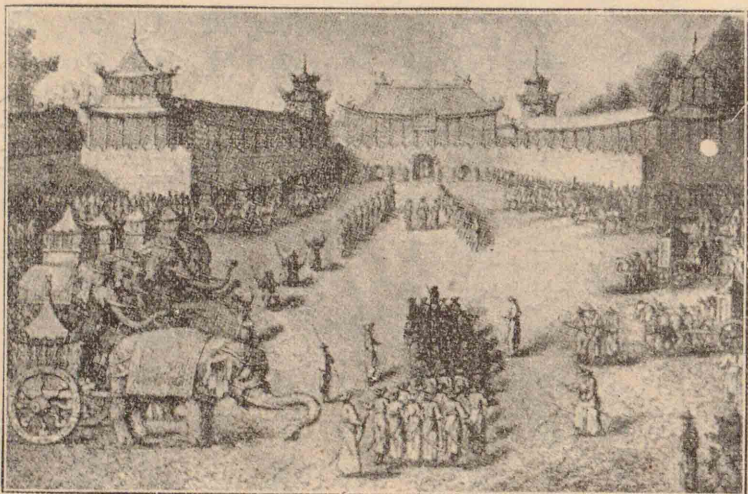
- (1) Cossack.
- (2) Ural.
- (3) Siberia.
- (4) Albazin.

- (5) Peter the Great.
- (6) Nerchinsk.

ネルチンスク條約

り露國の勢力漸く興り、<sup>(一)</sup>コサック部はウラル山の東に出で、<sup>(二)</sup>西部、<sup>(三)</sup>西比利亞に侵入せり。是れ即ち露人東略の第一歩なり。爾後、着々其歩を進め、清の初に至りては、黒龍江の上流に<sup>(四)</sup>アルバジン城を築き、遂に滿洲北部に侵入せり。

東亞侵略 時に清の康熙帝位に在り。支那本部平定の餘威を以て、アルバジン城を攻め陥れ、一書を露國の<sup>(五)</sup>ペテロ大帝に送りて、境界の協議を求め、清露の使臣はネルチンスクに會し、外



(康熙時代露國公使北京城內の景)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

黑龍江北占領

烏蘇里江東占領

ウラヂボストク港

千島樺太交換

露國の宿志

(1) Amudaria.

興安嶺を以て、兩國の界と定めたり。(四九三)

かくて露人東略の鋒は一時挫折の状ありしが、清國の内亂に乗じて、黑龍江北の地を占領し、(三五八)且つ英佛聯合軍が清を攻めて北京に入るや、露國公使は之を調停して、和約を結びたる報酬として烏蘇里江以東の地を取り、(三〇五)其南端にウラヂボストク港を開きたり。

是に於て、やがて露國は朝鮮とも其地を接するに至れり。而して又露國は我國とも交渉し、千島全部と換へて、樺太島を得たれば、(八)日本海北部對岸の大陸及び一大島は、悉く露國の有となれり。かくて露人は大洋上に其根據地を得んと欲せる宿志の一端を達し、益、東亞諸國に迫りたり。

中亞及び伊犁方面 露國の地慾は東方の侵略に満足せずして、中亞の方面に及び、明治九年の頃迄には、アムー河以北

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

中亞蠶食

伊犁事件

パミル地方に於ける英

の地、悉く露國の有となれり。

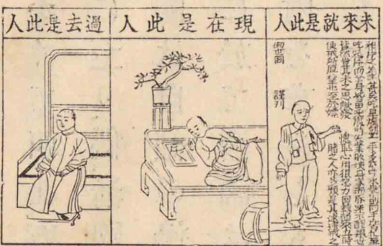
かくて西北方面に於ても、露國は次第に清國と境を接するに至り、偶、清國西北方面の伊犁地方に回教徒の亂あるや、露國は自領の邊境鎮撫を名として、同地方を占領せり。(四)是に於て清國は其亂を平げ、(一)露國に對して、同地方の還附を求めしも、露國は容易に之に應ぜず。兩國將に開戦せんとせしが、曾紀澤露國に使し、談判の結果、コルゴス河(イリ流)を以て、清露の界と爲し、且つ清國より償金(九百萬ル)を出して、其局を結べり。(四)

英露衝突 露國は又中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋方面に突出せんと欲せしも、印度を領せる英國は、無論之を喜ばず。アフガニスタンの後援となりて、之に反對し、終に英露二國より委員を命して、境界を定めたり。(廿)其後パミル地

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

露 方も清英露特に英露二國の利害衝突の地として、又紛議を生せしが、二國の協議を以て、同地方に於ける二國の勢力範圍を定めて、其局を結べり。(明治廿八年)かくて露國南下の宿志は、竟に英國の防止する所となれり。

### 第六章 清と英佛二國との關係、長髮賊の亂



阿過片喫烟者之來  
去過 現在 未來  
人此是去過 人此是在現 人此是就未來

阿片戰爭 清露交渉の事變は、支那本部の外に起りしが、支那本部内の外患亦多事にして、乾隆帝の孫宣宗(道光帝)の時に至りては、遂に清英の開戦を見るに至れり。是れ即ち阿片戦争なり。阿片はもと唯薬用に供せしが、後には日常の喫烟料となり、英人が印度に勢力を

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

### 阿片の害

### 林則徐の果斷

### 香港の割讓

得るや、盛に印度産の阿片を清國に輸入したれば、清人は其金錢を費し、時間を失ひ、心身を害すること少からざるを以て、其輸入を禁したるに、猶密輸入を行ふ者ありしかば、道光帝の時、兩廣(廣東、廣西)總督林則徐は廣東英商の阿片を焼くこと二萬餘箱に及び、其賣買を嚴禁し、且つ其通商を禁ぜり。是に於てか英國艦隊は廣東、厦門(福建省)、寧波(浙江省)等の諸港を攻撃せしが、終に南京に於て和約を結べり。(二二五)

南京條約 此和約によりて、清國は償金(二百萬千弗)を出し、五港(上海、寧波、厦門、福州、廣東)を開きて互市場となし、尙香港を英國に割與せり。是より後清國と歐米諸國との關係いよく密接し、貿易年々に起り、上海、香港の二港特に繁盛となれり。

長髮賊 清朝は阿片戦争に敗れて、其威嚴を損するや、之に乗ずる亂民蜂起の勢あり。洪秀全は亂を廣西に起し、清を討

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

討清興明西  
教附會

太平天國

賊勢猖獗



(全秀洪)

曾國藩等の  
義勇兵



(藩國曾)

清正の名臣なり、湖南の出身にして、曾國荃國藩の弟左宗棠、胡林翼等の名

ち明を興すことを標榜して、漢人の心を收め、耶蘇教に附會して、洋人の意を迎へ、國號を建て、太平天國といふ、是れ即ち長髮賊(剃頭辮髮せざるが故)なり。其勢頗る猖獗、遂に南京を取りて之に都し、更に北上して、直隸省に迫る、時に官軍弱くして之を平らぐること能はず、曾國藩首として義勇兵を起して、賊軍を破り、賊勢稍衰へたるも、偶清國は再び外國に攻められたれば、賊軍は猶其勢を保ちたり。

三三二〇九八七六五四三二一

李鴻章立身

(1) The Arrow.

アロー號事

天津假條約

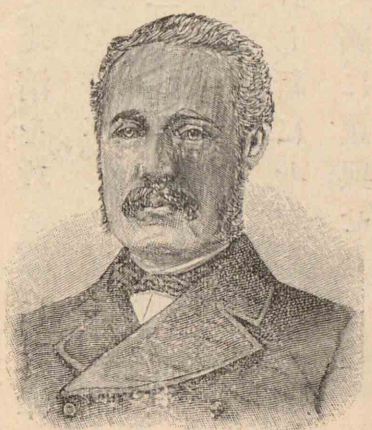
北京條約

士も湖南より輩出せり、安徽の李鴻章も、實に國藩の推舉によりて立身せる者なり。

英佛北征 南京條約以後、清廷は其實行を遅延し、容易に廣東を開港せず、英人は特に不平を抱ける時、廣東の官吏英船(アロー號)に入り、英人の國旗を辱しめ、且つ乗組清人の犯罪者を逮捕せしかば、英人怒つて廣東を砲撃せり。而して又此時佛國の宣教師も廣西にて殺害せられしかば、英佛二國連合して、北清を攻め、遂に天津に迫り、假條約を結びて(二八五)一時戦局を結びしも、清國は批准交換の公使を砲撃せしより、英佛二國連合して、天津、北京を攻め、陥れ、清國は終に北京條約を結び(三〇五)償金を出し、公使領事の駐在、及び基督教の布教を許し、新に七港(牛莊、芝罘、臺灣、仙頭、瓊州、九江、漢口)を開き、且つ九龍半島(香港對岸)を英國に讓與せり。

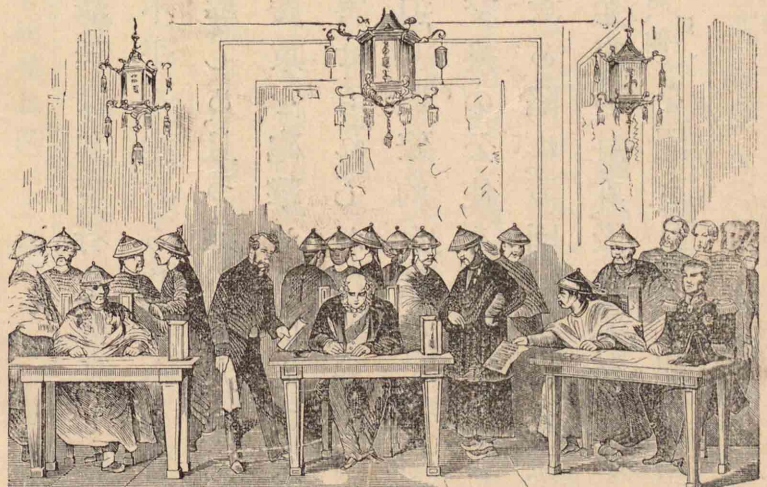
三三二〇九八七六五四三二一

- (1) Ward.
- (2) Gordon.
- (3) Seymour.
- (4) Elgin.



(シドルゴ)

長髮賊平定 此外患の爲に、長髮賊の平定大に後れて、賊勢猶盛なりしが、穆宗(同治帝、今帝先代)に至り、米人(1)ワルド及び英人(2)ゴルドン等相次て官軍を助け、曾國藩、李鴻章等奮戦して、南京を恢復し、(二五)洪秀全は自殺せしかば、



(圖の印調約條京北)  
 卓右 (3) 卓中 (4) 卓左  
 莫那 桂沙 士花 學書 大及 卿 部 吏  
 長 那 士 花 學 書 大 及 卿 部 吏

七 六 五 四 三 二 一

- (1) Nopoleon III. 佛人の安南
- (2) Saigon. 地方經略

餘賊も次第に平定せり。此亂前後十五年、其侵掠を被りし者十六省に亘り、清の國力疲弊し、益、外國迫の侵を受くるに至り。

當時官軍を助けたる西洋人が率ゐたる砲兵隊は、到る處に勝を得たるが故に、常勝軍の名あり。ゴルドンは特に大膽にして勇氣あり、其戰に臨むや、常に一鞭と一雙眼鏡とを携へ、戰線に出入して、號令指揮平生の如し。清國も其功を賞して、特に黃馬袍花翎を賜ひ、以て名譽を表彰せり。

佛國と安南 さて佛人は清朝の初より、安南と關係するこ  
 と漸く深く、其地の王族阮福映を助けて、越南國を建てしめ  
(六三四)且つ基督教布教を力めたるが、安南人は佛人に親まず、  
 且つ其布教に政治的意味ありとて、排外の心を起し、屢、其宣  
 教師を虐待殺害したれば、ナポレオン三世は、柴棍(ゴ)を占領

三 二 一

(1) Cochin-China.  
(2) Cambodgia.

安佛事件進んで清佛事件となる

して、越南に迫り、終に交趾支那の地及び償金を得、<sup>(二)</sup>且つ東埔塞<sup>(三)</sup>も其保護國となせり。かくて佛人は安南東京地方<sup>(四)</sup>を以て、東洋に於ける根據地となさんと欲し、愈侵略を逞しうしたれば、越南王は長髮賊の餘黨劉永福をして佛國と戦はしめたるが、國都順化府の陥るに及んで、佛國の保護國となり、且つ東京地方を割讓して媾和せり。<sup>(六)</sup>明治十

**清佛戦争** 然るに、清國は安南を以て其外藩なりとし、この媾和を黙視せず、大兵を以て、劉永福を助けて、佛人を攻撃したるにより、安佛事件は、清佛事件となり、佛國は多額の償金を要求したるも、清國は之に應ぜず、佛國の海軍は福建地方を攻め、且つ臺灣諸港を封鎖せしが、李鴻章は佛國公使と天津に會して、和約を結び、佛國は償金の要求を撤去し、清國は佛國の東京地方占領を承諾せり。<sup>(八)</sup>明治十

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

佛領交趾支那の成立

東洋諸國間の和戦

日清和好の新條約

臺灣事件

支那の成立を見るに至れり。

### 第七章 日清韓三國の關係及び日清の戦

**總説** 近世に於ては、東洋對西洋の國際事件の多きと共に、東洋諸國の間に於ても、和戦の大事事件少からざるなり。其最も大なるものは、即ち本章の事件なり。

**日清衝突の由來** 清國は、同治帝<sup>(先代)</sup>の時、我國使副島種臣に促されて、明治維新の我國とも新に和好の條約を結びたるが、<sup>(四)</sup>其後一時兩國和親を缺くに至れり。今其由來を記さん。今我領土たる臺灣も、十餘年前迄は、清國に屬したるが、明治五年、我琉球の漁民臺灣に漂着し、土人の爲に殺害せられしかば、我政府は清廷を責めたるも、其答辭曖昧なりしに、より、我國は遂に直に臺灣を征伐したるに、<sup>(七)</sup>清國は俄に

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



琉球事件

異議を唱へしかば、我大久保利通、清國に使用して、恭親王等と議し、償金(五十萬兩)及び軍費を取り、征臺の軍を撤せり。其後、我政府が琉球に沖繩縣を立てたる時にも、清國は之を喜ばざる事情ありて、異議を唱へたり。かくて日清兩國の感情利害一致せず。朝鮮に於ける衝突の末、遂に東洋近世の大戦となり、其影響世界各國に波及せり。

近世朝鮮

さて朝鮮は、清初以來、世々清の册封を受け、毎年使を遣して朝貢し、我國に對しては、徳川氏の初より、將軍の代る毎に來聘し、近世に至るまで、其國內に大事なし。然るに今より四代前の國王純祖の頃より、外戚軋の端を開き、純祖より憲宗を経て、哲宗に至り、嗣子なきや、外戚金趙洪の諸氏の間、に競争ありたる末、王族李昰應の子李熙は、今より四十餘年前、僅に十二歳を以て王位に即けり。是れ即ち今の韓

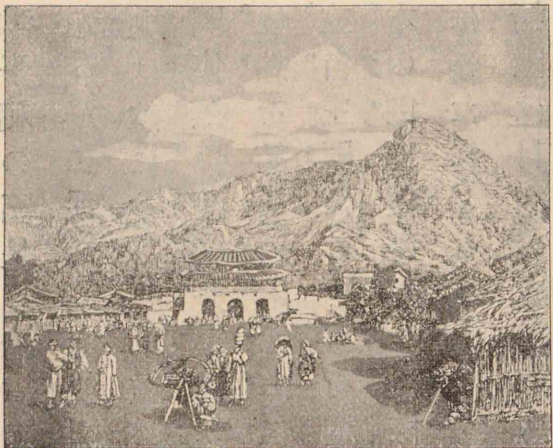
純祖以來

韓國太皇帝  
大院君李昰  
應の鎖國的  
政策

●國前皇帝(太皇)なり。

●幼主即位の後、其父李昰應は大院君と稱して、政を攝したるが、大に西洋人を憎み、基督教を厭ひ、清國と自國とを以て天下と爲し、清國の外に強大國あるを知らず。近世に於ける歐

日本の開國  
進取善隣平  
和主義



(門の殿宮城京の前年十數)

●人東漸の大勢を悟らず。基督教徒を殺すこと頗る多く、遂に佛國の宣教師をも殺害したれば、佛國軍艦は朝鮮を攻めたるも、利あらず。又通商開國を促したる米國の軍艦をも之を撃攘し、一時堅く鎖國の主義を斷行せり。

●日本の朝鮮開國 是時に當りて、我國は明治維新の後、開國進取、善

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

歐米諸國も  
日本の例に  
倣ふ

獨立事大  
主義漸く起  
る

隣平和の國是を清韓二隣邦にも擴めんと欲し、屢、開國通商を朝鮮に促せしも、鎖國保守的の大院君之に應ぜず、加之、韓人は遂に敢て我軍艦(雲揚號)を江華島(仁川灣)に砲撃したれば、我國使黒田清隆、井上馨、其罪を問ひ、遂に朝鮮をして修交通商條約を結び、釜山、元山、仁川の三港を開かしめ、且つ朝鮮の獨立自主國たることを證認せり。(明治九年)是に於て歐米諸國も日本の例に倣ひ、相次て條約を結び、朝鮮の獨立的開國茲に行はれたれども、清國に對しては猶外藩の禮を執れり。而して清國は日本の成功を忌むの風あり。

**朝鮮の内訌及び日清韓の交渉** 此頃よりして、朝鮮には獨立事大の二主義對立の狀を生ぜり。獨立黨は大體我國に頼りて、獨立の體面を維持し、且つ開國進歩政策を執り、軍隊を新制し、郵征、博文(新典圈幣造)諸局を建つることを務めたり。事

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

王父王妃二  
派の黨争

明治十五年  
の變



(帝皇太國韓)



(像の君院大)

大黨は所謂大國(清國)に事へて國を保たんとする者なり。而して朝鮮王の長じて政を親するや、王妃閔氏の一族政權を專にしたれば、大院君は不平を抱き、遂に亂兵を煽動して、閔黨を撃ち、且つ我公使館を襲ひしかば、(明治十年)我公使花房義質は其罪を責めて、償金(五十五萬圓)を取り、且つ京城の我公使館に守備兵を駐在せしむ、是に於て清國も亦袁世凱をして兵員を京城に駐在せしめたり。

此亂後、清國は事大保守主義の閔氏一派の政府を保護して、朝鮮屬邦主義を實行せんとせるを以て、我國に親近せる獨立進歩派の金玉均、朴泳孝等之を快とせず。遂に兵を擧げて、事大黨を撃ち、國王を擁して、我公使の援を求めしが、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

獨立事大ニ  
派日清兩國  
の關係

日清の天津  
條約

朝鮮に於け  
る清國の勢  
力

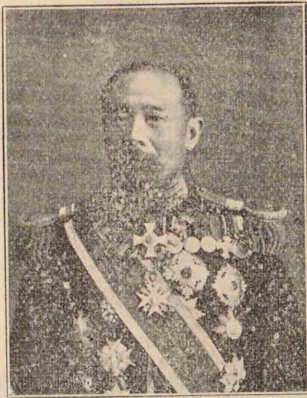
好機到來

導火線

(明治十)清國は事大黨を助けて、獨立黨を破り、又我公使館をも襲ひしかば、我國使井上馨は其罪を問ひ、償金(十三萬圓)を取り、朝鮮に對しては其局を結びたり。清國に對しては特に伊藤博文を遣し、李鴻章と天津に會し、一の協商條約を結びて、日清兩國の在韓駐屯兵を撤去し、且つ將來派遣を要する時は、兩國先づ互に通知すべき事を約せり(明治十年)。此時、獨立黨は多く國を去り、事大黨のみ跋扈し、清國の駐在官袁世凱は朝鮮の國政に干涉し、朝鮮に於ける清國の勢力隆盛にして、舊に倍する勢あり。

東學黨の亂 獨立黨の失敗後、我國は朝鮮に對し、一見退讓の外觀ありしが、該事件後、大約十年を経て、一大雄飛と一新局面開發との好機到來せり。明治廿七年の夏、朝鮮に起りたる、東學黨の亂は、即ち此雄飛の一導火線なり。東學黨はもと

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



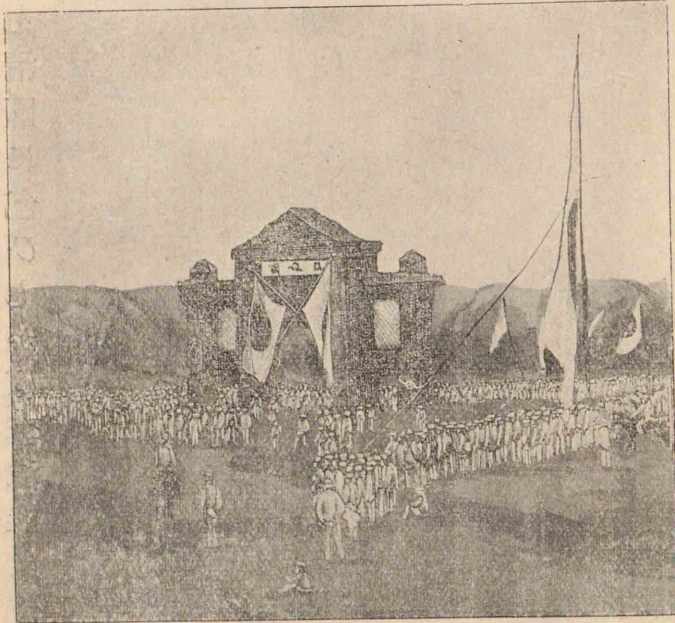
伊藤博文



山縣有朋

酷吏に苦める人民も亦之に投合して、遂に亂を起し、其勢猖獗にして、制

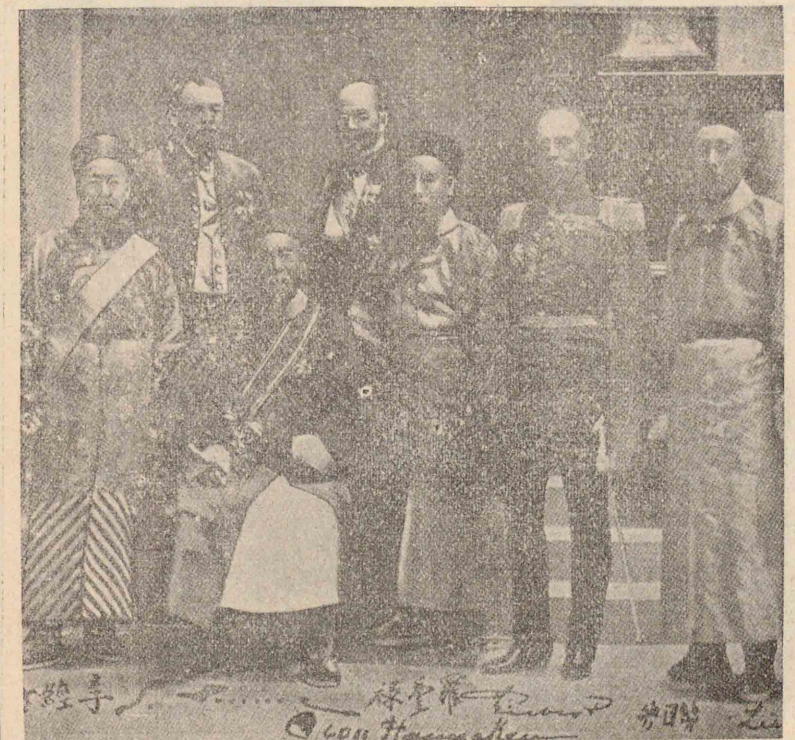
西教を斥け、東學を興さんとせる保守狂熱的人士の團體なりしが、暴官



朝鮮京城に於ける日本軍凱旋祝勝門

一 二 三 四 五

し難きを以て、韓廷は援を清國に乞ひしかば、李鴻章は直に  
 大兵を發せり。是に於て、我國も直に兵を發して、在韓本邦人を保護し、且つ兩國協力して、朝鮮の政治を改善せん事を清國に勸告せり。時に我國の駐韓公使は大鳥圭介なり。**日清開戰** 然るに、清國は朝鮮を以て其藩屬國なりと稱



(李鴻章父子及及井條幕に顧問外人)

清國の暴慢

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

下、關係約

して、我勸告に應ぜず。反つて我國に對して撤兵を求め、且つ不穩の行動ありしかば、多年堅忍の我國は、終に義憤を發して、宣戰を布告せり。かくて我國民は一致して此大業に當り、我山縣有朋、伊東祐亨等の率ひたる陸海軍は連戰連勝して、將に北京に迫らんとせしかば、清國大に恐れ、李鴻章等を我國に遣はし、伊藤博文及び陸奧宗光と下、關に會議し、第一、清國は朝鮮の獨立を確認する事、第二、清國は償金(大約三億圓)を出し、遼東半島及び臺灣澎湖島を割讓する事、第三、沙市(湖北省)重慶(四川省)蘇州(江蘇省)杭州(浙江省)を開放する事を約して、此一大事件の局を結びたり。(明治二十八年四月十)

**三國干涉** かくて我國は名譽ある戰勝國となりしに、歐洲列國中我國の隆盛を悦ばざる者あり。特に露西亞は我國が

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

遼東半島還附

遼東半島を領有することを喜ばず、獨佛二國と共に其還附を勸告せしかば、我國は深く時勢の大局（遼東還附の詔の中の字句）を察して之に従ひ、代償金（大約四千五百萬圓）を受けて、遼東半島を清國に還附せり。（明治二十八年五月）

### 第八章 日清戦後最近の東亞諸國

滿洲鐵道  
膠州灣  
旅順口大連灣

東洋に於ける歐米諸國の競争 前章の末に記せる干涉の報酬として、佛國は佛領印度支那に近き南支那の鑛山採掘の特權を得、露國は滿洲鐵道の敷設權を得、獨逸は其宣教師の殺害せられたるを口實として、償金の外に、膠州灣を九十九年間借り受け、且つ山東省の鑛山鐵道の權利を得たり。また露國は更に進みて、旅順口、大連灣の二港を借り受け、且つ滿洲鐵道を延長することを許され、佛國は更に廣州灣を

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

威海衛  
フィリッピン諸島

借り受けたり。

さてまた英國も其東洋に於ける勢力平均の上より列國の進取を默視すること能はず、威海衛を借り受けて、權衡を保てり。次に米國は從來アジア大陸方面には其領地を有せざりしが、西班牙と戦ひ、之に勝ちて遂にフィリッピン諸島を得たり。

かくて露獨佛英米等の西洋諸強國は土地の侵略、實利の獲得、宗教の傳播等、各其長所を以て益、東洋に雄飛せんを圖れり。而して上記の事件は、凡て日清戦後三年許の間に起りたる事にして、中にも露國が東亞の不凍港を渴望せる年來の宿志を達し、しかも遼東半島の要港を占領せしとは、特に注意すべき事なり。

### 清國の内憂外患

清國は戦敗の損害を受けたるが上に、歐

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

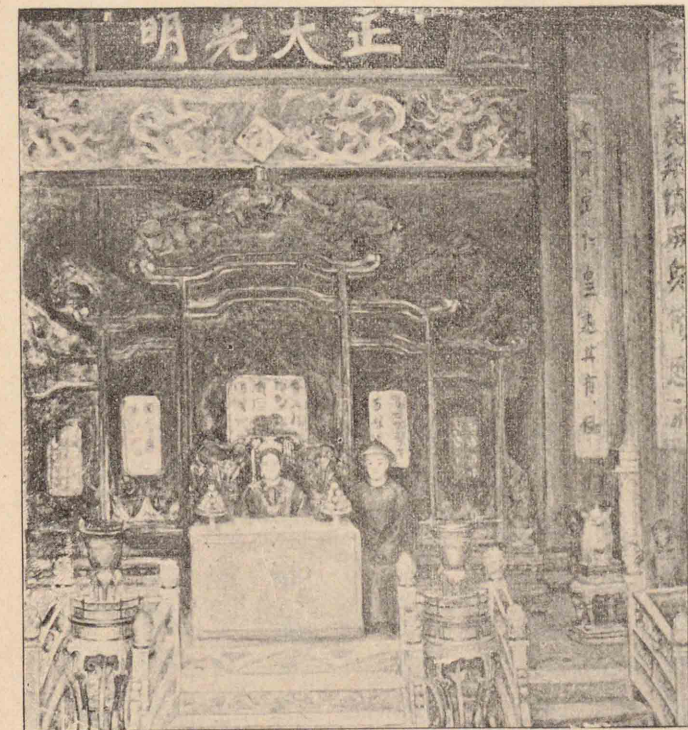
變法自強の  
說

康有為

洲列國の強迫を被りしかば、有志の清人は大に憤慨して、變法自強の說を唱へ、南清は改革の氣運特に盛となり、廣東の康有為の如きは、今上帝(光緒)に擧用せられて、革新の事を計畫せしが、(明治三十一年)清廷の舊臣及び滿人、多くは之を悦ば

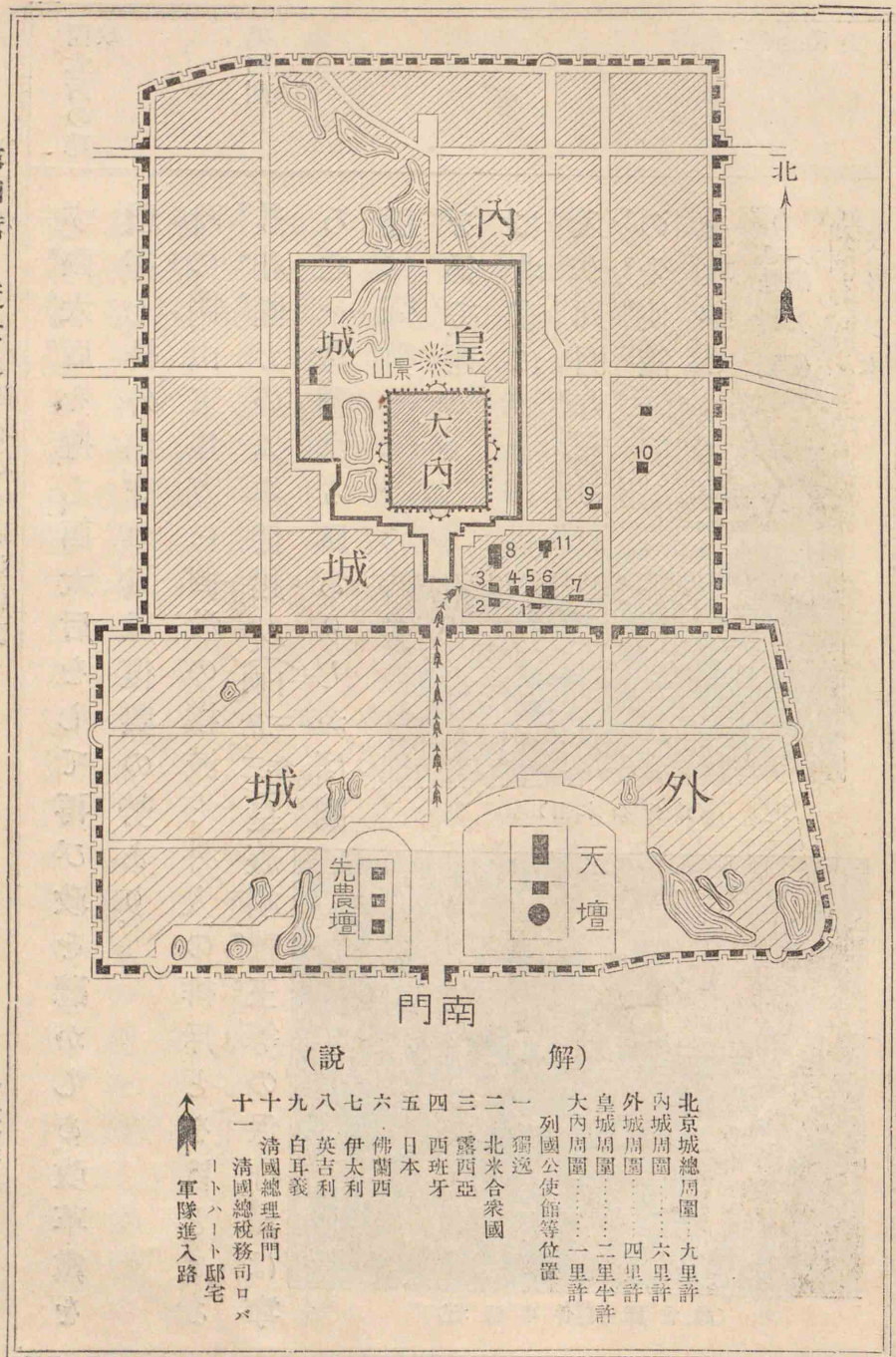


(爲有康)



(帝緒光及び后太西るけ於に座玉)

一 二 三 四 五 六 七 八



(說 解)

- 一 獨逸
  - 二 北米合衆國
  - 三 露西亞
  - 四 西班牙
  - 五 日本
  - 六 佛蘭西
  - 七 伊太利
  - 八 英吉利
  - 九 白耳義
  - 十 清國總理衙門
  - 十一 清國總稅務司ロバトハート邸宅
- ↑ 軍隊進入路

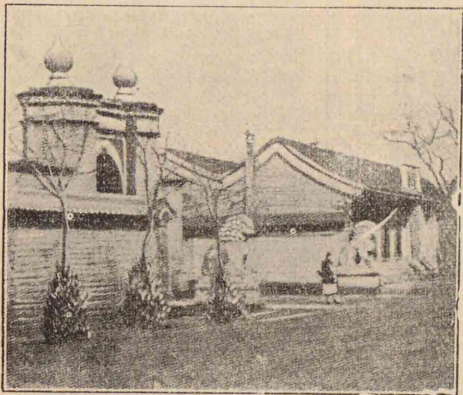
西太后の聽政

義和團

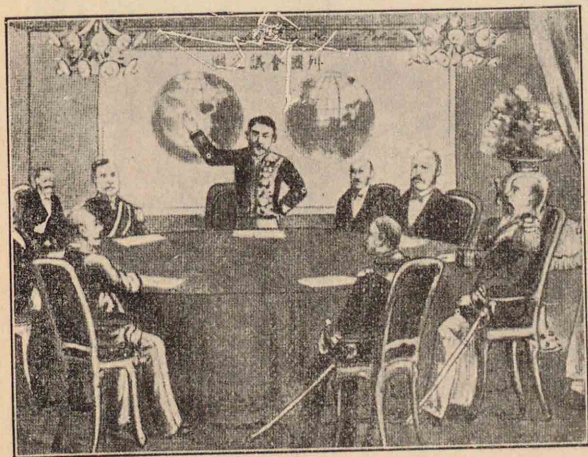
ず、西太后を擁し、西太后をして再び政を聽かしめ、改革黨を殺害し、排外保守の氣風復興の勢あり。時に偶、山東地方に西教の撲滅と外人の排斥とを旨とせる義和團といふ暴徒起り、(明治三十三年)皇族端郡王等の保守派は、寧ろ之を保護する風ありしかば、團匪は益勢を得て、遂に北京に入り、列國の公使館を攻撃せり。是時獨逸公使(ケッテレル氏)及び本邦公使館書記生杉山氏は不幸にして、團匪の凶手に斃れたり。

(1) Ketteler.

ケッテレル氏及び本



(館使公本日)



(議會國列件事清北)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

東西八強國の聯合軍兩宮西走避難

北清事件 國交復興

露國の活動

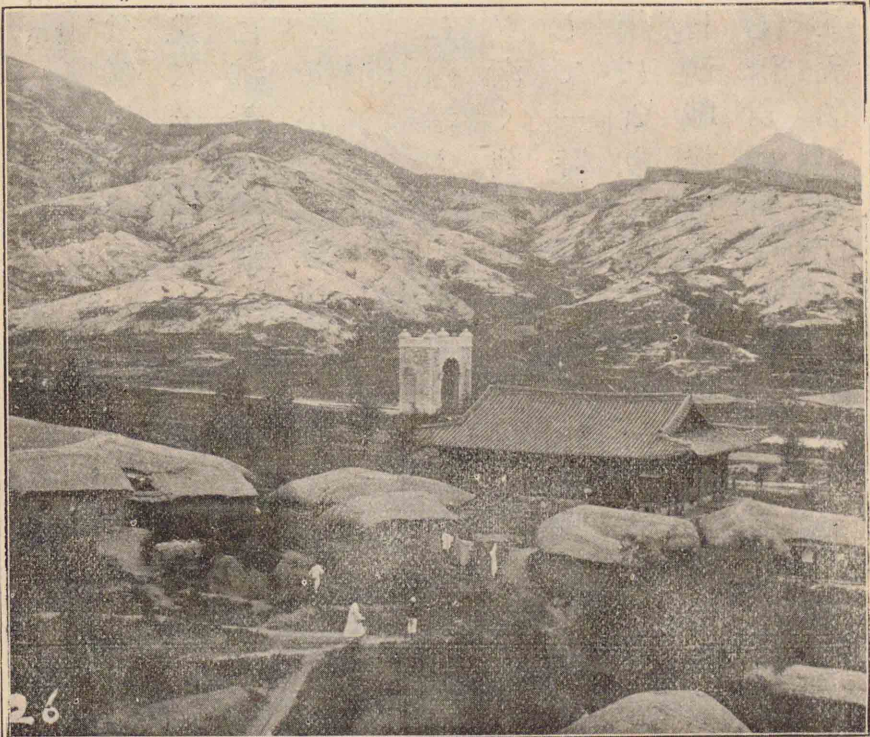
邦公使館書記生杉山氏は不幸にして、團匪の凶手に斃れたり。是に於て、日、英、米、獨、佛、露、奧、伊、東、西、八國の聯合軍は、急に公使及び居留民を救ひ、遂に北京を占領したれば、光緒帝と西太后は一時西安(陝西)に避難し、慶親王、李鴻章等を留めて、和を講ぜしめ、償金(四億五千萬兩)を出し、謝罪使派遣等の事を約して、此世界列強共通の所謂北清事件の局を結びたり。(明治三十四年)其翌年、兩宮も北京に還幸し、各國公使を引見し、國際の平和復興し、改新の氣運又漸く興れり。露國は、此事變に乗して、一時滿洲の要地に駐兵したるが、後に日、英、兩國等の抗議によりて、其撤兵を公約せり。朝鮮さて朝鮮は日清戦後の下、關係約の結果、我國の爲に獨立國の名義完全し、清國に對する朝貢の禮を廢し、清國の使者歡迎の爲に建てたる迎恩門を壞ちて、獨立門を建て、且

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

國號を大韓と改む

つ國號を韓と改めたり。(明治三十年)李成桂の開國以來茲に二十七世五〇六年なり。且つ朝鮮は昔し新羅が唐の年號を奉せしより、以來年號なきと一千二百五十年許なりしが、是時新に年號を立てて、光武と改元せり。かくて我國は益熱

年號新定



(館立獨び及門立獨の城京國韓)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

露國と朝鮮

戦前の清國  
戦後の露國

清韓の保全  
東亞の平和

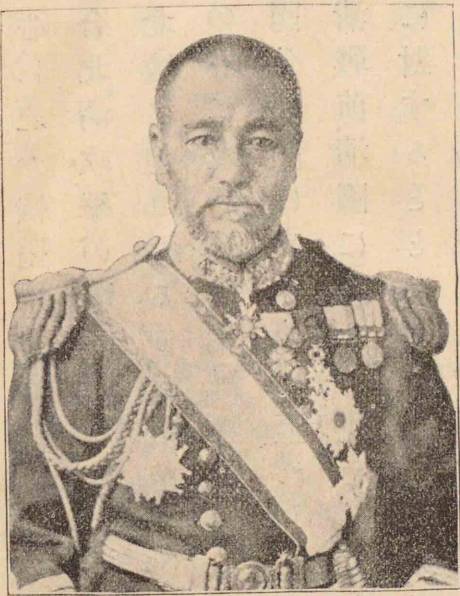
心に之が扶植に力めたり。然るに、是より先き露國は英佛聯合北清攻撃の頃(一七五參照)より、滿洲の方面より漸く朝鮮の北境に迫りたるが、其勢力次第に朝鮮に加はり、明治廿九年の春に及びては、朝鮮國王及び太子は一時王宮を出でて、露國公使館に幸するに至れり。かくて韓國に對する我國は、日清戦前、清國に對せし所を以て、今や清國より強大なる露國に對することとなりしが、我國も力を盡して之に對し、明治廿九年と三十年には、日露協商を結びて、韓國の獨立保全を約せり。

**日英同盟** 東洋の近事斯の如き時に當り、日英兩國は、其利害共通一致の點あるを以て、互に攻守同盟を結び、(明治三十五年)清韓の保全と、東亞の平和とを圖るを以て其目的とせり。かくて我國の威力は益、世界列國の間に發揚せらるゝに至れり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三



**日露開戦** 然るに、露國は韓國に於ける我國の權利を侵害するのみならず、滿洲方面に於ても、撤兵の公約を履行せず。ひいて韓國の安全をも危うするが如き行動をなし、東亞の平和を亂さんとするに至りしかば、我國は妥協に由りて時局を解決し、以て平和の道を定めんとを期し、大臣公使をして露國に談判せしめたるに、露國は共に和局を維持する誠意なく、我國が平和の交渉によりて求めんとしたる事も、今や之を干戈旗鼓の間に求むるの外なく、明治三十七年二月に至り、國交一時斷絶し、同月八日終に戦端を開き、我國に於ては

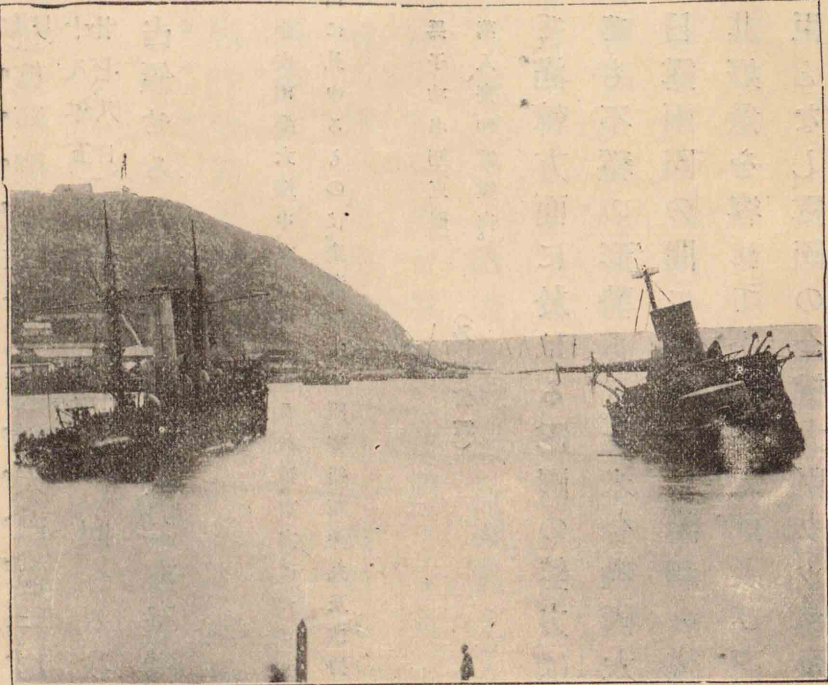


(東郷平八郎)

意なく、我國が平和の交渉によりて求めんとしたる事も、今や之を干戈旗鼓の間に求むるの外なく、明治三十七年二月に至り、國交一時斷絶し、同月八日終に戦端を開き、我國に於ては

一 二 三 四 五 六 七 八 九 二 三 三

同月十日を以て宣戦の大詔を發したまへり。開戦の初め、我海軍よく機先を制したる後、大山巖、東郷平八郎等の統率せる陸海軍は、連戦連勝し、我國民の忠勇は、廣く世界列國の稱讚を博せり。而して大約一年半の戦役中、最も顯著なるは



(二〇三高地占領後破壊沈せられたる旅順の露國軍艦)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

戰役中大事

遼陽占領(明治三十七年九月三日)旅順開城(三十八年一月十八日)奉天占領(三十八年三月十日)及び日本海大勝(三十八年八月廿七日)等にして、樺太に向へる我軍隊の一部が速に之を占領せることも、(三十八年七月上旬及び中旬)亦戰役中の一大事なり。

前圖中左方の高地は、黄金山砲臺、大艦中、左方はバルラダ號、右方はゴビエダ號にして、其他帆柱のみ水面に見ゆるものは、廣瀬中佐の閉塞船福井丸及び彼我の沈没船なり。

爾靈山嶮豈難攀。 男子功名期克艱。  
鐵血覆山山形改。 萬人齊仰爾靈山。  
(乃木將軍)

- (1) Roosevelt.
- (2) Witte.
- (3) Rosen.

講和談判 是に於て、滿韓方面に於ける露國の勢力は俄に衰へ、歐洲本國に於ても不穩の形勢あり。北米合衆國大統領(1)ロースヴェルト乃ち日露兩國の間に調停して、講和の議を提出せしかば、我國は其好意を容れて、小村壽太郎及び高平小五郎を以て全權大臣となし、露國の全權大臣ウツテ及びロ

(1) Portsmouth.  
和約條件

日本の地位

韓國の地位

ーゼンの二人と米國の(1)ポーツマウスに會議し、我國の寛大なる讓歩によりて、和議終に成り、明治三十八年九月五日を以て、講和本條約に調印せり。和約の主なるものは左の如し。  
一、露國は、日本が韓國に於て政事上、軍事上、及經濟上の卓越せる利益を有するを承認する事。  
二、滿洲に於ける長春以南の鐵道を我國に讓與する事。  
三、遼東半島の露國の租借地を我國に讓與する事。  
四、北緯五十度以南の樺太島及び其附近に於ける一切の島嶼を我國に讓與する事。

戰後の東亞 日露戰役の結果として、我日本國の地位は、進んで世界強國の列に入り、東洋に於ける勢力の發展特に顯著なり。

次に、戰役と共に地位の一變したるは韓國なり。韓國は開戰

日韓議定書

の初め、(明治三十七年)既に日韓兩國の代表者林權助及び李址鎔の調印せる日韓議定書によりて、自國の獨立及び領土保全を我國によりて保障せらるゝ事となりしが、上記の日露講和條約及び明治三十八年十一月十七日に、我が公使林



(文 博 藤 伊 監 統 國 韓)

日韓協約

統監府新設  
韓國統監の  
重職

滿洲の地位

關東都督府  
關東租借地  
旅順鎮守府

權助及び韓國外部大臣朴齊純の調印せる日韓協約によりて、我國の指導保護及び監理を受くること愈明白となり。同年十二月二十日には韓國京城に新設せる統監府官制の公布あり、伊藤博文始めてこの韓國統監の重職に就けり。かくて、千數百年間、日本支那及び滿洲方面の諸強隣國の勢力競争場たりし朝鮮半島は、今や全く日本の保護監理の下に歸するに至れり。

次に滿洲の大部分は露國の勢力範圍より脱して、廣く世界に開放せられんとするに至り、滿洲の南端は我日本の租借地となり、明治三十九年七月三十一日、我國は關東都督府官制を發布し、九月一日より之を實施せり。關東租借地は、日本が外國に租借地を有する始なり。ついで九月廿二日には、旅順鎮守府條例を公布し、十月一日より之を施行せり。是れア

清國の地位



(袁世凱)

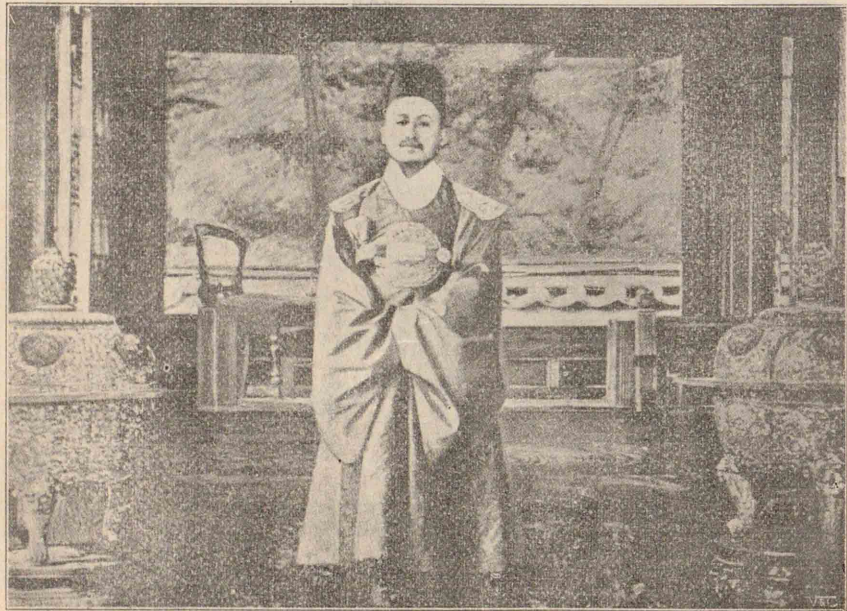
共・に・益・國・政・改・革・の・緊・要・な・る・こ・と・を・認・め・特・に・深・く・我・國・の・明  
 治・維・新・の・事・に・感・じ・て・教・育・及・び・政・法・の・改・善・に・注・目・す・る・に・至  
 れ・り・か・く・て・明・治・三・十・九・年・の・秋・以・來・立・憲・政・體・採・用・の・議・又・は  
 上・諭・出・で・其・他・纏・足・阿・片・喫・烟・の・弊・風・改・良・等・の・議・も・あ・り・之・を  
 要・す・る・に・改・革・維・新・の・氣・運・頗・る・盛・なり・然・れ・ど・も・革・新・の・事・固  
 ジ・ア・大・陸・の・一・角・我・帝・國・以  
 外・の・地・に・國・法・上・の・海・軍・根  
 據・地・を・置・く・始・なり。  
 次・に・清・國・は・日・露・戦・役・中・局  
 外・中・立・を・守・り・た・る・が・我・日  
 本・國・戦・勝・の・結・果・を・視・て・愈  
 日・新・文・明・の・利・を・悟・り・且・つ  
 利・權・回・收・の・念・を・生・ず・る・と

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

國政改革の緊要

清國の名望有力家

より容易に非ず。政體改  
 革等の大事は未だ實行  
 せざるなり。目下諸王中  
 には、慶親王、肅親王等  
 尤も名望あり。其他の大  
 官中にては、袁世凱、張之  
 洞等尤も勢力あり。  
 最近の韓國 東亞最近  
 の時事中、最も重大なる  
 は韓國の事變なり。  
 前節に述べたるが如く、  
 韓國は既に我國の保護  
 監理の下に立つ事とな



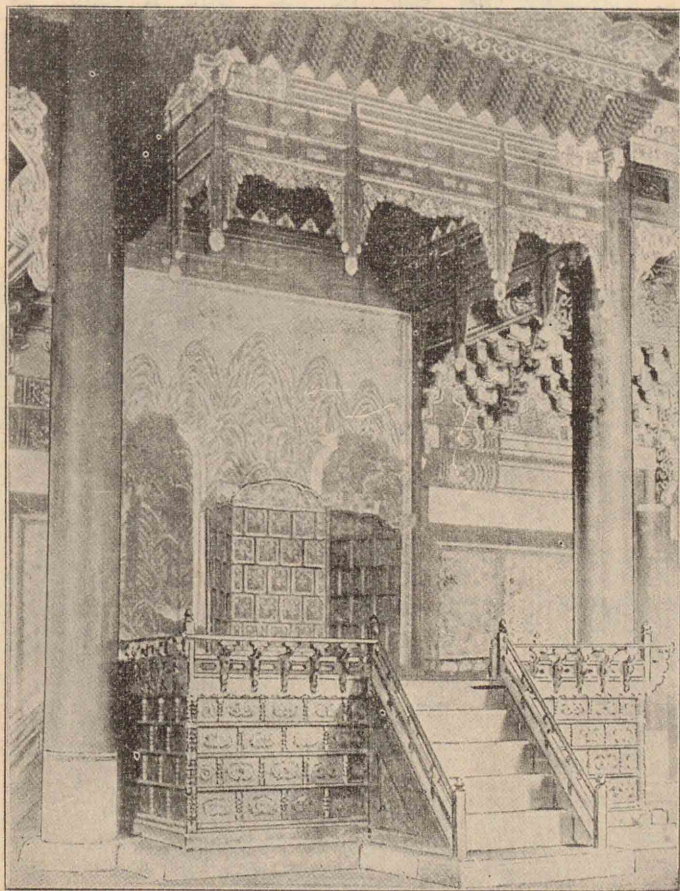
(韓 國 前 皇 帝)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

韓帝讓位

りしが、韓國王帝は之を快しとせず。屢時宜に適せざる行動あり、終に政務に倦みて、位を皇太子に譲りたり。(明治四十八年七月十四日)

然れども、其日韓協約を無視せる失政に對しては、我國は之を默視すること能はず。伊藤・藤・統・監・及・外・務・大



(座玉帝韓)

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

日韓新協約

臣林董は全權委員となり、韓國總理大臣李完用及び農工商部大臣宋秉峻と談判し、遂に日韓新協約を締結せり。其要點左の如し。

- 一、韓國政府は施政改善に關し、統監の指揮を受くること。
- 二、韓國政府の法令の制定、及重要なる行政上の處分は、豫め統監の承認を経ること。
- 三、韓國高等官吏の任免は、統監の同意を以て之を行ふこと。
- 四、韓國政府は、統監の推薦する日本人を韓國官吏に任命すること。
- 五、韓國政府は、統監の同意なくして外國人を備聘せざること。

かくて韓國に對する我國の宗主權益、確實強大となりしは、今更にいふまでもなく、世界列國も愈、明に之を承認するに

一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三

日佛日露の二協商

至れり。

二協約 此大事變と前後して起りたるものに、日佛と日露との二協約あり。此二協約は共に東洋平和の維持に對して有力なる者なり。前者は明治四十年六月十日に發表せられ、後者は同年七月三十日に調印せられ、さきに干戈を交へたる日露兩國も、共に平和の交情を温むるに至れり。

日英同盟の擴張

尚又さきに締結せられたる日英同盟も、日露戰役中(明治三十八年八月十日)更に擴張せられたり。其東洋諸國の平和を維持する勢力の大なること、今更にいふまでもなし。

かくて東洋の近事は、大體平和なり。然れども、世界の進歩は一日も止まず。東洋の形勢、亦日に新にして、又日々新なり。測り難きは世界の風雲にして、東洋の將來亦豫しめ知る可からざるなり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

### 近世史の大要

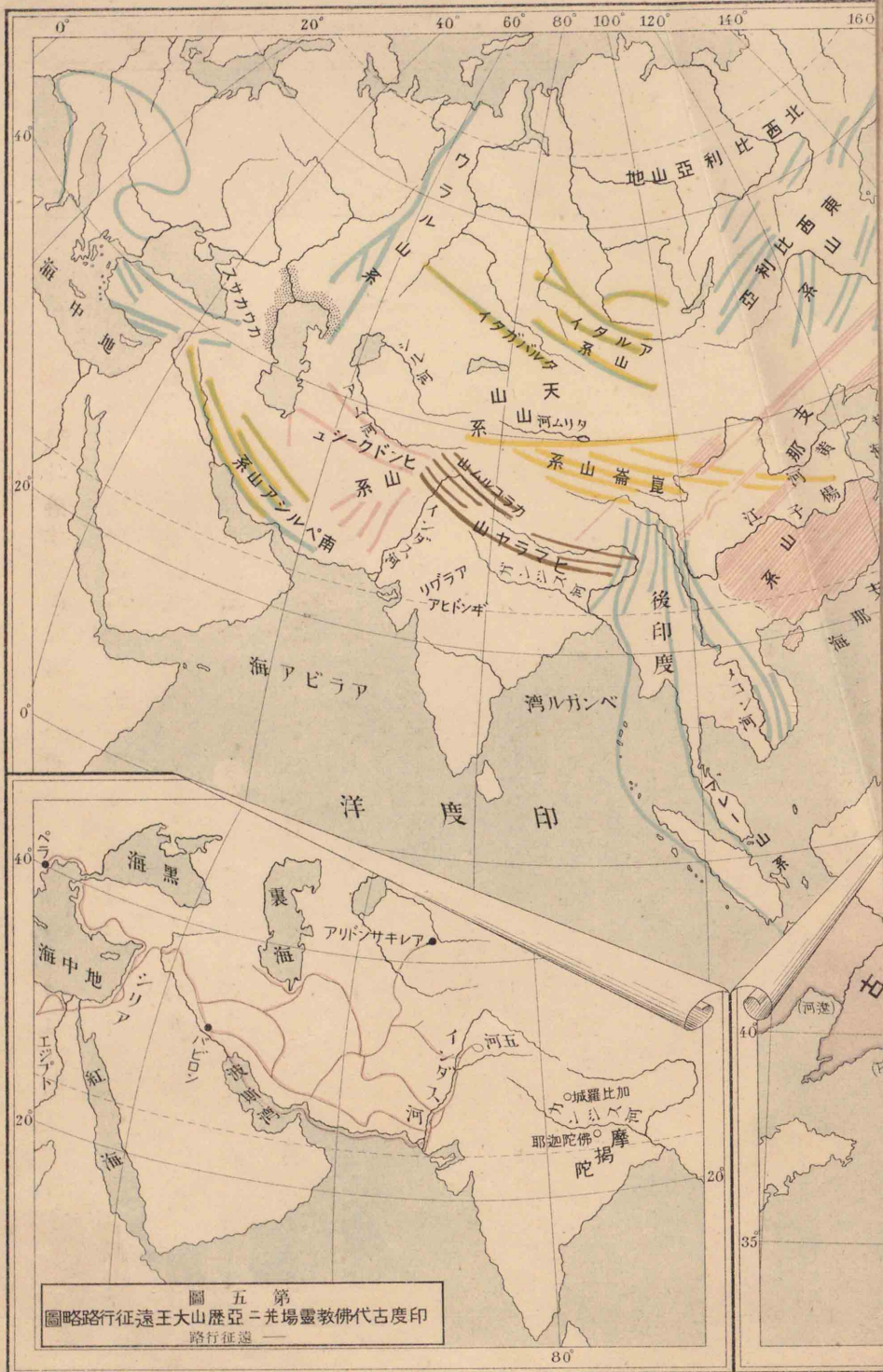
此時代に於ける東洋史上の特色は、歐人西勢の東漸なり。近古時代に其端を開きたる歐人東漸の勢は、此時代に至りて益々強大となり、支那方面に於ては、此時代の初め、一時の隆盛を極めたる清國も、亦歐人の壓迫を被り、外邊及び海岸要地の歐人に蠶食せらるゝ者少からず。日清戰爭によりて、其弱を天下に示すに至れり。其版圖は依然として亞細亞の一大國たる清國も、列強の勢力競争地となりしも、今や保國改新の氣運漸く振興しつつあり。朝鮮は舊に依りて弱小、日清戰爭後、其國號を大韓と改めたるも、其國勢振はず、其國は列強の勢力競争場裡たりしが、日露戰役後、終に我日本國の保護指導及び監理をうくることとなれり。印度は緬甸と共に英國に兼併せられ、安南、交趾支那地方は佛國に、西比利亞及び中亞の一部は露國に併吞せられ、其他獨蘭、葡米の四國も、東洋に其屬領地を有し、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

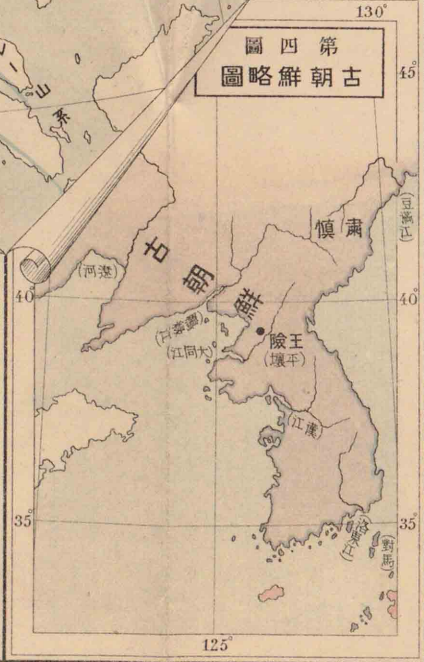
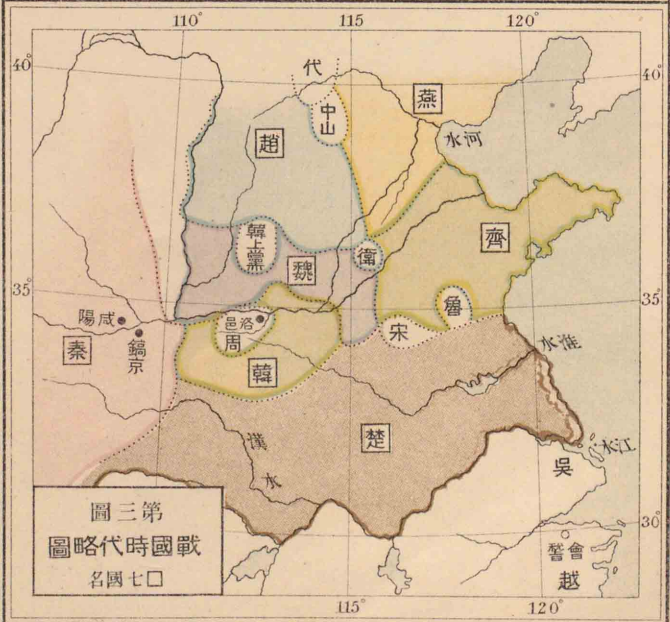
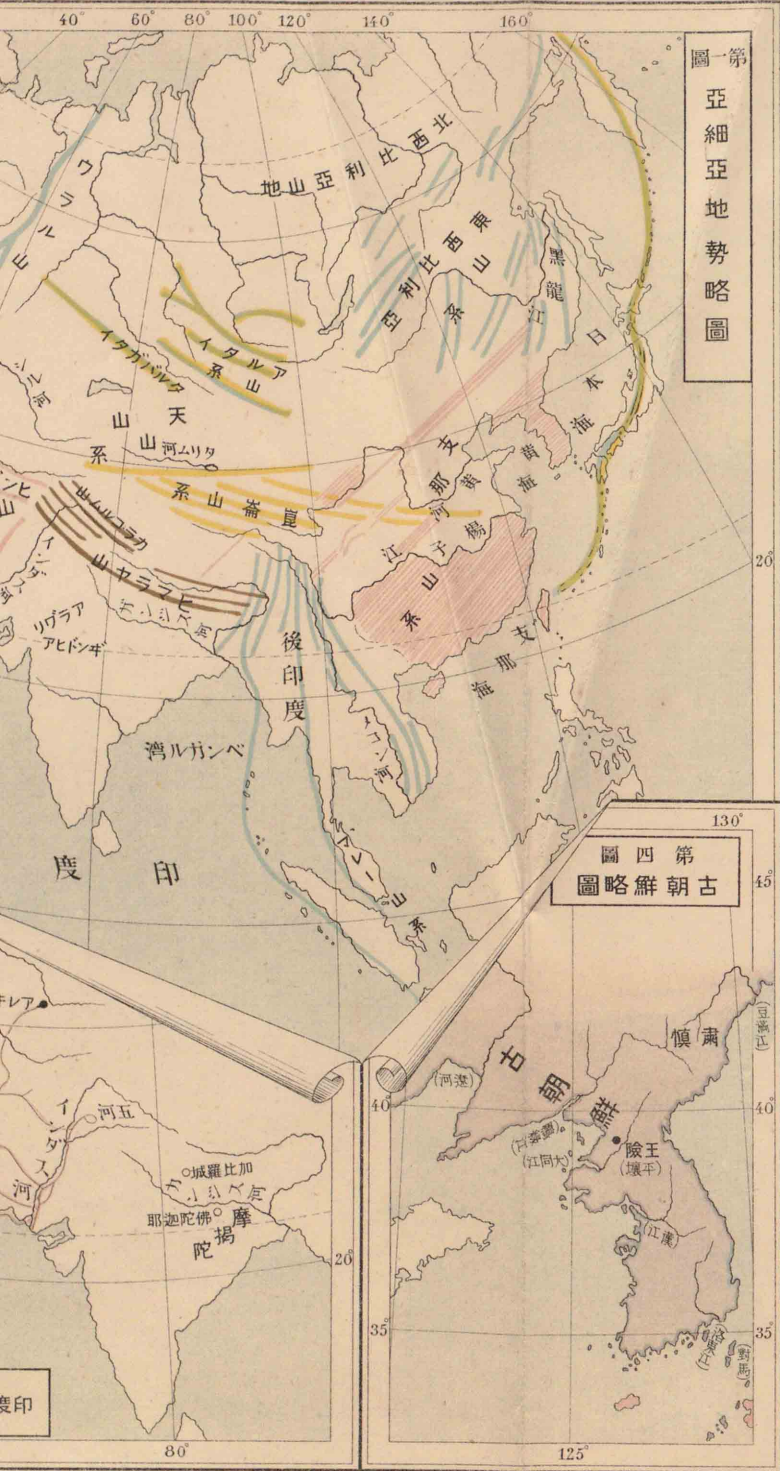
亞細亞大陸の過半は、已に歐人の掌中に歸し、(地圖参照)亞細亞大陸中、大約  
 一百分之五十七は露英佛三國の領地なり、廣大なる亞細亞大陸の中、國家  
 の體面を有する者は、我が日本の外に、清、韓、暹、羅、波斯、及びアフガニスタン、あ  
 るのみ、而して清、韓二國の勢は上記の如く、暹羅は英佛二國の間に挟まり、  
 波斯とアフガニスタンは南英、北露の兩勢力に制せられて、自ら振ふこと能  
 はず、獨立強國の名實完全なるは、ひとり我が日本國あるのみ。

一 二 三 四 五 六

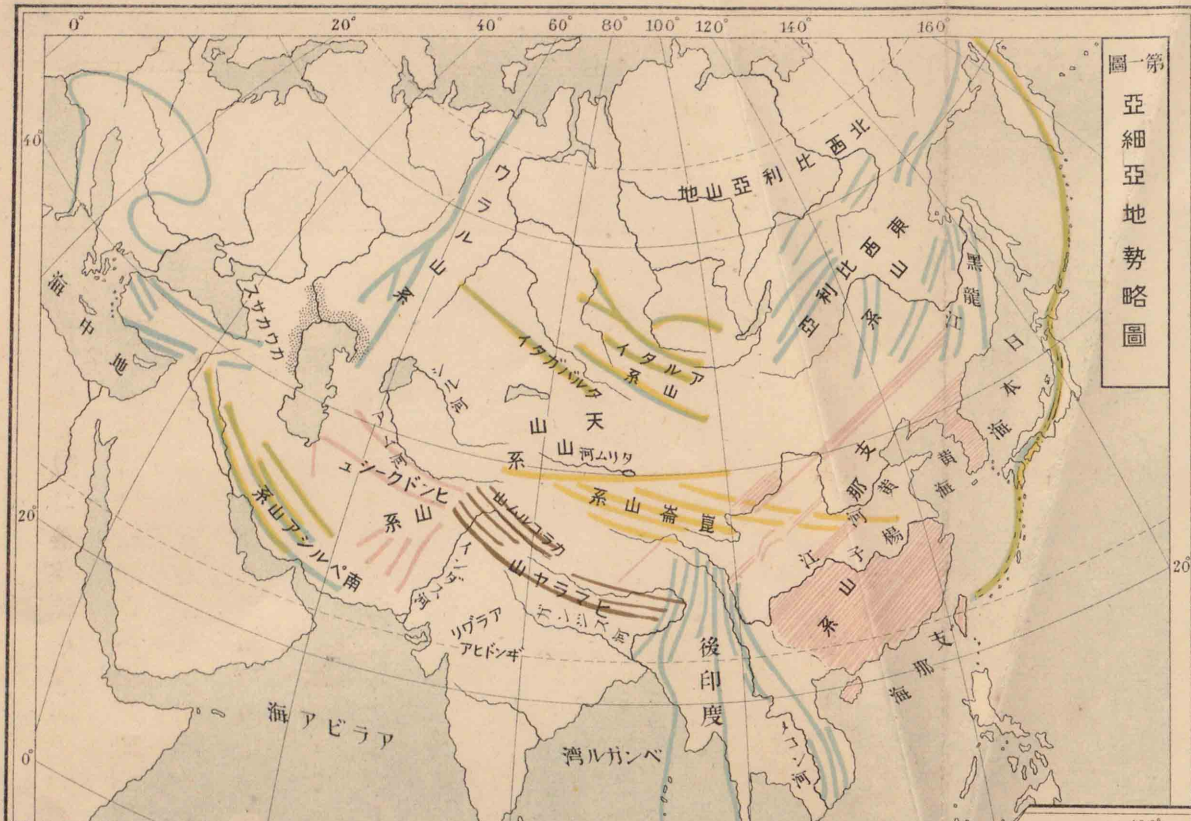
### 修訂東洋歴史終



第五圖 印度古佛敎場並亞歷山大王遠征略圖  
 遠征路行



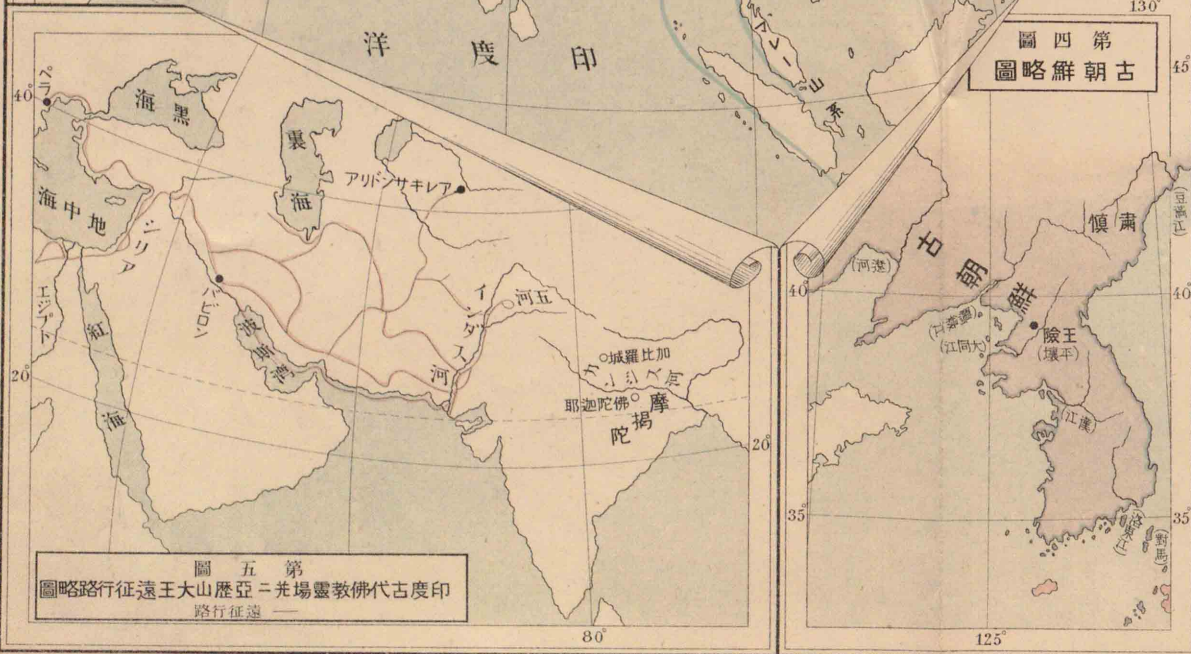




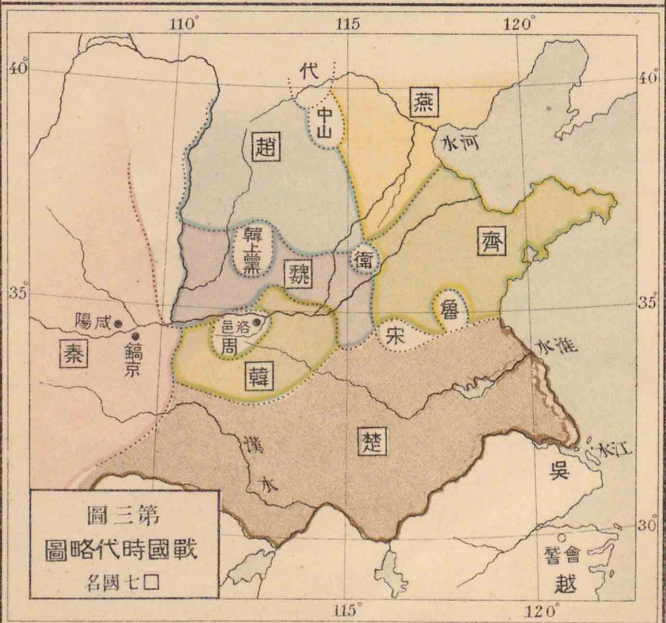
圖一第  
亞細亞地勢略圖



圖二第  
圖略居雜族異諸 = 并國列人漢代時秋春  
國列秋春 — 周 □ 都禹(三) 都舜(二) 都堯(一)



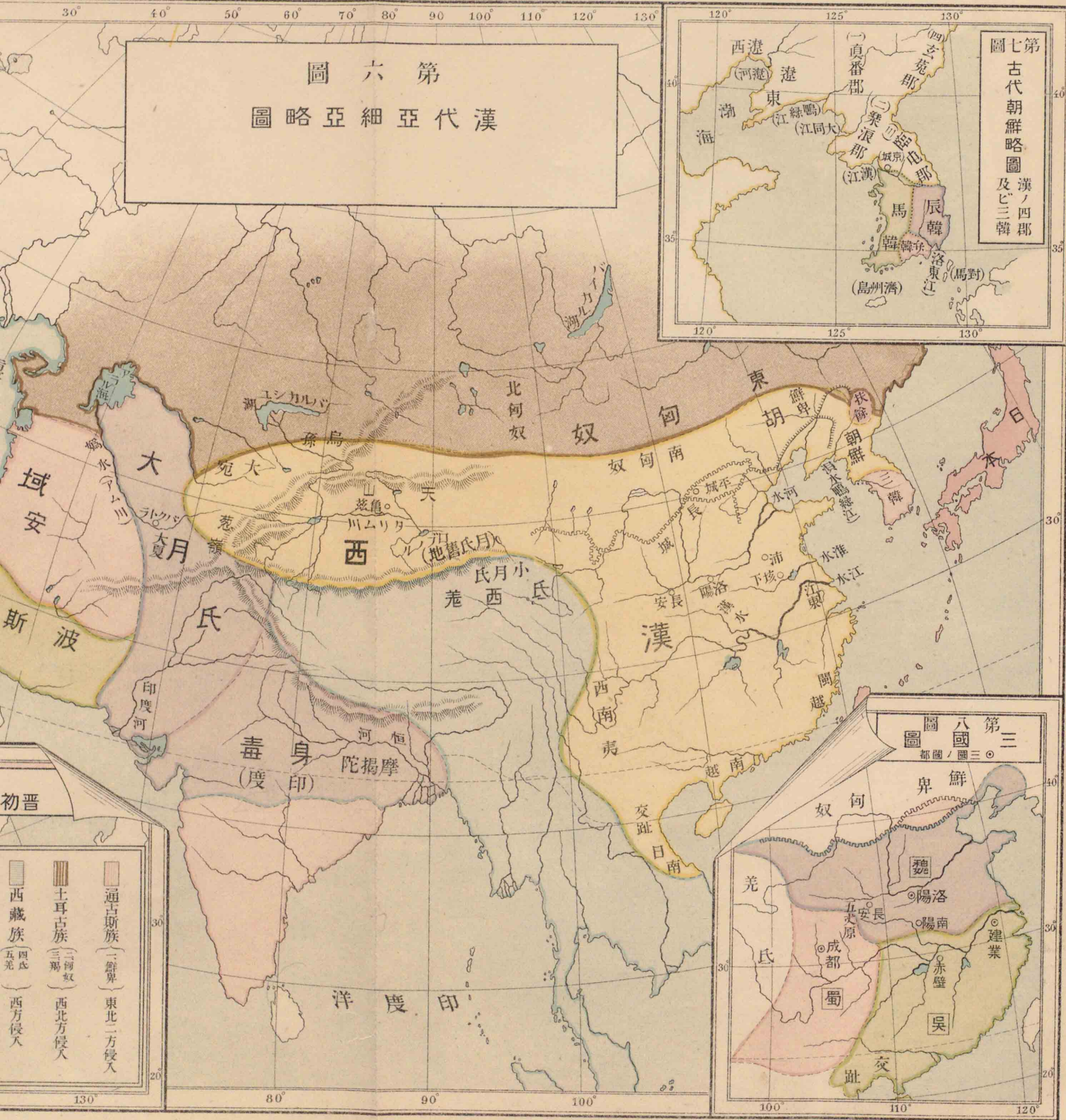
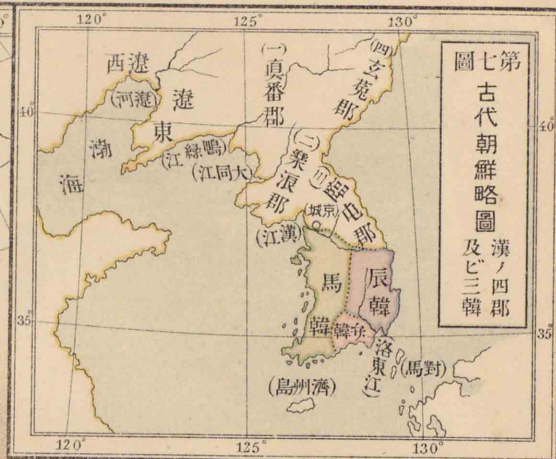
圖五第  
圖略路行征遠王大山歷亞 = 并場豐教佛代古度印  
路行征遠 —



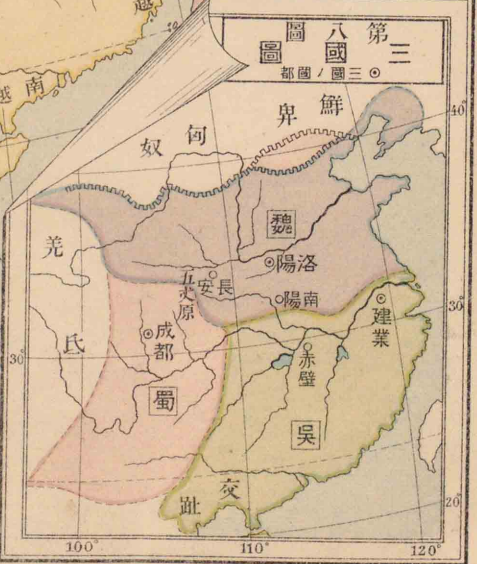
圖四第  
圖略鮮朝古

圖三第  
圖略代時國戰  
名國七口

圖六第  
圖略亞細亞代漢

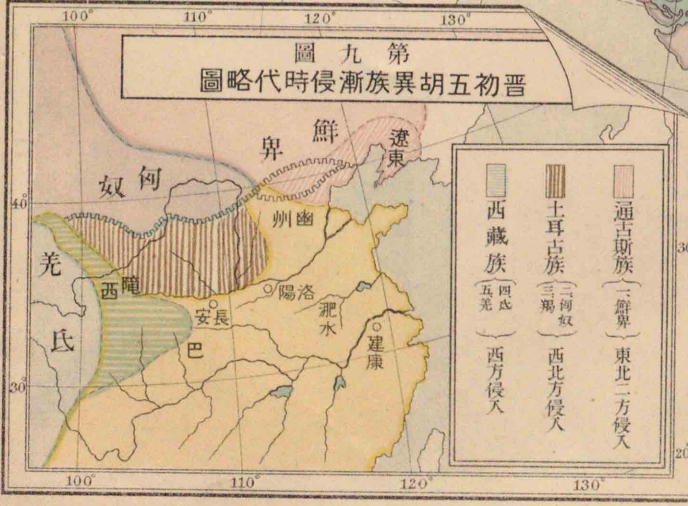
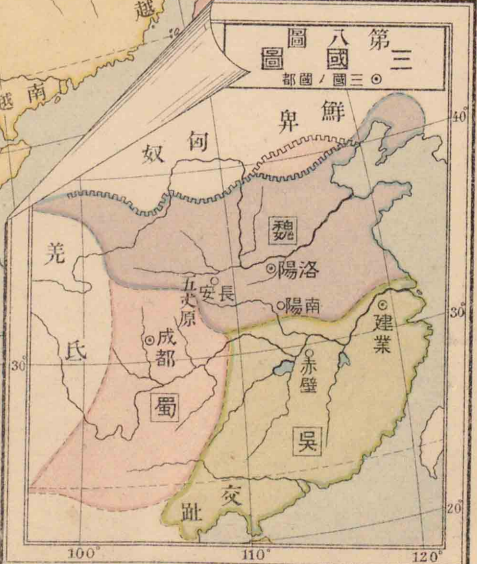
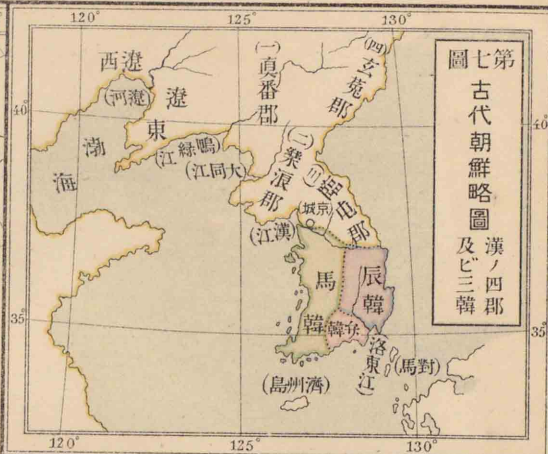
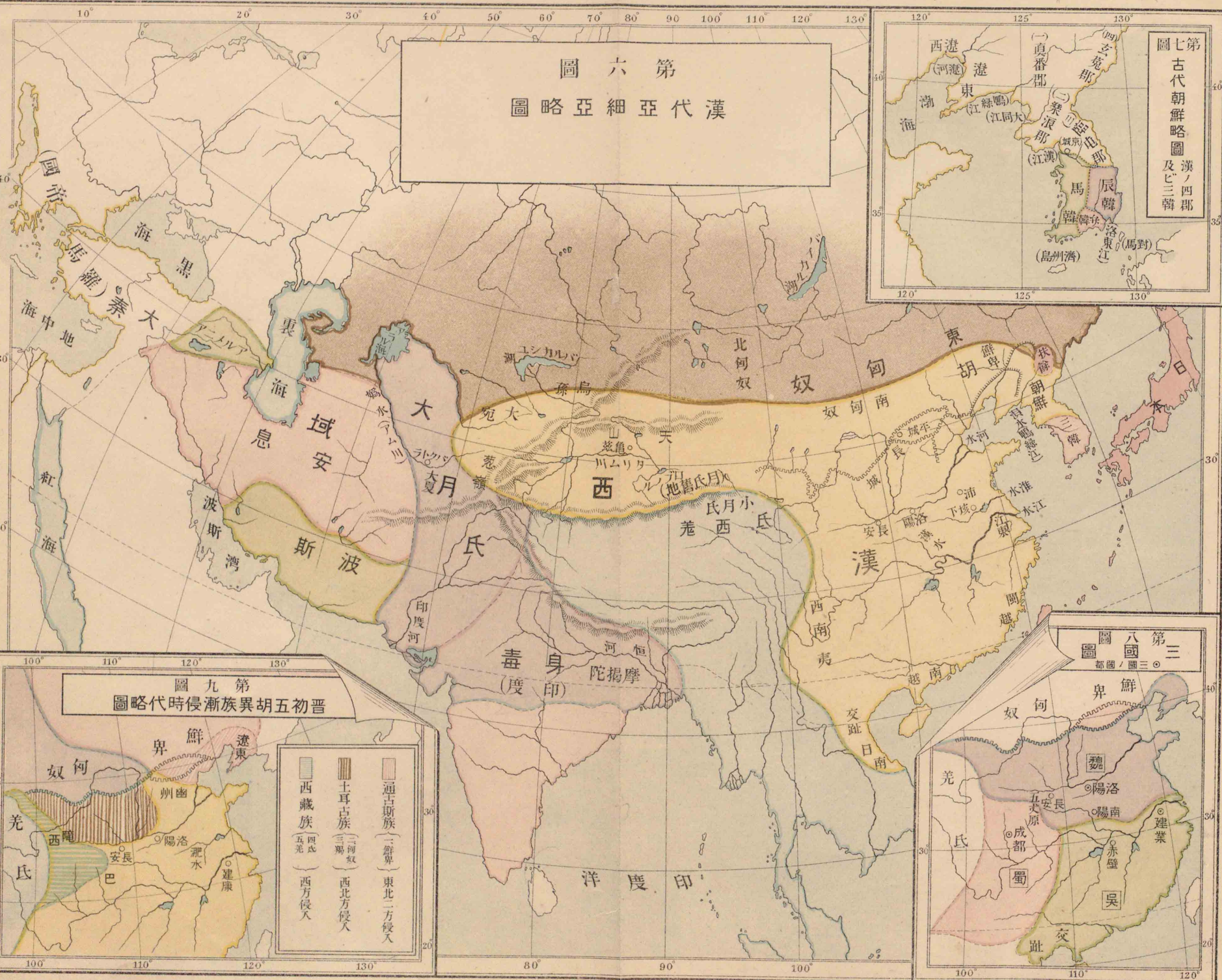


圖八第  
都國ノ圖三



通古斯族 (二部算) 東北ノ方侵入  
 土耳古族 (三部算) 西北ノ方侵入  
 西藏族 (四部算) 西方侵入  
 西方侵入

圖六第  
圖略亞細亞代漢

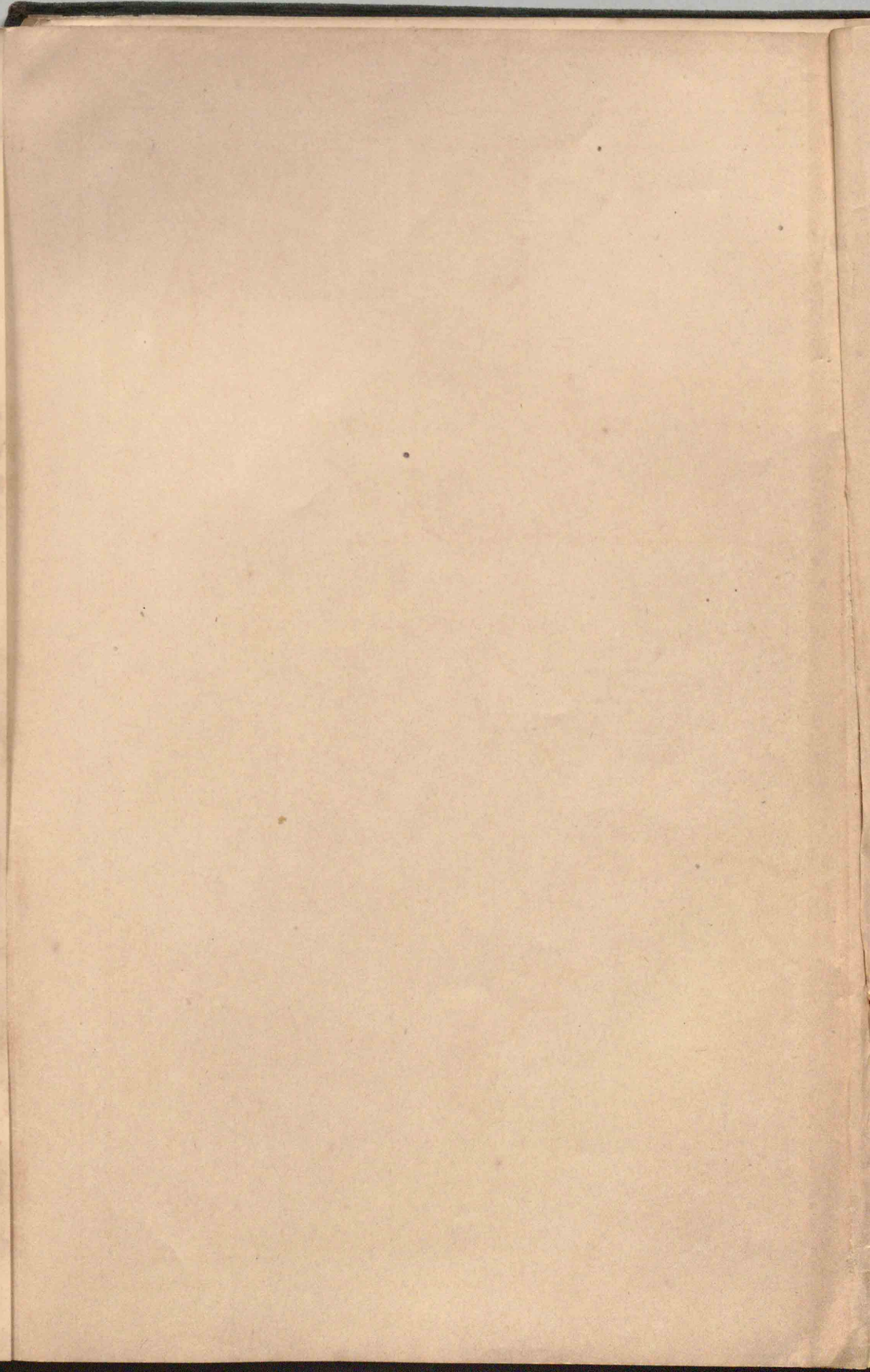


圖九第  
圖略代時侵漸族異胡五初晉

通古斯族 (鮮卑)	東北方侵入
土耳其族 (匈奴)	西北方侵入
西藏族 (四氏)	西方侵入

圖八第  
蜀漢

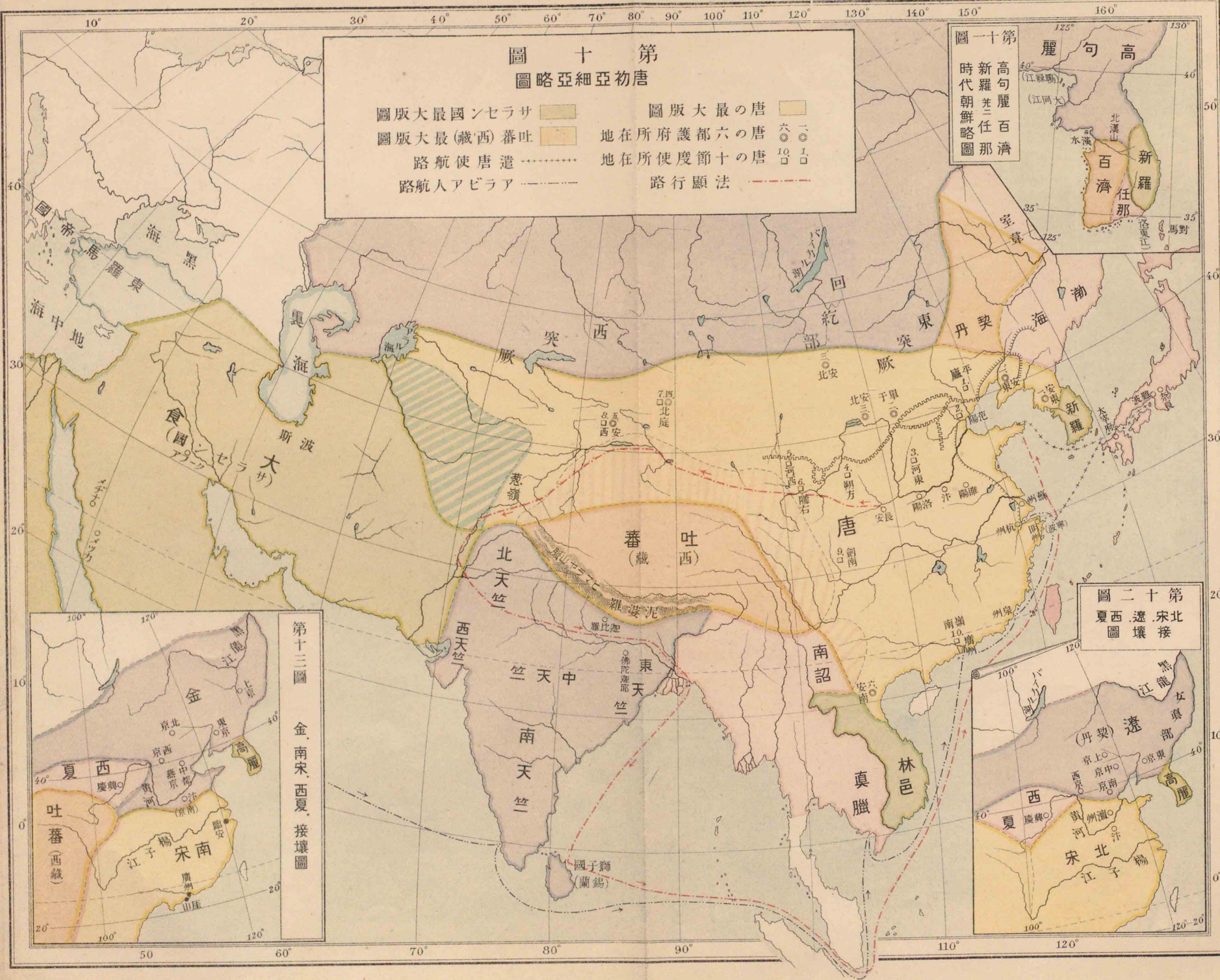
圖九第  
圖略代時侵漸族異胡五初晉



第十圖  
高麗新羅百濟  
任那

第十圖  
唐初亞細亞略圖

圖版大最國ノセラサ	圖版大最の唐
圖版大最(藏西)蕃吐	地在所府護都六の唐
路航使唐遣	地在所使度節十の唐
路航人アピラア	路行顯法



第二十圖  
遼宋北境接壤圖

第十三圖  
金南宋西夏接壤圖



圖四十第  
 圖略陸大兩歐亞代時盛極人古蒙  
 路要通交陸大亞細亞  
 路歸上海及路通行旅地內那支ロポコルマ  
 路軍進歐中人古蒙

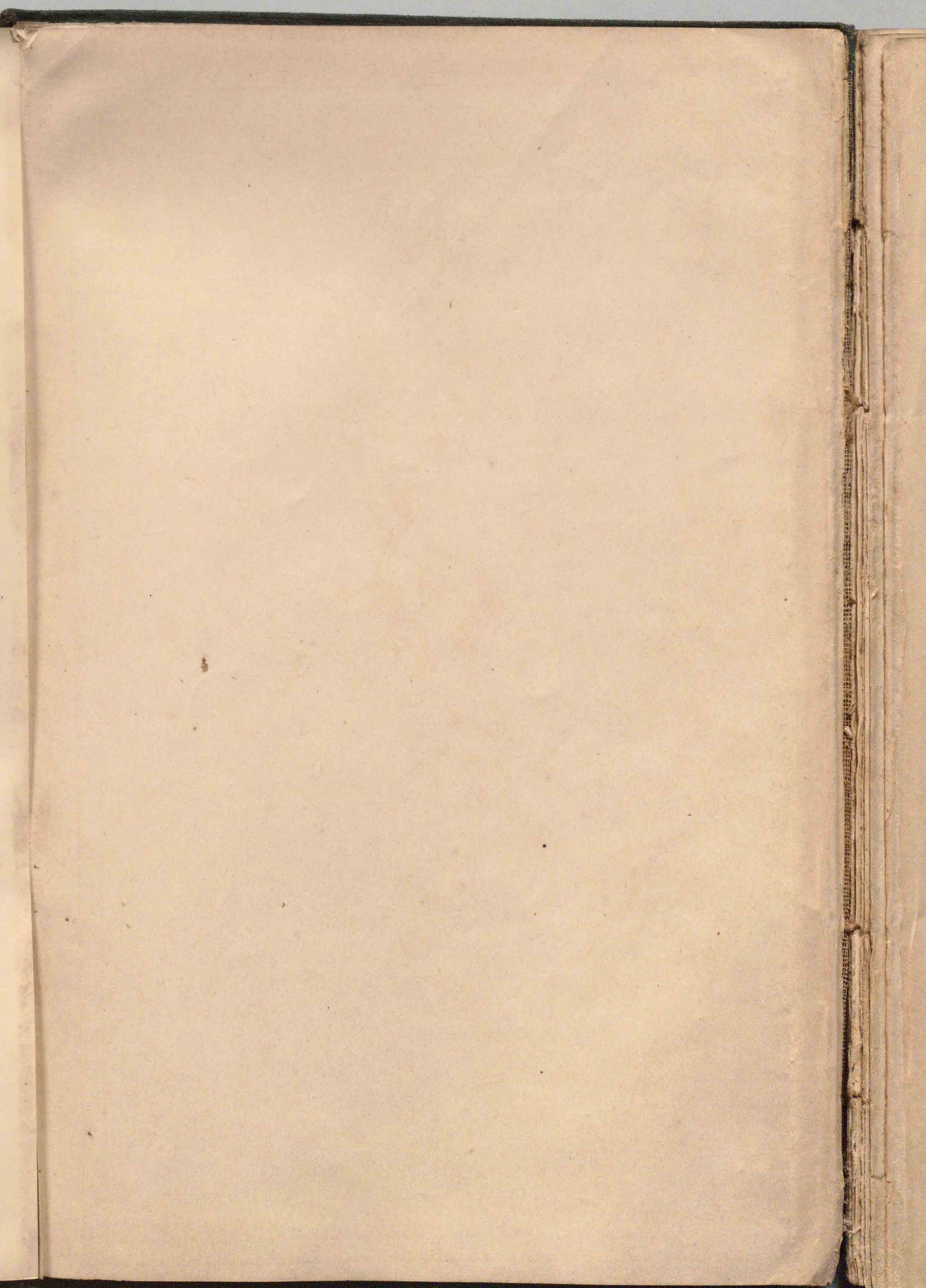
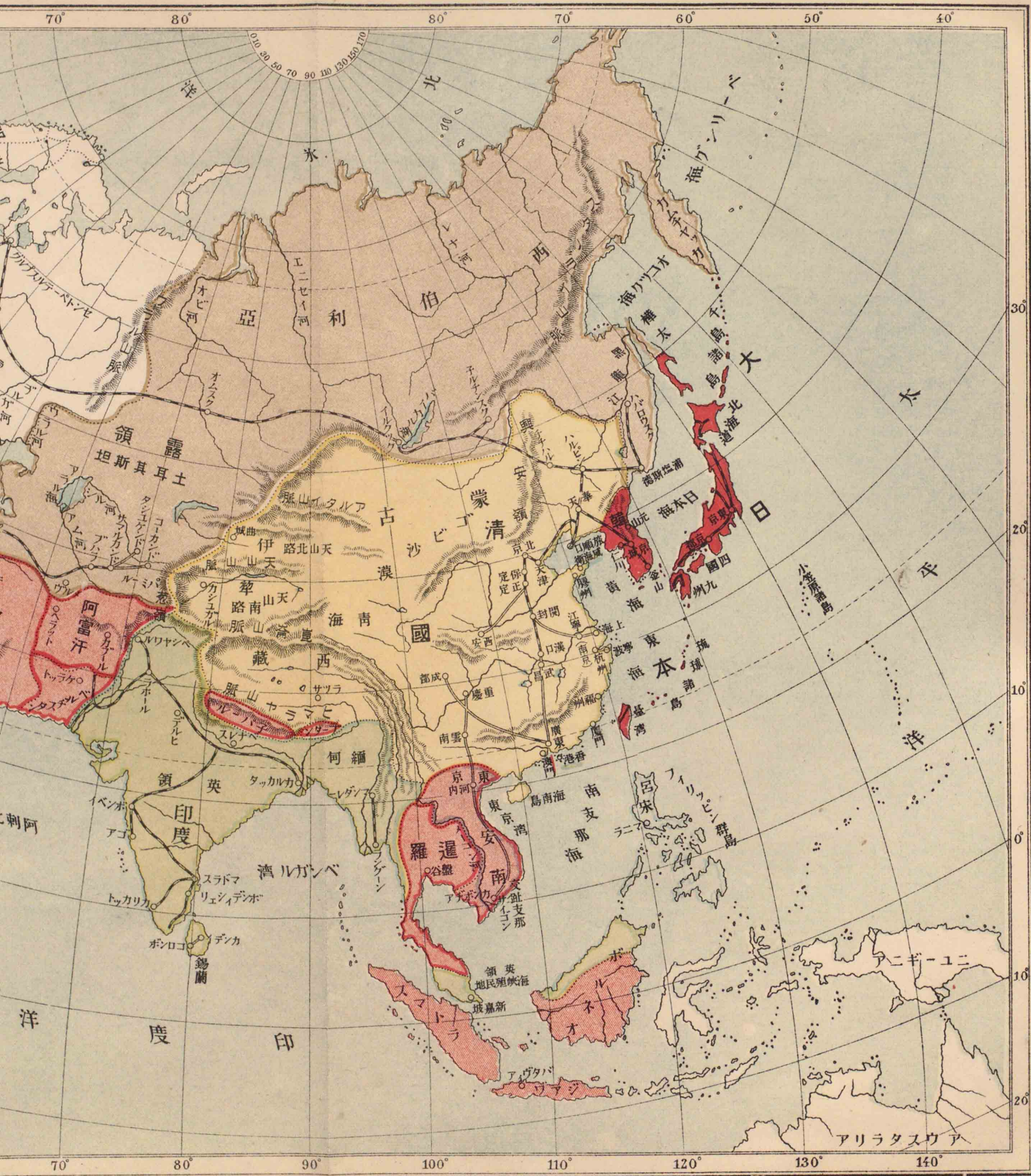
圖六十第  
 豐臣秀吉征韓略圖  
 加藤清正遠征路  
 小西行長遠征路



圖四十第  
 蒙古極盛時代亞細亞大陸交通要路圖  
 亞細亞大陸交通要路  
 蒙古西征遠征路  
 蒙古征韓秀臣加正遠征路

圖五十第  
 蒙古初帖木兒帝國略圖

圖六十第  
 蒙古征韓秀臣加正遠征路  
 小西行長遠征路







發行所

東京市京橋區南傳馬町一丁目

會社資 吉川弘文館



印刷所

內外印刷株式會社  
東京市本所區番場町四番地

印發 刷行 者兼

代表者 會社資 吉川弘文館  
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

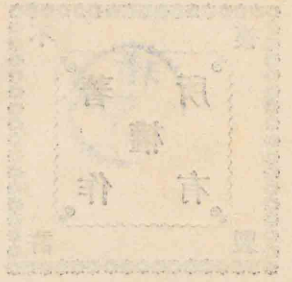
著者 中村久四郎

明明明明明明明明  
治治治治治治治治  
四四四三三三三三  
十十十十十十十十  
一十一八八八七七  
年年年年年年年年  
二二二九九二二二  
月月月月月月月月  
二十廿廿十五十五廿二  
十五八五十五七十  
日日日日日日日日  
訂訂修修第第訂訂發印  
正正訂訂三三正正  
第第第第再再  
五五四四版版  
版版版版發發  
發發發發發發  
行行行行行行行行

修訂東洋歷史  
定價金七拾錢



寶林韻



韻部  
韻目  
韻字  
韻法  
韻例  
韻譜  
韻圖  
韻略  
韻林  
韻海  
韻府  
韻庫  
韻苑  
韻園  
韻圃  
韻林  
韻海  
韻府  
韻庫  
韻苑  
韻園  
韻圃

韻部  
韻目  
韻字  
韻法  
韻例  
韻譜  
韻圖  
韻略  
韻林  
韻海  
韻府  
韻庫  
韻苑  
韻園  
韻圃

寶林韻

寶林韻

730

奧

恒

登

6



広島大学図書  
2000087009

